

平成二十五年 度

博士論文（指導教授 藏中 しのぶ）

『和名類聚抄』と『医心方』

— 引用書目の比較を中心に —

大東文化大学大学院外国語学研究科  
日本語文化学専攻博士課程後期課程  
(学籍番号 一一二三三一〇四)

李 芋

序章	1
一、問題の所在と本研究の意義	1
二、本研究の方法と構成	2
第一章 『和名類聚抄』と『医心方』	7
第一節 『和名抄』とその諸本	7
第二節 『医心方』とその諸本	12
第三節 『和名抄』と『医心方』との関係	16
第二章 『和名類聚抄』所引「病源論」攷	25
第一節 「病源論」と『諸病源候論』	25
第二節 『諸病源候論』「病源」のみの引用	33
第三節 『諸病源候論』「病候」のみの引用	51
第四節 『諸病源候論』「病源」と「病候」の引用	79
第五節 『諸病源候論』本文に確認されない引用	87
第六節 『和名抄』『医心方』における「病源論」	90

第三章 『和名類聚抄』所引「黄帝内经」攷	93
第一節 『和名抄』における「黄帝内经」の引用	93
第二節 「黄帝内经」について	95
第三節 『黄帝明堂经』を引用する医書とその復原	98
第四節 『和名抄』における「黄帝内经」の引用手法	100
第五節 『和名抄』における「黄帝内经」	106
第四章 『和名類聚抄』所引「針灸经」攷	108
第一節 『和名抄』における「針灸经」	108
第二節 『和名抄』と『黄帝明堂经』の類似本文	111
第三節 『和名抄』と『黄帝明堂经』の異質本文	114
第四節 『和名抄』と『医心方』の独自本文	119
第五節 『和名抄』における「針灸经」	127
第五章 『和名類聚抄』所引「太素经」攷	129
第一節 『和名抄』における「太素经」の引用	129
第二節 「太素经」注について	130

第三節『黄帝内経太素』と『黄帝内経靈枢』……………132

第四節『和名抄』『医心方』における「太素経」……………136

終章……………137

一、『医心方』の引用書目……………137

二、「脈論」について……………139

三、今後の課題……………142

附録……………144

一、『日本国見在書目録』医方家……………144

二、本研究における『医心方』の引用本文……………146



## 序章

### 一、問題の所在と本研究の意義

『和名類聚抄』（以下『和名抄』と略称）は日本最初の分類体の漢和辞書、承平年間（九三一―九三八）に醍醐天皇皇女勤子内親王の命によって、源順が撰進した。漢語を部門別に類聚・掲出し、音義を漢文で注し、万葉仮名で和訓を加え、掲出語について漢籍・和書を博搜して考証・注釈を加える。『和名抄』には十卷本系と廿卷本系の二系統の写本が存在し、十卷本系は掲出語を二四部一二八門に、廿卷本系は三二部二四九門に分類する。

一方、『医心方』は日本の現存最古の医学書、鍼博士・丹波康頼の撰になる。円融天皇の天元五年（九八二）に撰述を終え、浄書のうえ、永観二年（九八四）奏進におよんだとされる。『医心方』全三十巻は、隋唐の医書百余点を引用して、各種疾患の病源・病候を述べ、さらに、治療法として本草・明堂・孔穴・養生・服石・食餌などに及ぶ。両書の成立には、次のような接点がある。

第一に、『和名抄』の成立は、『医心方』の成立に先立って、五十年先である。

第二に、源順（九一一―九八三）と丹波康頼（九一二―九九五）の年齢差は一歳であり、源順は明経の学、丹波康頼は医学を学んだ。学問の質こそ異なるが、平安中期のほぼ同時期に宮廷社会に生き、各々に漢籍を学んでいる。

第三に、『和名抄』『医心方』はともに、先行する文献から必要な項目・文章を抽出・類聚・編纂して成った類聚編纂書である(一)。『和名抄』の引用書目は三百数十種、『医心方』の引用書目は二八一種にのぼる(二)。しかも、両書の引用書目には、共通するものが

三十数種確認される。

そこで、本研究では、『和名抄』『医心方』が成立した平安時代中期に視座を置き、明経・医学という異なる学問の立場から、同じ書物を抽出・類聚・編纂する作業をおこなった源順・丹波康頼の編纂意識のちがいを考察するとともに、平安中期の律令官人の類書享受の位相、学問のありかたを考察するための一助とする。

## 二、本研究の方法と構成

本研究は『和名抄』『医心方』に重複する引用書目に着目し、出典論・源泉論の立場から、それぞれの引用手法と意識について考察する。

また、出典にあたる中国の医書、あるいは佚文が見られる中国の医学類書を視野に入れ、古写本あるいは刊本をできる限り収集し、比較対照表で一字一句を照合しながら読み解く。

本研究は、次のような構成とする。

「第一章『和名類聚抄』と『医心方』」では、本研究の研究対象とした『和名抄』『医心方』それぞれの著者・成立年代・諸本を紹介し、両書の関係と先行研究をまとめた。また、『和名抄』と『医心方』の引用書目について、重複するものを一覧にし、分類した。

「第二章『和名類聚抄』所引「病源論」攷」では、『和名抄』と『医心方』が、同じ「病源論」を引用している事実に着目した。

『医心方』に最も多く引用される書目が、「病源論」五五五例である。「病源論」（『諸病源候論』）は『医心方』編纂に大きな影響を与え、『医心方』のベースとされた医書であった。一方、『和名抄』にも、「病源論」の引用例が二七例確認される。『和名抄』における「病源論」の引用例二七例について、『諸病源候論』および『医心方』本文と比較し、『和名抄』の『諸病源候論』の引用手法と、『医心方』との引用態度のちがいを明らかにすることを目的とする。そこで、本文を精査したところ、次のような特徴が見いだされた。

第一に、『医心方』における『諸病源候論』の引用例二七例は、夙に小曾戸洋氏が指摘されたように、『医心方』は『諸病源候論』「脈論」の部分を採録しない。医学書だけあって、『医心方』は「脈論」以外の本文については、ほぼ手を加えることなく、そのまま長文を引用する。

第二に、『和名抄』における『諸病源候論』の引用例二七例のうち、十九例は、『諸病源候論』の項目冒頭部の文を採録する。これは、『和名抄』が和名を示すことを目的とした漢和辞書であるため、和訓の掲出に最小限必要な語彙と語義にしぼって、『諸病源候論』を引用したことを示すものと考えられる。

第三に、『和名抄』の「病源論」引用例二七例のうち、七例は『諸病源候論』の項目冒頭部ではない本文を引用する。そこには、『和名抄』編纂にあたって、源順が用いた『諸病源候論』の引用手法が端的に示されていると考えられる。

「第三章『和名類聚抄』所引「黄帝内经」攷」では、『和名抄』における「黄帝内经」の引用例三例の出典を考察した。『和名抄』が引用する「黄帝内经」本文について、狩谷掖斎は『黄帝内经明堂類成』と推定した。しかし、『明堂類成』は散佚し、現在では一巻しか伝存していないため、その本文を直接に確認することができない。しかし、『医心方』をはじめ、唐代の医学類書『千金方』『外台秘要方』の引用状況があきらかにされ、また、『黄帝明堂经』の復原本文が作成された。

これら唐代医書の本文と、『和名抄』『医心方』所引『明堂経』本文を比較したところ、『和名抄』の引用手法と編纂意識は、『医心方』のと異なるところが見られる。すでに前章で論じたように、専門的な医書である『医心方』は、『明堂経』ほぼ全文から、原典の文章に手を加えず、長文をそのまま引用する。しかし、分類体漢和辞書である『和名抄』は、和訓の掲出に最小限必要な語彙・語義のみを引用している。

また、『医心方』半井家本に、わずか二カ所ではあるが、『和名抄』諸本と同じ文字の誤りが確認された。このことは、平安中期に日本に伝わった『明堂経』の本文には誤りがあつた可能性を示唆する。

「第四章『和名類聚抄』所引「針灸経」攷」では、『和名抄』所引「針灸経」八例を考察する。「針灸経」は佚書である。しかし、『医心方』を含め、『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』から『明堂経』の引用部分に属する本文が確認された。それらの医書を『和名抄』所引「針灸経」本文と比較したところ、次のように推定することができる。

第一に、『和名抄』所引「針灸経」八例中二例は、他の医書と類似の本文が確認され、「鍼灸経」は『明堂経』と出典関係をもつ書物であると考えられる。この部分の本文は「宋改」を経ても、改変されず、安定している本文である。

第二に、『和名抄』所引「針灸経」八例中三例は、他の医書と異質の本文が確認され、その本文は「針灸経」注の本文である可能性が高い。しかも、内容から見ると、他の医書と矛盾が生じ、これは日本で和訓と合わせて付された「針灸経」の注であると推測する。

第三に、『和名抄』所引「針灸経」八例中三例は、『和名抄』『医心方』の独自本文が確認される。現存する唐代の医書にない本文はかつて存在しており、『和名抄』『医心方』はその伝本を参看して本文を引用した。つまり、中国では失われた『明堂経』の本文が、日本の『和名抄』『医心方』には、独自に残存しているという解釈である。

「第五章『和名類聚抄』所引「太素経」攷」では、『和名抄』と『医心方』が共通して『黄帝内経太素』を引用する二例について検討した。

第一に、この二例はともに、『黄帝内経太素』卷五冒頭部の文章から抽出された。一例は『和名抄』『医心方』は反切の表記まで『黄帝内経太素』のものとは一致する。

第二に、もう一例は『和名抄』の引用本文は、『黄帝内経太素』卷五の第一紙は欠損するため、その全貌が見ることができない。しかし、『医心方』と『靈枢』はこの部分の文章が残っている。それらの医書を比較したところ、今日に伝わる『靈枢』に、『黄帝内経太素』楊上善の注とみなすものが確認された。

「終章」では、『医心方』の引用書目を整理し、「脈論」の考察もしてみた。最後に、今後の課題について述べた。

注

(1) 菊地仁「〈類書〉の問題系―「本文」を「類聚」「部類」すること―」(『和漢比較文学』第二七号、和漢比較文学会、二〇〇一年八月)。

相田満「オントロジとは何か―和漢古典学のオントロジー―」(『和漢古典学のオントロジー1』、科研報告書、代表・相田満、二〇〇四年三月)。

同「『標題』のさまざま―現代と脱領域的な視点から―」(『標題文芸1』、科研報告書、代表・相田満、二〇〇三年三月)。

藏中しのぶ「類聚編纂書と出典論」(「学界時評・上代」『文学・語学』一八一号、全国大学国語国文学会、二〇〇五年四月)。

(2) 藏中進「序にかえて」(藏中進・林忠鵬・川口憲治『「倭名類聚抄」十卷本・廿卷本所引書名索引』、勉誠出版、一九九九年五月)。

尹仙花「『和名類聚抄』引用書目の研究―『法苑珠林』を中心に―」(大東文化大学平成二十二年度博士論文)。

アントニオ・マニエーリ「『和名類聚抄』「牛馬毛」門の研究―古代日本文化における馬の毛色名―」(大東文化大学平成二十四年度博士論文)。

羽田帆奈美「『和名類聚抄』「楽器類」所引『律書楽図』攷」(『水門―言語と歴史―』第二十四号、勉誠出版、二〇一三年三月)。  
拙稿「医心方の基礎的な研究」(『外国語学会誌』第四二号、大東文化大学外国語学会、二〇一三年三月)。

# 第一章 『和名類聚抄』と『医心方』

## 第一節 『和名抄』とその諸本

### 一、『和名抄』の概要

『和名類聚抄』（以下『和名抄』と略称）は日本最初の分類体の漢和辞書、承平年間（九三一―九三八）に醍醐天皇皇女勤子内親王の命によって、源順が撰進した。『和名抄』には十卷本系と廿卷本系の二系統の写本が存在する。

『和名抄』の構成には、次のような特徴が見られる。

第一に、『和名抄』は漢語を部門別に類聚・掲出し、十卷本系は掲出語を二四部一二八門に、廿卷本系は三二部二四九門に分類する。

第二に、音義を漢文で注し、万葉仮名で和訓を加える。『和名抄』は掲出語に対して、「和名」「和訓」「俗云」という形式で細かく和訓を示しているが、これに関して川瀬一馬氏は次のように述べられた。

国語意識に自覚した態度で撰者源順が本書を撰述してゐることが察せられるが、これは同じ時代に古今和歌集が勅撰せられ、紀貫之が土佐日記を著した事実等と相通ずる精神の現れと見ることが出来る(一)。

第三、掲出語について漢籍・和書を博搜して考証・注釈を加える。『和名抄』に引用される文献は、漢籍・和書・仏書合わせて三百

数十種にのぼる(2)。尹仙花氏は『和名抄』の引用書目について、次のように述べられた。

『和名抄』の引用書目に関する問題は重大な研究課題である。『和名抄』は散佚した和書・漢籍を引用しているが、これにより散佚書目の復元が可能になるからである。また、『和名抄』の引用書目と現存書目の本文を比較検討することにより、平安時代の文人層で読まれた書物の系統も確認でき、これも研究資料として広く使われている。しかしながら、『和名抄』の引用書目の中には原典からの直接引用ではなく、間接的に引用した書目の存在も確認されている(3)。

## 二、撰者源順について

『和名抄』の撰者である源順に関しては、岡田希雄氏の「源順伝及年譜」があり、ここでは、源順の略伝に留める。

源順(九一一〜八三)は、平安中期の文人・歌人であり、嵯峨源氏挙の子、母は藤原氏とも伝えられるが未詳である。承平年中(九三一〜三七)、順は、母が出仕している勤子内親王のために『和名抄』を撰述した。その後、天曆五年(九五二)梨壺の五人の一人に選ばれ、撰和歌所において『万葉集』の読解を主導し、さらに、九五一年には、第二の勅撰和歌集『後撰和歌集』の撰集に従事する。同十年(九五六)に勘解由判官に任ぜられ、天徳三年(九五九)内裏詩合、同四年(九六〇)内裏歌合の作者となり、文人・歌人として認められるようになった。以後、応和二年(九六二)民部少丞、同三年大丞、康保元年(九六四)下総権守、同四年和泉守、天元二年(九七九)能登守に任ぜられ、従五位上に至り、永観元年、七十三歳で卒した(4)。

『和名抄』以外にも源順は多くの詩文を後世に残している。源順の詩文に関しては、一般的に、源氏という王統の家門や学問の業績・

功勞に比して、官位が伴わないことから、不遇・沈淪、無常の意識を強く抱き、詩歌などにそれを託したと評されている。これについて神野藤昭氏は次のように述べている。

みずから不遇をテーマとする「五嘆吟并序」を書いたのは、天慶六、七年の秋、順三十四、五歳のことであった。藤英に重なる年齢のことである。彼の志をえない不遇意識は、長く本懐を遂げない事情に由来することはまちがいない。

しかしながら、一方『倭名類聚抄』を著したのは、彼がまだ若年のことであったし、撰和歌所の一員に抜擢された時も学生の身であった時である。今日、彼の業績としてまっさきにあげられているのは、この二つであるが、ともに彼が文章生から官途に就くより以前のことに属する。彼の文学活動の本質は、既にこの間に養われたとみることが肝要ではないか(5)。

さらに、尹仙花氏は源順の作品特徴について、次のように述べられた。

源順の詩歌をはじめとする文学作品には、列挙の体裁をとるもの、類聚編纂を意図した集成的なものが目立つ。こうした源順の作品は、形式的・分類的で技巧が先行し、言語遊戯的興味が払拭しきれておらず、また、言葉の論理に頼る表現も目立つという評価もある。しかし、漢文にも優れた才能を持つ源順の手になる『和名抄』は、日本文学史上で最古の分類体の漢語辞書としての位置づけられ、現代に至るまで、後世の人々が平安時代の日本語を研究するための重要な資料としての役割を果たしており、それ自体が研究対象としての価値も有している(6)。

### 三、『和名抄』の諸本と本論文の底本

『和名抄』には、完本・零本も含めて、数多くの写本が存在する。江戸時代には、十巻本は写本の形で流布したために、ほとんど版行されることはなく、廿巻本が主として刊行された。また、江戸時代には狩谷掖齋が諸本を集め、『箋注和名類聚抄』を撰述した。狩谷掖齋が挙げた十巻本系の諸本は、京本、伊勢本、昌平本、尾張本、曲直瀬本、下総本の五本である。

宮沢俊雅氏は『和名抄』の写本を整理し、その系統をまとめたが、『和名抄』十巻本系諸本について次のように述べられた。

十巻本で完存あるいはほぼ完存するものは京本類と下総本であり、昌平本は六巻（巻一〜六）が現存している。これらを系統的にみれば、十巻本は下総本系昌平系に分かれ、昌平本系は更に昌平本と京本類に分かれる。また、各本の十巻本祖本からの隔たりをおおよその上中下の三段階で示せば、京本類・昌平本は「中」、「下総本」は「下」となる。下総本は十巻本本来の体例は守っているが、増注も少なくない。尾張本（巻一―二）・曲直瀬本第一冊（巻一―二）は二巻弱の現存状況のため、系統的な位置を確定することはできないが、親疎関係だけで言えば下総本に近い。祖本との関係では尾張本は「上」、曲直瀬本第一冊は「下」となる。右の状況であるので、十巻本の祖形、つまり、少なくとも二十巻本との前後を論ずる際の「十巻本」テキストは、尾張本の存する範囲ではおおむねこれに従い（他の本も当然参勘すべきであるが）、それ以外の範囲では下総本と昌平本系の共通する所を採り、もし両系背馳するときには十分な「批判」をした上であげる必要がある(7)。

本論文で主に扱うのは、十巻本系『和名抄』巻二における掲出語である。欠巻状況や諸本の系統を考慮して、本論文では狩谷掖齋校注の「箋注本」を底本とし、十巻本系京本類の「前田本」と、下総本の転写本である「天文本」を参照しながら、調査を進めることにする。

十卷本系『和名抄』「前田本」について、川瀬一馬氏は、「上巻は鈴鹿本、中・下巻は福井崇蘭館の蔵本を、文政四年狩谷掖齋が書生に書写」させて一部とし、それを前田家においてさらに新写したものであるとし、系統としては京本類に属すとされる(8)。

また、本論文が扱う「天文本」について、宮沢俊雅氏は次のように述べられた。

本書は倭名類聚抄下総本の転写本である。原書は現在を明らかにしなしが、江戸時代後期以来幾度か書写され、その転写本が各所に蔵されており、その数は国書総目録やその他の目録類で知り得る限りでも二〇本を超えている。それらの中で、今回ここに影印公刊する東京大学国語研究室蔵黒川文庫渡辺氏等旧蔵本は、最善のものであるかどうかは未詳であるが、管見に及んだ一〇本のうちでは最もよく下総本原本の体例を伝えていると思われるものである(9)。

一方、廿卷本系で狩谷掖齋が見たのは伊勢広本と那波本である。そして、掖齋以後に新出として、高山寺本、大東急本がある。これら廿卷本系諸本について宮沢俊雅氏は次のように述べられた。

伊勢広本（一―二、九―二十）と大東急本（ほぼ完存）は非常に近い関係にあり、共通祖本を想定することができるが、この共通祖本は前半（巻一―十）と後半（巻十一―二十）で異質のものである。そこで二十卷本は

A本 高山寺本（巻六―十）

B本 伊勢広本（巻一―二、九―十）、大東急本（巻一―十）

C本 伊勢広本（巻十一―二十）、大東急本（巻十一―二十）の三類に分けられる(10)。

本論文で主に扱うのは、二十卷本系『和名抄』巻三における掲出語である。高山寺本は一番古い写本として、平安末期の成立とされるが、巻一と巻二しか残っていない。伊勢広本も巻三が存在しない。そこで本論文では那波道円校注の「元和古活字本」を底本とし、「天正本（大東急本）」を参照しながら、調査を行う。

また、廿卷本系のもう一つの写本「天正本」について川瀬一馬氏は次のように述べている。

仮に天正三年（一五七五）の書写としても、『元和本』の刊行の元和三年（一六一七）よりも四十二年も古く、『伊勢本』と共に二十卷本の室町期の一つの姿を伝える。ただし、この本と『伊勢二十卷本』『元和本（の祖本）』の三本は、卷十の後半に大部の欠落を共有している。したがってこの三本は、その欠落の無い『高山寺本』『永禄本』に対して同一系統と認められる(12)。

以上、本論文では、十卷本系「箋注本」・廿卷本系「元和本」を底本とし、十卷本系京本類の「前田本」「天文本」・廿卷本系「天正本」を参照しながら考察を進める(12)。

## 第二節 『医心方』とその諸本

### 一、『医心方』の概要

『医心方』は日本の現存最古の医学書、鍼博士・丹波康頼の撰になる。円融天皇の天元五年（九八二）に撰述を終え、浄書のうえ、永観二年（九八四）奏進におよんだとされる(13)。『医心方』全三十卷は、隋唐の医書百余点を引用して、各種疾患の病源・病候を述べ、さらに、治療法として本草・明堂・孔穴・養生・服石・食餌などに及ぶ。

『医心方』に引用された中国医書のほとんどが、中国では散逸したものである。あるいは、北宋（九六〇～一一二七）に入り、中国

において印刷術は飛躍的な発達を遂げ、多数の書物が出版されるようになる。実用書である医学書は需要も多く、古医学書の校訂・出版が国家的事業として大規模に行われた。これがいわゆる「宋改」と称する事業である。「宋改」を経た書物は、校訂用に集められた写本がほぼ処分され、今日にもその様子がうかがうことができない。従って、小曾戸洋氏は『医心方』の意義について次の二点を指摘された。

①中国中世以前の医薬文献の逸文が大量に残存し、しかもその出典が明記されているということ。

②それらがことごとく宋改以前の旧態を保持するということ。(14)

『医心方』は、丹波康頼が朝廷に献上した後、室町時代後期に正親町天皇から典薬頭半井家に下賜された。一方、丹波家に伝来した伝本を、丹波家の末裔である多紀家の多紀元堅が復原し版行した。こうした経緯から、幕末に至るまで完本が出現しなかったため、近世まで実際の臨床に供されることはほとんどなかった。

## 二、撰者丹波康頼について

丹波家は平安時代より幕末に至るまで連綿と続いた官医の名家であり、その医家としての地位を確立した始祖が丹波康頼である。『医心方』の撰進はその点でも重要な意味をもっている。丹波氏系図は数多く存在するが、『尊卑分脈』に拠ると、次のようである。

後漢靈帝―延王―石秋王―阿智王―都賀直―志拏直―駒子―弓束―首名―孝子―大国―康頼(15)

また、『日本書紀』応神天皇二十年九月の条に、

廿年秋九月。倭漢直祖阿知使主。其子都加使主。並に己之党類十七県を率て而来帰焉(16)。

という記述がある。つまり、祖先は後漢の靈帝で、五世の孫、阿智王が応神天皇の時代に日本に帰化した。康頼は阿智王から数えて八代目にあたる。いわゆる帰化人の子孫であり、康頼の時にはじめて丹波宿禰の姓を賜ったという。『医心方』各巻のはじめ、目次の前には、

従五位下行鍼博士兼丹波介丹波宿禰康頼撰

と記されるように、康頼が針博士の地位にあったことは疑いない。ただ『尊卑分脈』の丹波氏系図の康頼の項をみると、

始面賜丹波宿禰姓針博士医博士左衛門佐従五位上(17)

と誌してあるので、晩年には医博士を兼務していたことがわかる。

康頼の生没年については、延慶本『医心方』卷三十の卷末にある識語に、

長徳元年(九九五)四月十九日逝去、歳八十四(18)

とあるのが唯一の資料であり、これにより、康頼は延喜十二年(九一二)に生まれ、長徳元年(九九五)四月十九日に死亡したと算出される。

### 三、『医心方』の諸本

『医心方』の現存する伝本について、杉立義一氏は五十三種におよぶ諸本を調査された(19)。本論文が依拠する代表的な善本五本の

書誌は、杉立氏の研究によれば次の通りである(20)。

① 半井家本

東京国立博物館所蔵。卷子本。『群書類従』所収「和氣氏系図」、江戸幕府が編纂した『寛政重修諸家譜』所収「和氣氏半井系図」等によれば、正親町天皇の時代(一五六〇〜八六)、天皇より典薬頭半井瑞策(光成)に下賜され、以来四百年間半井家に代々伝えられた秘典とする。嘉永七年(一八五四)、江戸医学館による覆刻の底本に供された。昭和五七年(一九八二)、半井家より文化庁に買い上げられ、翌年重要文化財指定、昭和五九年(一九八四)に国宝指定を受けた。

② 仁和寺本

平安末〜鎌倉初とみられる古抄本である。今日、巻一・五・七・九・十の五巻しか伝わらないが、江戸時代には全三十巻中、十七巻にわたって残存していた(巻一・五〜七・九・十・十一・十四・十七・十九・二十・二十二・二十三・二十五・二十七・二十九・三十)。これらはその内容からして、むしろ半井本よりも古態をよく保存していると考えられるふしもあり、近世まで伝わりながら十二巻分を佚したことは実に惜しまれるが、幸いその模抄本によって旧を知ることができる。

③ 多紀家旧蔵本

寛政三年(一七九一)、幕命によって江戸に送致された仁和寺本を、多紀元恵が元簡・元琰らに鈔写させ、この際、欠失部のうち巻二・巻四を多紀家所伝の別本によって補鈔したもの。巻二・巻四の部分は、半井家本校刻の際、校勘資料として用いられた。巻二・巻四中の札記に引く「旧鈔零本」がこれに合致する。

④ 安政刊本(日本古典全集)

版本、和装仕立、大判三十巻。『医心方』の最初の刊本。安政元年(一八五四)、多紀元堅が半井本三十巻を筆写し、これを木

版刷にして安政六年（一八五九）に刊行したもの。木版ではあるが、忠実に原本の書体を再現するが、朱点・ヲコト点は付さない。一九三五年、日本古典全集第五期に収録され、縮刷版七冊として刊行された。

⑤ 日本医学叢書活字本

活字本、洋装。明治三十九年（一九〇六）、土肥慶蔵、呉秀三、富士川游らによって編纂された日本医学叢書の第一集第二冊。『医心方』全巻を収めて金港堂から出版されたが、卷二十八房中篇は猥褻であるとして発売禁止になったため、この部分を削除して出版した。

### 第三節 『和名抄』と『医心方』との関係

#### 一、先行研究

『和名抄』と『医心方』との関係を論じた研究は、従来、あまり行われてこなかった。現存最善本とされる半井家本『医心方』は国宝に指定され、詳細な訓点を付している。したがって、従来の『医心方』研究は、ほぼ、字音注記と和訓を対象とする国語学的な研究が主流をなしてきた。このうち、本研究にかかわる重要な先行研究は、次の二点の論考である。

第一に、松本光隆氏の研究である(21)。松本氏は『医心方』に見える訓点の訓読法を調査し、その異同のうち、実詞の訓について『和

名抄』『本草和名』を比較された。その結果、『医心方』の本文の漢字と朱筆訓との対応関係は、『和名抄』における漢字と和語との対応関係に概ね重なるものであることをあきらかにされた。

第二に、加藤大鶴氏の研究である(22)。加藤氏は、『医心方』の出典を調査し、『医心方』の字音注記加点が、『和名抄』を引用したものであることをあきらかにされた。

このように、『医心方』が『和名抄』を参看し引用していることは、すでに、先学によって論証されている。ただし、半井家本は巻八の書写識語に次のようにあり、

天養二年二月以宇治入道太相国本移点

移点〈少内記藤原中光〉比較〈助教清原定安〉

移点比較之間所見及之不審直講中原師長

医博士丹波知康重成等相共合医家本畢

文殿所加之勘物師長以墨書之令合点

宇治本

初下点〈行盛朝臣 朱星点 墨仮字〉

重点点〈重基朝臣 朱星点 仮字 勘物 又以朱点 句于儒点〉

御本不改彼様令点移之

天養二年二月に、宇治入道太相国本をもって移点す。

移点〈少内記藤原中光〉比較〈助教清原定安〉

移点・比較の間、見及のところの不審は直講中原師長

医博士丹波知康・(丹波)重成等「医家本」を相共ひて合しておわんぬ。

文殿の加ふとことの勘物を、師長は墨もってこれを書し、点を合せしむ。

宇治本

初の点を下る(行盛朝臣 朱星点・墨仮字)

重の点を加ふ(重基朝臣 朱星点・仮字勘物、また朱点をもつて、儒点において句す)

御本、彼の様を改めず。点をこれに移せしむ。

つまり、半井家本の書写後、少なくとも二度にわたって、訓点が付され、散佚した宇治本により校訂が施され、『医心方』の訓点と字音注記の研究は、あくまでも、鎌倉時代語の研究であった。

『和名抄』『医心方』はともに、先行する文献から必要な項目・文章を抽出・類聚・編纂して成った類聚編纂書である。両書の成立時期には五十年の差があり、撰者・源順(九一一〜九八三)と丹波康頼(九一二〜九九五)の年齢差はわずか一歳である。平安中期、源順は明経の学を学び、丹波康頼は医学を学んだ。『和名抄』と『医心方』は、ほぼ同時代の成立になり、学問分野は異なるもの、平安中期の類聚編纂書として根底相通じるところがあるとみてよいであろう。

そこで、本論文では、『和名抄』『医心方』が成立した平安時代中期に視座を置き、『和名抄』および『医心方』本文と比較し、『和名抄』の中国医学文献の引用手法と、『医心方』との引用態度のちがいを明らかにすることを目的とする。この比較を通して、明経・医学という異なる学問の立場から、漢籍を抽出・類聚・編纂する作業をおこなった源順・丹波康頼の編纂意識のちがいを考察するとともに、平安中期の律令官人の類書の位相、学問のありかたを考察するための一助とする。

二、『和名抄』『医心方』共通の引用書目

『和名抄』の引用書目は三百数十種、『医心方』の引用書目は二八一種にのぼる。しかも、両書の引用書目には、共通するものが三十四種確認される。その一覧表は次のようである。

書名・人名	頻度	書名・人名	頻度	書名・人名	頻度
十卷本『箋注倭名類聚抄』					
<b>本草類</b>		<b>本草類</b>		<b>本草類</b>	
『本草』	257	『本草』	244	『本草』	125
『本草』注	3	『本草』注	6	『本草』陶注	1
『本草経』	1	『陶隠居本草』	1	『本草』蘇敬注	1
『本草経』注	1	『陶隠居本草』注	34	『本草経』	15
『陶隠居本草』注	2	陶隠居	14	『本草経』陶景注	1
陶隠居	49	『陶隠居本草』注	34	『陶景本草』注	24
陶隠居注	2	陶隠居	14	陶景	1
陶弘景注	1	陶隠居注	5	陶注	4
『蘇敬本草』注	15	陶弘景注	1	陶景注	57
蘇敬	42	『蘇敬本草』	2	『新修本草』	1
		『蘇敬本草』注	35	『蘇敬本草』注	42
		蘇敬	7	蘇敬	9

<p>蘇敬注 『拾遺』 『拾遺本草』 『本草音義』 『楊玄操音義』 楊玄操 『本草稽疑』 『大清經』</p>	<p>蘇敬注 『拾遺』 『拾遺本草』 『本草音義』 『楊玄操音義』 楊玄操 『本草稽疑』 『大清經』</p>	<p>蘇敬注 『拾遺』 『拾遺本草』 『楊音』 楊玄操 『本草稽疑』 『大清經』</p>
<p>食養生類 『崔禹錫食經』 『崔禹食經』 『崔禹經』 崔禹 『七卷食經』 『馬琬食經』 『孟詵食經』 『膳夫經』</p>	<p>食養生類 『崔禹錫食經』 『七卷食經』 『馬琬食經』 『孟詵食經』 『食經』 『膳夫經』</p>	<p>食養生類 『崔禹錫食經』 『崔禹食經』 崔禹錫 崔禹 崔禹 『七卷食經』 『七卷經』 『馬琬食經』 馬琬 『孟詵食經』 孟詵 『食經』 『膳夫經』</p>
<p>2 1 5 2 1 2 1 1</p>	<p>13 1 5 3 1 1 1 1</p>	<p>28 43 20 1 2 6 30</p>
<p>1 62 1 4 17 5 5 5 2</p>	<p>68 17 5 5 1 1 2</p>	<p>24 4 1 121 11 52 3 14 16 61 16 18</p>

『養性要集』	2	『養生要集』 『養性志』	2 1	85 5	
<b>疾病類</b> 『病源論』 『脚氣論』	26 2	<b>疾病類</b> 『病源論』 『脚氣論』	26 2	<b>疾病類</b> 『病源論』 『蘇敬脚氣論』 蘇 蘇敬論 『唐臨脚氣論』 唐 唐臨 蘇唐 蘇唐論	555 4 7 5 2 14 3 2 2
<b>鍼灸類</b> 『鍼灸經』 『針灸經注』 『黄帝内經』	7 1 3	<b>鍼灸類</b> 『針灸經』 『針灸經注』 『黄帝内經』 黄帝 岐伯	7 1 3 1 1 1	<b>鍼灸類</b> 『針灸經』 『黄帝明堂經』・『明堂經』	2 2
『太素經』 『太素經注』	1 1	『大素經』 『大素經注』	1 1	『黄帝太素經』・『太素經』	14

		楊上善 3
<p>処方類</p> <p>『集驗方』 2 『小品方』 2 『極要方』 1 『新録単要』 1 『新録方』 1 『千金方』 1 『録驗方』 2 『葛氏方』 1</p>	<p>処方類</p> <p>『集驗方』 2 『小品方』 2 『極要方』 1 『新録単要』 1 『新録方』 1 『千金方』 1 『録驗方』 2 『葛氏方』 1</p>	<p>処方類</p> <p>『集驗方』 133 『小品方』 215 『極要方』 135 『新録単方』・『新録要方』 9 『新録方』・『単要方』 104 『千金方』 478 『録驗方』 154 『葛氏方』 392</p>

注

- (1) 川瀬一馬『古辞書の研究』（講談社、一九五五年十一月）。
- (2) 藏中進「序にかえて」（藏中進・林忠鵬・川口憲治『倭名類聚抄』十卷本・廿卷本所引書名索引、勉誠出版、一九九九年五月）。
- (3) 尹仙花『和名類聚抄』引用書目の研究―『法苑珠林』を中心に―（大東文化大学平成二十二年度博士論文）。
- (4) 岡田希雄「源順及同為憲年譜」（『岡田希雄集』二〇〇四年一〇月、クレス出版）
- (5) 神野藤昭夫「源順の官職・位階と文学」（『王朝文学と官職・位階』二〇〇八年五月、竹林舎）
- (6) 同右(3)論文。

(7) 宮沢俊雅『倭名類聚抄諸本の研究』（勉誠出版、二〇一〇年四月）。

(8) 同右（1）書。

(9) 同右。

(10) 同右。

(11) 同右（1）書。

(12) 本稿で参看した『和名抄』の諸本は次のとおりである。

狩谷掖齋箋注和名類聚抄…京都大学文学部国語学国文学研究室『諸本集成和名類聚抄 本文篇』（臨川書店、一九六八年七月）。

那波道圓元和三年古活字本…馬渕和夫編『二十卷本系諸本の影印対照』（勉誠出版、二〇〇八年八月）。

前田本…馬渕和夫編『十卷本系古写本の影印対照』（勉誠出版、二〇〇八年八月）。

天文本…東京大学国語研究室編『倭名類聚抄天文本』（汲古書院、一九八七年一月）。

天正本…馬渕和夫編『二十卷本系諸本の影印対照』（勉誠出版、二〇〇八年八月）。

(13) 『医心方』の成立については『一代要記』に、

天元五年壬午、針博士丹波宿禰康頼撰医心方卅

奏進については『尊卑分脈』に、

永観二年十一月廿八日以医心方卅卷撰進公家

とあり、鎌倉時代延慶二年（一三〇九）十一月十三日の書写する延慶本『医心方』の卷第三十の奥書に、

天元五年（九八二）壬午、針博士丹波宿禰康頼撰医心方卅

と記される。富士川游氏『医史叢談』（書物展望社、一九四二年十二月）には、天元五年（九八二）を撰述の年、永観二年（九八四）を奏進の年とみなされた。

- (14) 小曾戸洋『中国医学古典と日本―書誌と伝承―』（塙書房、一九九六年二月）。
- (15) 洞院公定『尊卑分脈』（国史大系、吉川弘文館、一九五七年）。
- (16) 小島憲之校注『日本書紀』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年四月）。
- (17) 同右（15）書。
- (18) 『医心方の研究』（オリエント出版社、一九九一年一月）。
- (19) 杉立義一「医心方の伝写について」『医心方の研究』（オリエント出版社、一九九四年五月）。
- (20) 本稿で参看した『医心方』の諸本は次のとおりである。
  - 半井家本…『半井家本医心方』（オリエント出版社、一九九一年一月）。
  - 「半井家本」高画素カラー写真（「東京国立博物館 e 国宝」）。
  - 仁和寺本…『医心方 仁和寺本影写本・多紀家旧蔵本』（オリエント出版社、一九九一年一月）。
  - 安政刊本…正宗敦夫編『医心方』（日本古典全集刊行会、一九三五年九月）。
  - 日本医学叢書活字本…『医心方 日本医学叢書活字本』（オリエント出版社、一九九一年一月）。
- (21) 松本光隆「書陵部蔵医心方・成篁堂文庫蔵医心方における付訓の基盤」『鎌倉時代語研究』第三号、鎌倉時代語研究会、一九八〇年三月）。
- (22) 加藤大鶴「『医心方』字音注記出典と加点方針についての一考察」『論集』第一号、アクセント史料研究会、二〇〇五年九月）。

## 第二章 『和名類聚抄』所引「病源論」攷

『和名抄』『医心方』両書の引用書目には、共通するもののうち、『医心方』に最も多く引用される書目が、「病源論」五五五例である。「病源論」は『医心方』編纂に大きな影響を与え、『医心方』のベースとされた医書であった(二)。一方、『和名抄』にも、「病源論」の引用例が二七例確認される。

その両者が、同じ「病源論」を引用している事実注目したい。『和名抄』と『医心方』は、それぞれ、どのような態度で「病源論」を引用するのか。本章は、『和名抄』における「病源論」の引用例二七例について、『諸病源候論』および『医心方』本文と比較し、『和名抄』の『諸病源候論』の引用手法と、『医心方』との引用態度のちがいを明らかにすることを目的とする。

### 第一節 「病源論」と『諸病源候論』

#### 一、『諸病源候論』の概要と本論文の底本

『医心方』の引用書目二八一種のうち、最多の引用回数である五五五例の引用例を有し、しかも、『和名抄』にも二七例の引用例が

ある「病源論」は、隋代に成立した現存する唯一の医書、隋・巢元方等奉勅撰『諸病源候論』の略称である。書名のとおり、諸の「病源（病因）」「病候（病状）」を論じる。

『諸病源候論』の書名は、『隋書』経籍志、『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志等に次のように著録される。

『隋書』経籍志 諸病源候論五卷 目一卷 吳景賢撰

『旧唐書』経籍志 諸病源候論五十卷 吳景撰

『唐書』芸文志 吳景諸病源候論五十卷

『唐書』芸文志 巢氏諸病源候論五十卷 巢元方

また、『日本国見在書目録』医方家一六六部一三〇九卷には、「巢元方撰」になる「病源論五十」が確認される。

病源論五十 巢元方撰

撰者には吳景賢・巢元方の二説、巻数には五巻・五十巻の二説があるが、『諸病源候論』五〇巻は、隋・大業六年（六一〇）、勅を奉じて隋の太医博士・巢元方らが編纂したとみるのが定説である(2)。

寛平七年（八九五）『日本国見在書目録』に「病源論」が著録されていることは、源順・丹波康頼が「病源論」を直接に参看しえたこと、ひいては、『和名抄』『医心方』に直接引用することが可能であったことを意味するとみてよい。

前章で述べた「宋改」によって、いくつかの医書が校刊された。『諸病源候論』もその一つである。現存する『諸病源候論』諸本はすべて天聖五年（一〇二六）に校刊されたものに基づいている。このことは、南宋の王応麟の撰した『玉海』に、次のように述べる。

天聖四年十月十二日、命集賢校理晁宗慤・王举正校定黄帝内経素問・難経・巢氏病源候論。五年四月乙未、令国子監摹印頒行詔学

士宋綬撰病源序(3)。

天聖四年十月十二日に、賢校理晁宗愨・王挙正に命じ、『黄帝内経素問』『難経』『巢氏病隙候論』を校定す。五年四月乙未に、国子監摹印頒行詔学士宋綬をして、『病源』の序を撰せしむ。

現にこの宋綬の序は南宋刊本をはじめ各版本に付されている。しかし、天聖五年の北宋刊本は夙く散佚してしまつて、今日には伝えられていない。

『諸病源候論』の最善本は、現存最古にして、所在の明らかな唯一の南宋刊本である。これについて、森立之等撰『経籍訪古志』は、次のように記載する。

諸病源候論、五十卷、目錄一卷。〈南宋槧本、懷仙閣藏。欠第四十・四十一・四十二・四十三・凡四卷。酌源堂藏有之。今從補録。〉  
隋大業六年、太医博士臣巢元方奉勅撰。(中略)然是書、在今日莫善於此本、誠可貴重(ト)。

諸病源候論、五十卷、目錄一卷。〈南宋槧本、懷仙閣藏。第四十・四十一・四十二・四十三の凡そ四卷を欠く。酌源堂の蔵にこれ有り。今、補録に従ふ。〉隋大業六年、太医博士臣巢元方、勅を奉じて撰す。(中略)然れば是の書、今日に在りては、此の本より善きは莫し、誠に貴重なるべし。

南宋刊本「懷仙閣旧蔵本」は、現在、宮内庁書陵部に所蔵され、東洋医学善本叢書に影印に付されている(5)。本論文では、『諸病源候論』の本文を、この南宋刊本「懷仙閣旧蔵本」に依拠することとする(6)。

## 二、『外台秘要方』における『諸病源候論』の引用

『諸病源候論』は成立後、中国伝統医学の基本典籍の一つとして、後の中国医学に強い影響を及ぼした。小曾戸洋氏の研究に拠れば、『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『太平聖恵方』『聖濟総録』など、これら唐代以降の医学全書の疾病分類法もしくはその基本理念が『諸病源候論』に準拠された(7)。特に、『外台秘要方』に「病源云」として三百条以上が引用されている(8)。

唐・王燾撰『外台秘要方』四十巻は、天寶十一年(七五二)の成立である。撰者の序文に、「自分は幼いとき病気が多く、そのため成長してから医術を研究した、名医に遭遇すれば必ず教えを乞うた。幸い出世することができて何度も官仕えをし、尚書省に二〇年余りも出入し、長年國家の図書館中の書籍に接してその深奥を窮い知ることができた。……古来から現在に至る数多くの医薬文献を集め、整理編集した。……およそ四〇巻、名付けて『外台方』という」と記された。

『外台秘要方』は宋に至り、他の医書とともに国子監より校刊された。その校刊序文に拠れば、熙寧二年(一〇六九)に勅を奉じて版行した。つまり、『外台秘要方』は、『諸病源候論』版行の四十年後に版行された。

今日に伝わる『外台秘要方』の本文はあくまでも「宋改」以後のものであるが、本章は、『和名抄』『医心方』に引かれた『諸病源候論』の本文を考察するためには、唐代の医学類書である『外台秘要方』の本文も視野に入りたい。本論文が用いた『外台秘要方』の伝本は宋版『外台秘要方』(静嘉堂文庫所蔵)である(9)。

三、『和名抄』における「病源論」

『和名抄』における「病源論」の引用例は、二七例である。

そのすべてが、十卷本系では卷二、廿卷本系では卷三に配される「病類・瘡類」に集中しており、他の巻にはいっさい引用がない。

『和名抄』「病類・瘡類」における掲出語（項目）は、十卷本系・廿卷本系ともに一一五項目を数える。「病源論」は最も引用回数が多い書目である。

表1・『和名類聚抄』所引「病源論」本文は、『和名抄』に引用される「病源論」二七例の本文を掲出したものである。便宜上、本論文の十卷本系本文は狩谷榊齋撰『箋注倭名類聚抄』（以下「箋注本」と略称）、廿卷本系本文は那波道圓『元和古活字版和名類聚抄』（以下「元和本」と略称）に拠った。

表1・『和名類聚抄』所引「病源論」本文

No.	掲出語	十卷本系	廿卷本系
①	聾耳	病源論云、聾耳、（上音亭、美々太利）風熱耳生膿汁也。	病源論云、聾耳、（上音亭、和名美々太利）風熱耳生膿汁也。
②	目翳	病源論云、目膚翳、（於麗反、俗云比）眼精上有物如蠅翅、是也。	病源論云、目翳、（於麗反、和名比）目膚、眼精之上有物如蠅翅、是也。
③	雀盲	病源論云、人至暮不見物、世謂之雀盲、（俗云度利女）謂如鳥雀瞑則無所見也。	病源論云、人至暮不見物、世謂之雀盲、（俗云度利女）謂如鳥雀瞑則無所見也。
④	喎僻	説文云、喎、（口蛙反、或作喎、久知由賀無）口戾也。病源論云、喎僻則言語不正。	説文云、喎、（口蛙反、或作喎、和名久知由賀無）口戾也。病源論云、喎僻則言語不正也。
⑤	欬嗽	病源論云、欬嗽、（亥束二音、字亦作咳、之波不岐）肺	病源論云、欬嗽、（亥走二音、欬字亦作咳、之波不岐）肺寒

⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔
黃疸	瘡瘍	臨瀝	脫肛	虻虫	胡臭	重舌	喉痺	嘔吐	津頤	歐吐	
病源論云、黃疸、（音旦、一云黃病、歧波無夜万比）身体面目爪甲及小便尽黃之病也。	病源論云、消渴、（今案四声字苑作瘡瘍、音与消渴同、俗云加知乃夜万比）渴而不小便也。	病源論云、臨瀝、（音歷、之太天由波利）小便滴瀝也。	病源論云、脫肛、（疰音工、字亦作肛、之利以豆流夜万比）肛門脫出也。久痢則大腸虛冷所為也。	唐韻云、虻、（音与廻同）人腹中長虫也。病源論云、虻虫、（今案一名寸白、俗云加以、又云阿久太）飲白酒食生栗等所成也。	病源論云、胡臭、（和歧久曾）人腋下臭如葱豉之氣也、亦謂之狐臭、如狐狸之氣也。	病源論云、舌本血脈脹然、變生如舌之狀、謂之重舌也。（俗云古之太）	病源論云、喉痺、（侯婢二音、俗訛云古比）喉裏腫塞痺痛、水漿不得入、是也。	病源論云、嘔吐、（上音見、豆太美）小兒由哺乳冷熱不調所致也。	病源論云、津頤、（与太利）小兒多涎唾、流出於頤下也。	病源論云、胃氣逆則歐吐。（上於后反、字亦作嘔、倍止都久、又太万比）	寒則成之。
病源論云、黃疸、（音旦、一云黃病、歧波無夜万比）身体面目爪甲及小便尽黃之病也。	病源論云、瘡瘍、（今案四声字苑云瘡瘍、音与消渴同、俗云加知乃也万比）渴而不小便也。	病源論云、臨瀝、（音歷、之太天由波利）小便滴瀝也。	病源論云、脫肛、（古紅反、字亦作肛、和名之利以豆流夜万比）肛門脫出也。久痢則大腸虛冷所為也。	唐韻云、虻、（音回蛸蛔并同）人腹中長虫也。病源論云、虻虫、（今案一名寸白、俗云加以、又云阿久太）飲白酒食生栗等所成也。	病源論云、胡臭、（和歧久曾）人腋下臭如葱豉之氣、又謂之狐臭、如狐狸之氣也。	病源論云、舌本血脈脹然、變生如舌之狀、謂之重舌也。	病源論云、喉痺、（侯婢二音、俗訛云古比）喉裏腫塞痺痛、水漿不得入、是也。	病源論云、嘔吐、（上音見、豆太美）小兒由哺乳冷熱不調所致也。	病源論云、津頤、（与多利）小兒多涎唾、流出於頤下也。	病源論云、胃氣逆則歐吐。（上於后反、字亦作嘔、倍止都久、又太万比）	則成也。

①7	癰癤	病源論云、癰癤、(音節、字亦作癰、賀太禰) 血結聚所生也。	病源論云、癰癤、(音子結反、字亦作癰、和名賀太禰) 血結聚所生也。
①8	浸淫瘡	病源論云、浸淫瘡、(俗云心美佐宇) 風熱發於肌膚也。	病源論云、浸淫瘡、(俗云心美佐宇) 風熱發於肌膚也。
①9	瘤	病源論云、瘤、(音留、之比禰) 皮肉急腫起、初如梅李、漸長大不痒不痛又不堅強者也。	病源論云、瘤、(留反、和名之比禰) 皮肉急腫起、初如梅李、漸長大不痒不痛又不堅強者也。
②0	眈目	病源論云、眈目、(今案眈即眈字也。以比保、又以乎女) 手足辺忽生如豆、麤強於肉者也。	病源論云、眈目、(今案眈即眈字也。和名以比保、又以乎女) 手足辺忽生如豆、麤強於肉也。
②1	鬼舐頭	病源論云、鬼舐頭、(師説云、為天狗下食所舐是) 人頭或如錢大或如指大、髮不生也。	病源論云、鬼舐頭、(師説、為天狗下食所舐是) 人頭或如錢大或如指大、髮不生也。
②2	漆瘡	病源論云、漆瘡、(宇流之加不礼) 人見漆中其毒而腫是也。	病源論云、漆瘡、(和名字流之加不礼) 人見漆中其毒而腫是也。
②3	飼面	病源論云、飼面、(加須毛) 面皮上有滓也。	病源論云、飼面、(和名加須毛) 面皮上有滓、是也。
②4	白癩	病源論云、白癩、(一云白電、之良波太) 人面及身頸皮肉色變白亦不痛痒者也。	病源論云、白癩、(一云白電、之良波太) 人面及身頸皮肉色變白亦不痛痒者也。
②5	歷易	病源論云、歷易、(奈末豆波太) 人頸及胸前掖下自然斑点相連不痛不痒者也。	病源論云、歷易、(奈万豆波太) 人頸及胸前掖下自然斑点相連不痛不痒。
②6	肉刺	病源論云、肉刺、(乃以須美) 脚指間生肉如刺、由着靴小、相措而所生也。	病源論云、肉刺、(和名乃以須美) 脚指間生肉如刺、由著靴小、相措而所生也。
②7	風癩胗	病源論云、風癩胗、(加佐保路之) 人皮膚虚為風寒所折則起也。	病源論云、風癩胗、(和名加佐保路之) 人皮膚虚為風寒所折則起也。

表1から、『和名抄』における「病源論」の引用について、次の特徴が看取される。

第一に、『諸病源候論』から、「脈論」がいつさい引用されないことである。

『諸病源候論』においては、「病源」「病候」と並んで、診断法として「脈論」が重要な位置を占める。「脈論」には、脈による診断方法・理論が述べられている。

しかし、『和名抄』は「脈論」にかかわる本文をいつさい引用しない。

同様の現象は、『医心方』にもみられる。小曾戸洋氏は、『医心方』が「脈論」を採録しないことを指摘して、次のように述べられた。

『医心方』の最も大きな特徴の一つを指摘しておこう。それは全巻にわたって脈論を排したことである。本来ならば脈に関する総論が巻一中にあってもよいはずであるが、康頼はあえてそれを行わなかったようである。また『諸病源候論』などの諸文献を引用する際、必ずといってよいほど脈に関する記述部分は削除している。これは特筆されるべき事実である(10)。

『医心方』同様に、源順もまた、『和名類聚抄』に『諸病源候論』から「脈論」を採録しない。このことは、『医心方』のみならず、平安中期の日本における中国医書の受容に際して、「脈論」にはあまり関心が寄せられていなかったことを意味するのではないか。

第二に、『和名抄』の「病源論」引用の手法は、『医心方』のそれとはかなり異なる。

専門的な医書である『医心方』は、『諸病源候論』から「脈論」を除くほぼ全巻から、原文に手を加えず、長文をそのまま引用する。

一方、『和名抄』は、和訓の掲出に最小限必要な語彙・語義を引用するにとどまる。これは、『和名抄』の分類体漢和辞書としての性格に由来するものであり、『医心方』とのちがいはこの点に集約されるといっても過言ではないであろう。

第三に、『和名抄』に引く「病源論」二七例は、必ずしも「病源」「病候」の記事の両方を網羅するものではない。

『和名抄』引用例は、その引用内容によって、次のように四分類される。

(1) 病源のみ。七例。

⑤ 欬咳・⑥ 欧吐・⑧ 嘔吐・⑫ 虻虫・⑰ 癰癤・⑱ 浸淫瘡・⑳ 風癩疹

(2) 病候のみ。十四例。

② 目翳・③ 雀盲・④ 喎僻・⑦ 津頤・⑨ 喉痺・⑪ 胡臭・⑮ 疥瘍・⑯ 黄疽・⑲ 瘤・⑳ 眈目・㉑ 鬼舐頭・㉓ 飼面・㉔ 白癩・㉕ 歷易

(3) 病源と病候。五例。

① 聾耳・⑩ 重舌・⑬ 脱疔・㉒ 漆瘡・㉖ 肉刺

(4) 原典『諸病源候論』本文に確認されない。一例。

⑭ 臨瀝

以下は、この四分類に沿って、『和名抄』にみられる源順の『諸病源候論』引用の意識と手法について考察を進める。

## 第二節 『諸病源候論』「病源」のみの引用

『和名抄』が『諸病源候論』の「病源」のみを引用するのは、次の七例である。

(1) 病源のみ。七例。

⑤ 欬咳・⑥ 欧吐・⑧ 嘔吐・⑫ 虻虫・⑰ 癰癤・⑱ 浸淫瘡・㉑ 風癩疹

この七例は、出典『諸病源候論』における引用文の位置によって、次のように二分類される。(A)はその引用手法によって、さら

に (a) (b) に二分類される。

(A) 『諸病源候論』の項目冒頭部を引用する例。六例。

(a) 節略。

⑤ 欬味・⑥ 欧吐・⑧ 浸淫瘡

(b) 『和名抄』独自の異文。

⑧ 嘔吐・⑭ 癰癤・⑰ 風癰疹

(B) 『諸病源候論』の項目冒頭部を引用しない例。一例。

⑫ 虻虫

そこで、次に、『和名抄』『外台秘要方』『医心方』諸本の本文を対照し、三書が引用する『諸病源候論』本文を精査することとする。

### 一、『諸病源候論』冒頭部の採録

まず、『諸病源候論』の項目冒頭部を引用する六例のうち、『和名抄』が『諸病源候論』の本文を節略する三例である。

⑤ 欬味 (之波不歧)

諸病源候論	咳嗽者、	肺感於寒、微者則成咳嗽也…
外台秘要方	病源、 欬嗽者、	由肺感於寒、微者 成欬嗽也…

方 心 医			抄 名 和					
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本
病源論云、咳嗽者、	病源論云、欬嗽者、	佚	病源論云、欬嗽者、	病源論云、欬嗽、 （亥走二音、欬字亦作咳、 之波不岐。）肺 寒 則成 也。	病源論云、欬嗽、 欬東二音、 又作欬賴、 欬嗽之波不木。 病源 云、欬賴、（亥東二反、） 作咳嗽、（和名之波布岐。）肺 塞 則成欬。	病源論云、欬嗽、 （亥東二音、 亦作亥東、 之波不岐。）肺 寒 則成之。	病源論云、欬嗽、 （亥東二音、 字亦作咳嗽、 之波不岐。）肺 寒 則成之。	病源論云、欬嗽、 （亥東二音、 字亦作咳嗽、 之波不岐。）肺 寒 則成 也。

\* 出典 『諸病源候論』卷十四・咳嗽諸病「咳嗽候」

【病源】咳嗽者、肺感於寒、微者則成咳嗽也。肺主氣、合於皮毛。邪之初傷、先客皮毛、故肺先受之。五藏与六府為表裏、皆稟氣於肺。以四時更王、五藏六府皆有咳嗽、各以其時感於寒而受病、故以咳嗽形証不同。

【病候】五藏之咳者、乘秋則肺先受之。肺咳之状、咳而喘息有音声、甚則唾血。乘夏則心受之。心咳之状、咳則心痛、喉中介介如哽、甚則咽腫喉痺。乘春則肝受之。肝咳之状咳、則兩脇下痛、甚則不可以轉、兩脚下滿。乘季夏則脾受之。脾咳之状、咳則右脇下痛、瘕瘕引於臍背、甚則不可動、動則咳。乘冬則腎受之。腎咳之状、咳則腰背相引而痛、甚則咳逆。此五藏之咳也。五藏咳久不已、

伝与六府。脾咳不已、則胃受之。胃咳之状、咳而嘔、嘔甚則長虫出。肝咳不已、則胆受之。胆咳之状、咳嘔胆汁。肺咳不已、大腸受之。大腸咳之状、咳而遺屎。心咳不已、則小腸受之。小腸咳之状、咳而失氣、氣者与咳俱出。腎咳不已、膀胱受之。膀胱咳之状、咳而遺尿。久咳不已、三焦受之、三焦咳之状、咳而腹滿、不欲食飲。此皆聚於胃、關於肺、使人多涕唾而面浮腫逆氣也。又有十種咳。一曰風咳、語因咳、言不得竟是也。二曰寒咳、飲冷食寒入注胃、從肺脈上氣、内外合、因之而咳是也。三曰支咳、心下鞞滿、咳則引痛、其脈反遲是也。四曰肝咳、咳而引脇下痛是也。五曰心咳、咳而唾血、引手少陰是也。六曰脾咳、咳而涎出、続続不止、引少腹是也。七曰肺咳、咳而引頸項而唾涎沫是也。八曰腎咳、咳則耳聾無所聞、引腰脊中是也。九曰胆咳、咳而引頭痛口苦是也。十日厥陰、咳嗽而引舌本是也。

【脈論】診其右手寸口名氣口以前脈、手陽明經也。其脈浮則為陽、陽実者、病腹滿、善氣喘咳。微大為肝痺、咳引小腹也。咳嗽脈浮喘者生。小沈伏匿者死。又云脈浮直者生、沈鞞者死。咳且嘔。腹脹且泄、其脈弦弦欲絶者死。咳脱形發熱、脈小鞞急者死。咳且羸瘦。絡脈鞞大者死。咳而尿血、羸瘦脈大者死。

第一に、『和名抄』⑤「欬嗽」（之波不歧）は、次の『諸病源候論』卷十四咳嗽諸病「咳嗽候」の冒頭部本文に一致する。

咳嗽者、肺感於寒、微者則成咳嗽也。

咳嗽は、肺に寒を感ず、微なるは則ち咳嗽と成るなり。

第二に、『外台秘要方』『医心方』が『諸病源候論』の文章にほぼ手を加えず、そのまま引用するのに対し、『和名抄』は文をかなり節略する。『和名抄』は漢語「欬嗽」に対して、「之波不歧」という和語を注するために、『諸病源候論』を引用している。したがって、『医心方』のように、『諸病源候論』の文をそのまま引用しようとする意図は源順にはなかった。

『和名抄』が「病源論」として本文を引用する場合には、他の掲出語についても同様である。これは『和名抄』の分類体漢和辞書と

いう性格によるものであろう。

第三に、『和名抄』天正本の本文が重出するのは、天正本の独自異文であり、馬渕和夫氏は、これを他本よりの竄入とされる(二)。

⑥ 欧吐（倍止都久、太万比）

医 心 方				和 名 抄				外台秘要方	諸病源候論
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本		
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	病源論云、胃氣逆則欧吐。 （上於后反、 字亦作嘔、 倍止都久、又 太万比。）	同論云、胃氣逆則欧吐。 （上於口切、吐也。欧亦作区、 度都久、又 太末比。）	病源論云、胃氣逆則欧吐。 （上於后反、 字亦作嘔、 倍止都久、又 太万比。）	病源論云、胃氣逆則欧吐。 （上於后反、 字亦作嘔、 都久、又 太万比。）	胃氣逆則嘔吐…	

\* 出典 『諸病源候論』 卷四十・婦人雜病四「嘔吐候」

【病源】胃氣逆則嘔吐。胃為水穀之海、其氣不調、而有風冷乘之、冷搏於胃氣、胃氣逆則嘔吐也。

第一に、『和名抄』⑥欧吐（倍止都久、太万比）に一致する本文は、『諸病源候論』卷四十婦人雜病四「嘔吐候」の冒頭部の一文である。

胃氣逆則嘔吐。

胃の氣逆へば則ち嘔吐す。

第二に、『外台秘要方』『医心方』現存諸本には、この項目が確認されない。

第三に、『和名抄』『諸病源候論』には、ほぼ異同はない。唯一の異同は、天正本の重出箇所「則」が脱落している点のみである。

第四に、『諸病源候論』は「嘔」、『和名抄』の引用本文は「欧」に作るが、注文に「字亦作嘔」と書かれ、「嘔」「欧」は古くは通字である。中国の現存する最古の字書である『説文解字』八下に「欧は吐くなり」とあつて、「嘔」「欧」は異体字とみなしてよいであろう。

⑱ 浸淫瘡（心美佐宇）

諸病源候論	浸淫瘡、 是心家有風熱、發於肌膚…
外台秘要方	ナシ
和	前日本 病源論云、浸淫瘡、（俗云） 心美佐宇。〜 風熱 發於肌膚也。
和	箋注本 病源論云、浸淫瘡、（俗云） 心美佐宇。〜 風熱 發於肌膚也。
名	天文本 ナシ

医 心 方				抄	
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本
病源論云、浸淫瘡、	病源論云、浸淫瘡、	病源論云、浸淫瘡、	病源論云、浸淫瘡、	病源論云、浸淫瘡、 （俗云 心美佐宇。）	病源論云、浸淫瘡、 俗云（和名心美佐宇。）
是心家有風熱、 發於肌膚…	是心家有風熱、 發於肌膚…	是心家有風熱、 發於肌膚…	是心家有風熱、 發於肌膚…	風熱 發於肌膚也。	風熱 發 肌膚也。

\* 出典 『諸病源候論』 卷三十五・瘡諸病 「浸淫瘡候」

【病源】 浸淫瘡、是心家有風熱、發於肌膚。

【病候】 初生甚小、先痒後痛而成瘡。汁出侵潰肌肉、浸淫漸闊乃遍体。其瘡若從口出、流散四支者則輕、若從四支生、然後入口者則重。以其漸漸增長、因名浸淫也。

第一に、『和名抄』<sup>⑱</sup> 「浸淫瘡」（心美佐宇）の本文は、『諸病源候論』 卷三十五瘡諸病 「浸淫瘡候」の冒頭部の一文を節略したものである。

浸淫瘡、是心家有風熱、發於肌膚。

浸淫瘡、是れ心家に風熱有りて、肌膚に發す。

第二に、『諸病源候論』は「是心家有風熱、發於肌膚」作るが、『和名抄』は「風熱發於肌膚也」に作り、『諸病源候論』の「是心家有」を削除している。

第三に、『諸病源候論』は「侵」に作るが、『和名抄』『医心方』は「浸」に作る。あるいは、平安中期に日本に伝わった『諸病源候論』の本文には「浸」とあったものか。中国では失われた『諸病源候論』の古い本文に「浸」とあった可能性が想定される。

## 二、『和名抄』独自の異文

『和名抄』の本文が、『諸病源候論』『医心方』と一致しない例が⑧嘔吐・⑰癰癤・⑳風癰疹の三例ある。

これは、『和名抄』独自の異文とみなすことができる。

この『和名抄』独自の異文をどう考えるか。これについては、次のふたつの解釈が想定される。

第一に、現存する『諸病源候論』とは異なる本文をもつ別の系統の『諸病源候論』にはかつて存在しており、『和名抄』はその系統の伝本を参看して本文を引用したとみる考え方である。つまり、中国では失われた『諸病源候論』の本文が、日本の『和名抄』にのみ、独自に残存していたという解釈である。

第二に、『和名抄』が『諸病源候論』の本文を独自に改変したとみる見方である。

『和名抄』所引『諸病源候論』独自の異文は、どのようにして生じたのであろうか。

次に、この三例について、『和名抄』本文に即して検討してゆくこととする。

### ⑧嘔吐（豆太美）

諸病源候論

吐呪者、

小兒

由乳哺冷熱不調故 也…

方 心 医				抄 名 和				外台秘要方
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	
病源論云、 吐哕者、 小兒 由乳哺冷熱不調故也。	病源論云、 吐哕者、 小兒 由乳哺冷熱不調故也。	□□論云、 吐哕者、 小兒 由乳哺冷熱不調故也。	病源論云、 吐哕者、 小兒 由乳哺冷熱不調故也。	病源論云、 哕吐、 （上音見、豆太美。） 小兒由乳哺冷熱不調所致也。	病源論云、 哕吐、 上音見、 （和名豆太美。） 小兒由乳哺冷熱不調所致也。	同論云、 哕吐、 （上音見、豆太美。） 小兒由乳哺冷熱不調所致也。	病源論云、 哕吐、 （上音見、豆太美。） 小兒由乳哺冷熱不調所致也。	ナシ

\*出典『諸病源候論』卷四十七・小兒雜病三「吐哕候」

【病源】小兒吐哕者、由乳哺冷熱不調故也。兒乳哺不調、則停積胸膈、因更飲乳哺、前後相觸、氣不得宜流、故吐哕出。

【脈論】診其脈浮者无苦也。

第一に、『和名抄』⑧嘔吐（豆太美）は、『諸病源候論』卷四十七小兒雜病三「吐嘔候」冒頭部の一文を引用している。

小兒吐嘔者、由乳哺冷熱不調故也。

小兒の吐嘔は、乳哺の冷熱調はざるに由る故なり。

第二に、『諸病源候論』『医心方』は「故」に作るが、『和名抄』は「所致」に作る。これは『和名抄』独自の異文である。「故」「所致」ここに意味として同じが、『和名抄』における「所致」は今後に検討する必要がある。

第三に、『諸病源候論』『医心方』は「吐嘔」「乳哺」に作るが、『和名抄』は、語順を逆にして「嘔吐」に作る。これは『和名抄』独自の異文である。

これについて、狩谷掖斎箋注は、これを誤写とみて次のように述べる。

按豆太美蓋知太万比之転、吐乳之義、今俗云知阿万須是也。

原書作小兒吐嘔者由乳哺冷熱不調故也。∴又按諸医書皆云吐嘔、無云嘔吐者、此引作嘔吐恐誤。

按ずるに、豆太美は蓋し知太万比の転なり、吐乳の義なり。今俗に知阿万須と云ふは是れなり。

原書「小兒の吐嘔は、乳哺の冷熱調わざるに由る故なり」に作る。∴又、按ずるに、諸医書、皆「吐嘔」と云ひ、「嘔吐」と云ふ者無し。此に引きて「嘔吐」に作るは恐らく誤りなり。

掖斎は、⑧嘔吐の和訓「豆太美」が「知太万比」から転じたとする。

前項『和名抄』⑥欧吐の和訓は、「倍止都久」「太万比」であった。したがって、「豆太美」の「太美」、「知太万比」の「太万比」は、いずれも「吐」を意味すると考えられる。よって、「豆太美」の「豆」は「唾」、「知太万比」の「知」は「乳」をさすものであるう。

『和名抄』の「嘔吐」は、和訓「豆太美」「知太万比」に対応させるために、『諸病源候論』『医心方』の「吐嘔」「乳哺」の語

順を、あえて逆にして「嘔吐」「哺乳」と配置したものであろうか。

第四に、『諸病源候論』『医心方』は「小兒吐嘔者」に作るが、『和名抄』は「小兒由哺乳冷熱不調所致也」に作る。すなわち、掲出語「嘔吐」が、「小兒」の前に配置されている。

『諸病源候論』本文に対して、このような改変を加えることによって、『和名抄』の統一的な文体「病源論云、（掲出語）、（和訓等）」という形式に整えることが可能となる。したがって、この『和名抄』独自の異文は、源順の意図的な改変である可能性が想定されてよい。

⑰癰癤（賀太禰）

心 医		抄 名 和			外台秘要方	諸病源候論
仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本
佚	病源論云、 座癰者、  由風湿冷氣搏於血、 結聚所成也…	病源論云、 癰癤、 （音子結反、 字亦作癥、 和名賀太禰。）  血 結聚所生也。	病源論云、 癰癤、 （節 反、 作癥、 和名加大禰。）  血 結聚所生也。	ナシ	病源論云、 癰癤、 （音節、 字亦作癥、 賀太禰。）  血 結聚所生也。	病源論云、 癰癤、 （音子結反、 字亦作癥、 賀太禰。）  血 結聚所生也。
					ナシ	瘰癧者、  由風湿冷氣搏於血、 結聚所生也…

方	
安政本	病源論云、座癰者、
叢書本	病源論云、座癰者、
	由風湿冷氣搏於血、結聚所成也…
	由風湿冷氣搏於血、結聚所成也…

\* 出典『諸病源候論』卷三十三・癰疽諸病下「座癰候」

【病源】座癰者、由風湿冷氣搏於血、結聚所生也。人運役勞動、則陽氣發泄、因而汗出、遇風冷湿氣搏於經絡、經絡之血、得冷所折、則結澁不通、而生座癰、腫結如梅李也。

【病候】又云、腫一寸二寸癰也。其不消而潰者、即宜熟捻去膿、至清血出。若膿汁未盡、其瘡合者、則更發。其著耳下頷頸掖下、若膿汁不盡、多變成癭也。

【養生】養生方云、人汗入諸食中、食之作癰癩。又云、五月、勿食不成核果及桃棗、發癰癩也。

第一に、『和名抄』⑰癰癩（賀太禰）に引用される本文は、『諸病源候論』卷三十三癰疽諸病下「座癰候」冒頭部にある。

座癰者、由風湿冷氣搏於血、結聚所生也。

座癰は、風湿・冷氣に由りて血に搏ち、結聚して生ずる所なり。

第二に、『諸病源候論』『医心方』は「座癰」に作るが、『和名抄』は「癰癩」に作る独自の異文である。源順は、「癰癩」の和訓「賀太禰」を掲出することを目的として、「癰癩」を掲出語としたものか。

第三に、『諸病源候論』『医心方』は「由風湿冷氣搏於血」に作るが、『和名抄』はこの文を節略して、「血」一字に作る。

第四に、『諸病源候論』は、次のように『養生方』を引用するが、そこには『和名抄』の掲出語「癰癩」が二度用いられている。  
養生方云、人汗入諸食中、食之作癰癩。又云、五月、勿食不成核果及桃棗、發癰癩也。

『養生方』に云はく、「人の汗諸食の中に入り、之れを食へば癰癤に作る」と。又云はく、「五月に、成らざる核果及び桃・棗を食ふこと勿れ、癰癤を發すなり」と。

源順は、『諸病源候論』が『養生方』を引くこの記述によって、『諸病源候論』の病源冒頭部の「瘰癧」と、『養生方』を引用した「癰癤」とを同じものとみなし、『和名抄』の掲出語を「癰癤」としたものであろう。したがって、『和名抄』独自の異文は、源順の改変である可能性が想定される。

⑳ 風癰疹（加佐保路之）

医		抄			和		外台秘要方	諸病源候論
仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本	病源、 癰癤…	諸病源候論 病源論云、風癰疹、 （加佐保路之。）人皮膚虚、為風邪所折、則起
佚	病源論云、 隱軫…	病源論云、風癰疹、 （和名加佐保路之。）人皮膚虚、為風寒所折、則起也。	病源論云、風癰疹、 （和名加佐保呂之。）人皮膚虚、為風寒所折、則起也。	ナシ	病源論云、風癰疹、 （加佐保路之。）人皮膚虚、為風寒所折、則起也。	病源論云、風癰疹、 （加佐保路之。）人皮膚虚、為風寒所折、則起也。	人皮膚虚、為風邪所折、則起	人皮膚虚、為風邪所折、則起

心方	
安政本	病源論云、 隱軫…
叢書本	病源論云、 隱軫…
	人皮膚虚、為風寒所折、則起
	人皮膚虚、為風寒所折、則起

\*出典『諸病源候論』卷二・風諸病下「風瘙隱軫生瘡候」

【病源】人皮膚虚、為風邪所折、則起隱軫。

【病候】寒多則色赤、風多則色白、甚者痒痛、搔之則成瘡。

第一に、『和名抄』⑳風癩軫（加佐保路之）は、『諸病源候論』卷二風諸病下「風瘙隱軫生瘡候」から、次の病源の冒頭部を引用する。

人皮膚虚、為風邪所折、則起隱軫。

人の皮膚虚にして、風邪の折く所と為れば、則ち隱軫起く。

第二に、『外台秘要方』『医心方』の本文も『諸病源候論』と一致する。これに対して、『和名抄』は「病源論云」の直後に、掲出語「風癩軫」を置く。

「風癩軫」を前に出したために、『諸病源候論』「則起隱軫」は、『和名抄』では「則起也」となる。これは、⑧嘔吐と同様に、源順が『和名抄』の文体を統一するために、文を改変した可能性がある。

以上の（a）（b）六例は、いずれも、『和名抄』が『諸病源候論』本文の冒頭部を引用したものである。これは、『和名抄』におけ

る『諸病源候論』引用の特徴とみなすことができるであろう。

また、(a)の三例が『諸病源候論』『医心方』の単なる節略であるのに対して、(b)の三例は、『和名抄』のみに見られる独自の異文であった。

(b)の三例⑧嘔吐・⑰癰癤・⑳風癰疹は、すべて、『諸病源候論』の同じ項目の文を操作して、『和名抄』の統一な文体に改変したものと考えられる。

『和名抄』は、文献を引用する際に、同一箇所ないしは近接する箇所から複数の掲出語を同一形式で引用することがある。『和名抄』のこの手法は、藏中進氏が『遊仙窟』引用について(12)、また、藏中しのぶ氏が『顔氏家訓』引用について(13)指摘されている。藏中進氏は、『和名抄』が『遊仙窟』を引用する場合に、他書や訓釈・音義の類からの孫引きではなく、源順が『遊仙窟』本文を直接参考して、対句を同時に採集し、同一形式をもって各項に配置したとされた。『和名抄』が『顔氏家訓』を引く例にも、『遊仙窟』とほぼ同様の事情が想定される。つまり、源順は直接『顔氏家訓』を参考し、対句をそれぞれ同時に採集し、同一形式をもって配置したのである。

『和名抄』が『諸病源候論』を引用する際にも、同様の手法を用いていると考えられる。

『和名抄』独自の異文⑧嘔吐・⑰癰癤・⑳風癰疹は、現存しない別の『諸病源候論』本文に依拠するものではなく、源順が『和名抄』編纂に際して統一的に採った文体「病源論云、(掲出語)、(和訓等)」に合わせるために、『諸病源候論』の本文を意図的に改変したものと考えられる。

三、二つの語彙の引用

『和名抄』が『諸病源候論』冒頭部を引用しない唯一の例が、⑫ 虻虫である。

⑫ 虻虫についても、『和名抄』独自の異文と同様、源順による意図的改変の可能性が想定される。

⑫ 虻虫（加以、阿久太）

医	抄 名 和						外台秘要方	諸病源候論
	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本			
仁和本	病源論云、 ：	病源論云、虻虫、 （今案一名寸白、俗云加以、又云阿久太） 飲白酒	病源論云、虻、 （今案一名寸白、俗云加以、又 阿久太） 飲白酒	病源論云、虻虫、 （今案一名寸白、俗云加以、又云阿久太） 飲白酒	病源論云、虻、 （音 廻 同。） 人腹中長虫也。 飲白酒	病源論云、虻、 （音 廻 同。） 人腹中長虫也。 飲白酒	病源、 ：	：
半井本	病源論云、 ：	唐韻云、虻、 （音 廻、蝟・蛔並同。） 人腹中長虫也。 飲白酒	唐韻云、虻、 音与廻 同。 人腹中長虫也。 食 生栗子所成也。	唐韻云、虻、 （音 廻 同。） 人腹中長虫也。 食 生栗等所成也。	唐韻云、虻、 （音 廻 同。） 人腹中長虫也。 食 生栗等所成也。	唐韻云、虻、 （音 廻、蝟・蛔並同。） 人腹中長虫也。 食 生栗等所成也。	：	：
	病源論云、 ：	病源論云、 ：	病源論云、 ：	病源論云、 ：	病源論云、 ：	病源論云、 ：	：	：
	飲白酒、 以桑樹枝貫牛肉灸食、 并生栗 所成：	飲白酒、 以桑樹枝貫牛肉灸食、 并生栗 所成：	飲白酒、 以桑樹枝貫牛肉灸食、 并生栗 所成：	飲白酒、 以桑樹枝貫牛肉灸食、 并生栗 所成：	飲白酒、 以桑樹枝貫牛肉灸食、 并生栗 所成：	飲白酒、 以桑樹枝貫牛肉灸食、 并生栗 所成：	：	：

心	
安政本	病源論云、…
方	飲白酒、以桑樹枝貫牛肉炙食、 并生栗 所成…
叢書本	病源論云、…
	飲白酒、以桑樹枝貫牛肉炙食、 并生栗 所成…

\*出典『諸病源候論』卷十八・九虫諸病「寸白候」

【病候】寸白者、九虫内之一虫也。長一寸、而色白、形小扁。

【病源】因府藏虚弱而能發動。或云、飲白酒、以桑枝貫牛肉炙食、并生栗所成。又云、食生魚後、即飲乳酪、亦令生之。

【病候】其發動則損人精氣、腰脚疼痛。又云、此虫生長一尺、則令人死。

『和名抄』⑫ 虻虫（加以、阿久太）は、『諸病源候論』卷十八九虫諸病「寸白候」から、次の文を引用する。

飲白酒、以桑枝貫牛肉炙食、并生栗所成。

白酒を飲み、桑枝を以て牛肉を貫き炙食し、並びに生栗の所成す。

『和名抄』の掲出語は、⑫ 虻虫である。しかし、『諸病源候論』は「寸白候」の病候の冒頭に「寸白者」とし、『外台秘要方』『医心方』はこれを継承する。

これについて、狩谷掖齋箋注は、次のように述べている。

按病源論有虻虫候云、長一尺、亦有長五六寸。又有寸白虫候云、長一寸而色白、形小扁、並云九虫之一虫也。是虻寸白二虫不同、源君以寸白為虻虫一名非是。

按ずるに、『病源論』に「虻虫候」有りて云はく、「長さ一尺、亦た長さ五、六寸有り」と。又、「寸白虫候」有りて云はく、「長さ一寸にして色白く、形小さく扁し」と。並に九虫の一虫なり。是れ、虻・寸白の二虫同じからず。源君、寸白を以て、虻虫の一

名と為すは是に非ず。

『諸病源候論』卷十八「九虫諸病」には、「九虫候」「三虫候」「虻虫候」「寸白虫候」「蟯虫候」の五症候があげられる。椽齋は、『諸病源候論』が「九虫」のうち、別の病候として掲げる「虻虫」「寸白」を、源順が同じものとみなして、掲出語「虻虫」のなかに「寸白」をいっしょに引用したことは正しくないとしているのである。

表2は、『諸病源候論』における「虻虫候」「寸白虫候」の本文を対照して示したものである。

表2・『諸病源候論』「虻虫候」と「寸白虫候」の本文

虻虫候	寸白虫候
<p>【病候】「虻虫」者、是九虫内之一虫也。長一尺、亦有長五六寸、</p> <p>【病源】或因府藏虚弱而動、或因食甘肥而動。</p> <p>【病候】其発動則腹中痛、発作腫聚、行来上下、痛有休息、亦攻心痛。口喜吐涎及吐清水、貫傷心者則死。</p> <p>【脈論】診其脈、腹中痛其脈法当沈弱弦、令反脈洪而大、則是虻虫也。</p>	<p>【病候】「寸白」者、九虫内之一虫也。長一寸、而色白、形小扁。</p> <p>【病源】因府藏虚弱而能発動。</p> <p>或云、飲白酒、以桑枝貫牛肉炙食、并生栗所成。</p> <p>又云、食生魚後、即飲乳酪、亦令生之。</p> <p>【病候】其発動則損人精气、腰脚痿弱。</p> <p>又云、此虫生長一尺、則令人死。</p>

表2から、「虻虫候」「寸白候」の本文が非常に類似していることが確認される。源順が両者を同一のものとして処理したのは、この類似性のためであろう。

第一に、『諸病源候論』において、「虻虫」「寸白」は、いずれも「九虫内之一虫也」と記される。

第二に、「虻虫」の大きさは「長一尺、亦有長五六寸」である。これに対して、「寸白」の大きさは「長一寸」とあるが、本文末尾には「又云、此虫生長一尺」とあって、いずれも大きさが同じ一尺になる。

第三に、病源は共通して「因府藏虚弱而動」と記される。

第四に、「虻虫」は「貫傷心者則死」、「寸白」は「則令人死」とあり、どちらも人を死に至らしめる。

「虻虫」と「寸白」はこのような共通点を持ち、記事の位置も隣接する。

本文の位置が近接したり、同一箇所から複数の掲出語を同一形式で引用する『和名抄』のこの手法は、前節で述べた『和名抄』の『遊仙窟』『顔氏家訓』引用と同じ手法である。源順は、他書や訓釈・音義の類からの孫引きではなく、直接『諸病源候論』本文を直接参考していた。そして、本文の内容を十分に理解したうえで、『諸病源候論』卷十八九虫諸病「寸白候」から、「虻虫」「寸白」という二つの語彙を同時に採集し、「虻虫」を掲出語として立て、その項目のなかに「今案、一名寸白」を入れたものと考えられる。

源順は、「虻虫」「寸白」をそれぞれ別の掲出語として独立させてはいない。「今案」は、源順自身の解釈を示す用語である(14)。「今案」は、源順自身が『諸病源候論』を十分に読解し、その理解にもとづいて慎重に「一名寸白」として付け加えたことを示すものとみてよい。

### 第三節 『諸病源候論』 「病候」 のみの引用

『和名抄』が『諸病源候論』の「病候」のみを引用するのは、次の十四例である。

(2) 病候のみ。十四例。

② 目翳・③ 雀盲・④ 喎僻・⑦ 津頤・⑨ 喉痺・⑪ 胡臭・⑮ 疔瘍・⑯ 黄疽・⑲ 瘤・⑳ 眈目・㉑ 鬼舐頭・㉓ 飼面・㉔ 白癩・㉕ 歴易  
この十四例は、出典『諸病源候論』における引用文の位置によって、次のように二分類される。さらに、その引用手法によって、(A)  
(B) はそれぞれを (a) (b) に二分類される。

(A) 『諸病源候論』の項目冒頭部を引用する例。十例。

(a) 節略。

③ 雀盲・⑦ 津頤・⑮ 疔瘍・⑲ 瘤・⑳ 眈目・㉓ 飼面・㉔ 白癩・㉕ 歴易

(b) 『和名抄』独自の異文。

⑨ 喉痺・⑪ 胡臭

(B) 『諸病源候論』の項目冒頭部を引用しない例。四例。

(a) 『和名抄』文体の統一。

② 目翳・④ 喎僻・⑯ 黄疽

(b) 「師説」注記の引用。

㉑ 鬼舐頭

そこで、次に、『和名抄』『外台秘要方』『医心方』諸本の本文を対照し、三書が引用する『諸病源候論』本文を精査することとする。

一、『和名抄』が『諸病源候論』冒頭部の引用する例

まず、『諸病源候論』の項目冒頭部を引用する十例のうち、次の八例は『和名抄』『諸病源候論』の本文がほぼ一致し、若干の節略を加える。

③雀盲（度利女）

方 心 医	抄 名 和				外台秘要方	諸病源候論
	元和本	天正本	天文本	箋注本		
半井本	病源論云、人有昼而精明、至暮則不見物、世謂之為雀目。	病源論云、人有	同論云、	病源論云、人	病源、人有昼而精明、至瞑則不見物、世謂之雀目。	人有昼而精明、至瞑則不見物、世謂之雀目。
仁和本	病源論云、人有昼而精明、至暮則不見物、世謂之雀目。	病源論云、人	至暮 不見物、謂之雀盲。〈俗云 度利女。〉謂	病源論云、人	至暮 不見物、世謂之雀盲。〈俗云 度利女。〉謂	如鳥雀、瞑便無所見也。
安政本	病源論云、人有昼而精明、至暮則不見物、世謂之為雀目。	病源論云、人	至暮 不見物、世謂之雀盲。〈俗云 度利女。〉謂	病源論云、人	至暮 不見物、世謂之雀盲。〈俗云 度利女。〉謂	如鳥雀、瞑便無所見也。
叢書本	病源論云、人有尽而精明、至暮則不見物、世謂之為雀目。	病源論云、人	至暮 不見物、世謂之雀盲。〈俗云 度利女。〉謂	病源論云、人	至暮 不見物、世謂之雀盲。〈俗云 度利女。〉謂	如鳥雀、無所見也。

\* 出典 『諸病源候論』 卷二十八・目諸病「雀目候」

【病候】人有昼而清明、至瞑則不見物、世謂之雀目。言其如鳥雀、瞑便無所見也。

第一に、『和名抄』③雀盲（度利女）は、『諸病源候論』卷二十八・目諸病「雀目候」の全文（冒頭部）を引用する。

人有昼而清明、至瞑則不見物、世謂之雀目。言其如鳥雀、瞑便無所見也。

人、昼にして清明らかなり、瞑に至れば即ち物見えず有り。いふところは、其れ、鳥雀に如く、瞑になれば便ち見るところ無きなり。

第二に、『諸病源候論』『外台秘要方』『医心方』は「雀目」に作るが、本論文が考察した『和名抄』諸本の掲出語と本文はすべて「雀盲」に作る。しかしこれについて、狩谷掖斎箋注は、次のように述べる。

昌平本雀盲作雀目、標目同。下総本標目作雀盲、正文作雀目。雀目与原書合、然本草雀条、千金方及医心方所引葛氏方新録方耆婆方録驗方、皆有雀盲。

昌平本に「雀盲」は「雀目」に作り、標目と同じ。下総本の標目に「雀盲」に作り、正文に「雀目」に作る。「雀目」は原書と合はず。然れば『本草』『雀』の条、『千金方』及び『医心方』に引く所の『葛氏方』『新録方』『耆婆方』『録驗方』に、皆「雀盲」有り。

掖斎が校合した『和名抄』『昌平本』『下総本』に、「雀盲」と「雀目」両方あり、中国の医書にも、「雀盲」が見られる。したがって、「雀盲」「雀目」は昔、ともに使われていたと考えてよいであろう。

第三に、『諸病源候論』『外台秘要方』は「瞑」に作るが、『和名抄』『医心方』の諸本は「暮」に作る。あるいは、平安中期に日本に伝わった『諸病源候論』の本文には「暮」とあったものか。中国では失われた『諸病源候論』の古い本文に「暮」とあった可能性が

想定される。

⑦津頤（与太利）

方 心 医				抄 名 和					外台秘要方	諸病源候論
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本		
病源論云、津頤之病、	病源論云、津頤之病、	病源論云、津頤之病、	病源論云、津頤之病、	病源論云、津頤、 （与多利。）	病源論云、津頤、 （与太利。）	病源論云、津頤、 （与多利。）	病源論云、津頤、 （与太利。）	病源論云、津頤、 （与多利。）	ナシ	滯頤之病、  是小兒多涎唾流出、漬於頤下：
是小兒多涎唾流出、漬於頤下也。	是小兒多涎唾流出、漬於頤下也。	是小兒多涎唾流出、漬於頤下也。	是小兒多涎唾流出、漬於頤下也。	小兒多涎唾流出 於頤下也。	小兒多涎唾流出 於頤下也。	小兒多涎流 於頤下。	小兒多涎唾流出 於頤下也。	小兒多涎唾流出 於頤下也。		

\*出典『諸病源候論』卷四十八・小兒雜病四「滯頤候」

【病候】滯頤之病、是小兒多涎唾流出、漬於頤下、

【病源】此由脾冷液多故也。脾之液為涎、脾氣冷、不能收制其津液、故令涎流出、滯漬於頤也。

第一に、『和名抄』⑦津頤（与太利）に一致する本文は、『諸病源候論』卷四十八・小兒雜病四「滯頤候」の冒頭部の一文である。

滯頤之病、是小兒多涎唾流出、漬於頤下。

滯頤の病は、是れ小兒、涎唾多く流出し、頤の下に漬る。

第二に、『医心方』は『和名抄』と同様、『諸病源候論』冒頭部にある「病候」の部分のみ引用する。ただし、『和名抄』は「之病」「是」「漬」を節略するが、『医心方』は「病候」全文引用する。

第三に、『諸病源候論』は「滯頤」に作るが、『和名抄』『医心方』の諸本は「津頤」に作る。これは、古い本文であると考えられる。

⑮瘡瘍（加知乃夜万比）

抄名和			外台秘要方	諸病源候論
天正本	天文本	箋注本	前田本	夫消渴者、
病源論云、消渴、 今案四声、瘡瘍作瘡瘍、音与消同、俗云（知乃也万比。） （二反）瘡瘍、（和名加知乃夜万比。）渴而不小便也。	病源論云、瘡瘍、（今案四声字苑、亦作瘡瘍、音消渴同、俗云加知乃夜万比。）渴而不小便之病也。	病源論云、消渴、（今案四声字苑、作瘡瘍、音与消渴同、俗云加知乃夜万比。）渴而不小便也。	病源論云、消渴、（今案四声字苑云、瘡瘍、音与消渴同、俗云加知乃夜万比。）渴而不小便也。	夫消渴者、 渴不止、小便多是也… 渴而不小便 是也…

方		心		医
元和本	病源論云、瘠瘵、（今案四声字苑云、瘠瘵、音与消渴同、俗云加知乃也万比。）渴而不	小便	也。	
半井本	病源論云、消者渴、	渴而不	小便	是也…
仁和本	佚			
安政本	病源論云、消者渴、	渴而不	小便	是也…
叢書本	病源論云、消渴者、	渴而不	小便	是也…

\*出典『諸病源候論』卷五・消渴諸病「消渴候」

【病候】夫消渴者、渴不止、小便多是也。

【病源】由少服五石諸丸散、積經年歲、石勢結於腎中、使人下焦虛熱。及至年衰、血氣減少、不復能制於石。石勢獨盛、則腎為之燥、故引水而不小便也。其病變多癆癰疽、此坐熱氣留於經絡不引、血氣壅滯、故成癰膿。

【脈論】診其脈、數天者生、細小浮者死。又沈小者生、実牢大者死。

【病源】有病口甘者、名為何、何以得之。此五氣之溢也、名曰脾瘿。夫五味入於口、藏於胃、脾為之行其精氣。溢在脾、令人口甘、此肥美之所發。

【病候】此人必數食甘美而多肥、令人內熱、甘者令人滿、故其氣上溢、為消渴。厥陰之病、消渴重、心中疼、飢而不欲食、甚則欲吐蚘。

【養生】養生法云、人睡臥、勿張口、久成消渴及失血色。赤松子云、臥、閉目、不息十二通、治飲食不消。其湯熨針石、別有正方、補養宣導、今附於後。法云、解衣惓臥、伸腰曠少腹、五息止。引腎、去消渴、利陰陽。解衣者、使無窒礙。惓臥者、無外想、使氣

易行。伸腰、使腎無逼蹙。瞋者、大努。使氣滿小腹者、即臚腹牽氣、使上息、即為之。引腎者、引水來咽喉、潤上部、去消渴枯槁病。利陰陽者、饒氣力。此中數虛要與時節而為避。初食後、大飢時、此二時不得導引、傷人。亦避惡日、時節不和時亦避。導已、先行一百二十步、多者千步、然後食之。法不使大冷大熱、五味調和。陳穢宿食、虫蝸余殘、不得食。少眇著口中、數嚼少湍涸。食已、亦勿眠。此名穀藥、并与氣和、即真良藥。

第一に、『和名抄』<sup>⑮</sup>瘡癘（加知乃夜万比）に一致する本文は、卷五・消渴諸病「消渴候」の冒頭部の一文である。

夫消渴者、渴不止、小便多是也。

それ消渴は、渴止まず、小便多く、是れなり。

第二に、『諸病源候論』は「渴不止、小便多」に作るが、『和名抄』『医心方』は「渴而不小便」に作る。これについて、狩谷掖斎箋注は、次のように述べる。

原書今本作消渴者渴不止小便多是也。外台秘要引与此全同。按原書次此文云、由少服五石諸丸散、積經年歲、石勢結於腎中、使人下焦虛熱。及至年衰、血氣減少、不復能制於石。石勢獨盛、則腎為之燥、故引水而不小便也。則作不小便為是。今本作小便多者、恐係宋人改竄。

原書の今本、「消渴は、渴止まず、小便多し是れなり」に作る。『外台秘要』に引く此（『和名抄』）と全く同じ。按ずるに、原書の此の文の次に云はく、「少きとき五石諸丸散を服し、年歳経れば積むに由り、石勢は腎中に結び、人の下焦をして虚熱せしむ。年衰に至るに及び、血氣減少し、また石に制する能はず。石勢独り盛んなれば、則ち腎これを燥くと為し、故に水を引くも小便せずなり」と。則ち「小便せず」に作るは是と為る。今本「小便多し」に作るは、恐らく宋人の改竄にかからんか。

掖斎が指摘するように、『外台秘要方』も「不小便」に作る。しかも、『諸病源候論』の後の文も「不小便」に作る。したがって、『諸

病源候論』冒頭部の「小便多」は、宋版『諸病源候論』校訂時に人為的に直された本文である可能性がある。つまり、『和名抄』『医心方』のほうに、古い本文を残していると考えられる。

第三に、『和名抄』は、『諸病源候論』の「者」「是」を省略して引用する。一方、『外台秘要方』は『諸病源候論』の全文、『医心方』は「脈論」以外の全文を引用する。

⑱ 瘤（之比禰）

方	心	医	抄			和	名	外台秘要方	諸病源候論
			元和本	天正本	前田本				
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	前田本	箋注本	外台秘要方	諸病源候論
病源論云、瘤者、	病源論云、瘤者、	佚	病源論云、瘤者、	病源論云、瘤、	病源論云、瘤、	病源論云、瘤、	病源論云、瘤、	肘後云、	瘤者、
皮肉中忽腫起、初如梅李大、漸長大、不療不痛、又不結強…	皮肉中忽腫起、初如梅李大、漸長大、不痒不痛、又不結強…		皮肉中忽腫起、初如梅李大、漸長大、不痒不痛、又不結強…	（留反、和名之比禰。）皮肉 急腫起、初如梅李、漸長大、不痒不痛、又不堅強者也。	（留反、和名之比禰。）皮肉 忽腫起、初如梅李、漸長大、不痒不痛、又不堅強者也。	（力求反、之比禰。）皮肉 急腫起、初如梅李、漸長大、不痒不痛、又不堅強者也。	（音留、之比禰。）皮肉 急腫起、初如梅李、漸長大、不痒不痛、又不堅強者也。	皮肉中忽腫起、初如梅李、漸長大、不痒不痛、又不結強…	皮肉中忽腫起、初如梅李大、漸長大、不痛不痒、又不結強…

\*出典『諸病源候論』卷三十一・癭瘤諸病「瘤候」

【病候】瘤者、皮肉中忽腫起、初梅李大、漸長大、不痛不痒、又不結強。言留結不散、謂之為瘤。不治、乃至壙大、則不復消。不能殺人、亦慎不可輒破。

第一に、『和名抄』⑲瘤（之比禰）に一致する本文は、卷三十一・癭瘤諸病「瘤候」の冒頭部の一文である。

瘤者、皮肉中忽腫起、初梅李大、漸長大、不痛不痒、又不結強。

瘤は、皮肉中忽ち腫れて起り、初めは梅李の大きなり、漸く長大し、痛からず、痒からず、又結強せず。

第二に、『和名抄』『医心方』は「不痒不痛」に作り、「初」の下に「如」の字があるが、『諸病源候論』は「不痛不痒」に作り、「如」の字がない。これは、古い系統の『諸病源候論』本文であると考えられる。

第三に、『諸病源候論』『医心方』は「結強」に作るが、『外台秘要方』『和名抄』は「堅強」に作る。しかし、『外台秘要方』の本文には、『諸病源候論』ではなく、『肘後備急方』は出典であると記されている。

『肘後備急方』の成立は晋代とされ、『諸病源候論』より三百年さかのぼる。しかし、『肘後備急方』は増補を二回経て、『外台秘要方』が引く右の一文は今日に伝わる『肘後備急方』に見いだせない。『諸病源候論』「瘤候」は『肘後備急方』を引用したのか。『和名抄』は『医心方』と異なる系統の『諸病源候論』本文を引用したのか。現段階で全く判断できないが、今後の課題とする。

⑳ 眇目（以比保、以乎女）

諸病源候論

疣目者、

人手足辺忽生如豆、或如結筋、或五箇、或十箇、相連肌裏、僂強於肉…

方 心 医				抄 名 和				外台秘要方
叢書本	安政本	多紀本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本
病源論云、 人手足辺忽生如豆、 或如結筋、或五箇、 或十箇、相連肌裏、 麤強於肉…	病源謂云、 人手足辺忽生如豆、 或如結筋、或五箇、 或十箇、相連肌裏、 麤 於内…	病源論曰、 人手足辺忽生如豆、 或如結筋、或五箇、 或十箇、相連肌裏、 麤強於肉…	病源謂云、 人手足辺忽生如豆、 或如結筋、或五箇、 或十箇、相連肌裏、 麤 於内…	病源論云、 眇目、 （今案眇即眇字也。 和名以比保、又 以乎女。） 人手足辺忽生如豆、 麤強於肉也。	病源論云、 眇目、 （和名伊比保、 一云（伊乎女。）	ナシ	病源論云、 眇目、 （今案眇即眇字也。 以比保、又 以乎女。） 麤強於肉者也。	病源論云、 眇目、 （今案眇即眇字也。 以比保、又 以乎女。） 麤強於肉也。

\* 出典 『諸病源候論』 卷三十一・癭瘤諸病「疣目候」

【病候】疣目者、人手足辺忽生如豆、或如結筋、或五箇、或十箇、相連肌裏、麤強於肉、謂之疣目。

【病源】此亦是風邪搏於肌肉而變生也。

第一に、『和名抄』⑳疣目（以比保、以乎女）は、『諸病源候論』卷卷三十一・癭瘤諸病「疣目候」から、次の冒頭部を引用する。

疣目者、人手足辺忽生如豆、或如結筋、或五箇、或十箇、相連肌裏、僂強於肉、謂之疣目。

疣目は、人の手足の辺りに忽ち豆の如きもの生じ、或は結筋の如く、或は五箇、或は十箇、肌の裏に相連なり、肉より僂く強く、之れを疣目と謂ふ。

第二に、『医心方』が『諸病源候論』の文章にほぼ手を加えず、そのまま引用するのに対し、『和名抄』は「人」「或如結筋、或五箇、或十箇、相連肌裏」を節略する。

㉓ 飼面（加須毛）

医	諸病源候論			外台秘要方	飼面者、 云面皮上有滓如米粒者 也…
	前田本	和 箋注本	名 天文本	抄 天正本	元和本
	病源論云、飼面、 （和名加須毛。） 面皮上有滓 是也。	病源論云、飼面、 （和名加須毛。） 面皮上有滓 是也。	ナシ	病源論云、飼面、 （和名加須毛。） 面皮上有滓 是也。	病源論云、飼面者、 面皮上有滓如米粒者 也…

心		方
多紀本	病源論曰、飼面者、	
	面皮上有滓如米粒者 也…	
安政本	病源論云、飼面者、	
	面皮上有滓如米粒者 也…	
叢書本	病源論云、飼面者、	
	面皮上有滓如米粒者 也…	

\*出典『諸病源候論』卷二十七・面体諸病「飼面候」

【病候】飼面者、云面皮上有滓如米粒者也。

【病源】此由膚腠受於風邪、搏於津液、津液之氣、因虛作之也。亦言因傳胡粉、而皮膚虛者、粉氣入腠理化生之也。

第一に、『和名抄』<sup>②③</sup>飼面（加須毛）に一致する本文は、卷卷二十七・面体諸病「飼面候」の冒頭部の一文である。

飼面者、云面皮上有滓如米粒者也。

飼面は、面皮の上に米粒の如き滓有る者と云ふなり。

第二に、『諸病源候論』は「飼面」に作るが、『和名抄』『医心方』の諸本は「飼面」に作る。これは、古い本文であると考えられる。

第三に、『諸病源候論』『医心方』は「滓」の下に「如米粒者」に作るが、『和名抄』はこの文を節略して、「滓」一字に作る。

②④白癩（之良波太）

諸病源候論		外台秘要方	和箋注本
白癩者、		ナシ	病源論云、白癩、へ一云白電、
面及頸項身体皮肉色變白、与肉色不同、亦不痒痛、謂之白癩…			之良波太。人面及身 頸 皮肉色變白、
			亦不痛痒 者也。
			之良波太。人面及身 頸 皮肉色變白、
			亦不痛痒 者也。

方 心 医			抄	名
叢書本	安政本	多紀本	元和本	天文本
病源論云、	病源論云、	病源論曰、	病源論云、白癩、(一云白電、 之良波太。)	ナシ
面及頸項身体皮肉色變白、 与肉色不同、亦不痛痒、 謂之白癩：	面及頸項身体皮肉色變白、 与肉色不同、亦不痛痒、 謂之白癩：	面及頸項身体皮肉色變白、 与肉色不同、亦不痛痒、 謂之白癩：	人面及身 頸 肉色變白、 亦不痛痒	者也。
			人面及身 頸 皮肉色變白、 亦不痛痒	者也。

\* 出典 『諸病源候論』 卷三十一・癭瘤諸病「白癩候」

【病候】 白癩者、面及頸項身体皮肉色變白、与肉色不同、亦不痛痒、謂之白癩。

【病源】 此亦是風邪搏於皮膚、血氣不和所生也。

第一に、『和名抄』<sup>②4</sup>白癩（之良波太）は、『諸病源候論』卷三十一・癭瘤諸病「白癩候」から、次の冒頭部を引用する。

白癩者、面及頸項身体皮肉色變白、与肉色不同、亦不痛痒、謂之白癩。

白癩は、面及び頸項・身体・皮肉の色白く変はり、肉色と同じからず、亦痒痛せず、之れを白癩と謂ふ。

第二に、『諸病源候論』は「痒痛」に作るが、『和名抄』『医心方』の諸本は「痛痒」に作る。これは、古い本文であると考えられる。

第三に、『諸病源候論』『医心方』は「頸項身体」につくるが、『和名抄』はこの文を節略して「身頸」に作る。

②⑤ 歷易（奈末豆波太）

方 心 医				抄 名 和				外台秘要方	諸病源候論
叢書本	安政本	多紀本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本		
<p>病源論云、 人頸辺及胸前掖下、自然斑剥点相連、色微白而円、亦有烏色者、無痛 痒、謂之癩瘍風也…</p>	<p>病源論云、 人頸辺及胸前掖下、自然斑剥点相連、色微白 円、亦有烏色者、無痛 養、謂之癩瘍 也…</p>	<p>病源論曰、 人頸辺及胸前掖下、自然斑剥点相連、色微白 円、亦有 色者、無痛 痒、謂之癩瘍 也…</p>	<p>病源論云、 人頸辺及胸前掖下、自然斑剥点相連、色微白 円、亦有烏色者、無痛 養、謂之癩瘍 也…</p>	<p>病源論云、歷易、 人頸 及胸前掖下、自然斑 点相連、 （奈末豆波太。） 不痛不痒。</p>	<p>病源論云、歷易、 人頸 及胸前掖下、自然斑 点相連、 （和名奈万豆波太。） 不痛不痒。</p>	<p>ナシ</p>	<p>病源論云、歷易、 人頸 及胸前掖下、自然斑 点相連、 （奈末豆波太。） 不痛不痒 者也。</p>	<p>ナシ</p>	<p>癩瘍者、 人頸辺有胸<sup>ツマ</sup>前掖下、自然斑剥点相連、色微白而円、亦有烏色者、亦無痛 痒、謂之癩瘍風…</p>

\* 出典『諸病源候論』卷三十一・癰瘡諸病「癰瘍候」

【病候】癰瘍者、人頸辺有胸前掖下、自然斑剥点相連、色微白而円、亦有烏色者、亦無痛痒、謂之癰瘍風。

【病源】此亦是風邪搏於皮膚、血氣不和所生也。

第一に、『和名抄』<sup>②</sup> 歴易（奈末豆波太）は、『諸病源候論』卷三十一・癰瘡諸病「癰瘍候」から、次の冒頭部を引用する。

癰瘍者、人頸辺及胸前掖下、自然斑剥点相連、色微白而円、亦有烏色者、亦無痛痒、謂之癰瘍風。

癰瘍は、人の頸の辺り及び胸の前、掖の下に、自然なる斑剥点相連なり、色は微かに白くして円く、亦烏色の者有り、亦痛痒なく、之れを癰瘍風と謂ふ。

第二に、『医心方』は『諸病源候論』の全文を引用するが、『和名抄』は、『諸病源候論』の「辺」「剥」「色微白而円、亦有烏色者」を節略する。

以上のように、『和名抄』と『医心方』は、『諸病源候論』から同じ箇所を引用する。しかし、『和名抄』の「病源論」引用の手法は、『医心方』とはかなり異なる。

専門的な医書である『医心方』は、『諸病源候論』から「脈論」を除くほぼ全巻から、原文に手を加えず、長文をそのまま引用する傾向にあるのに対して、『和名抄』は和訓の掲出に最小限必要な語彙・語義を引用するにとどまる。これは、『和名抄』の分類体漢和辞書としての性格に由来するものであり、『和名抄』と『医心方』の『諸病源候論』引用態度のちがいは、この点に集約されるといつてよい。

二、『和名抄』が『諸病源候論』『医心方』と一致しない例

『和名抄』が『諸病源候論』冒頭部を引用しながら、『諸病源候論』『医心方』と一致しない例が⑨喉痺・⑩胡臭の二例である。これは、『和名抄』独自の異文とみなすことができる。『和名抄』所引『諸病源候論』独自の異文は、どのようにして生じたのであろうか。次に、この二例について、『和名抄』本文に即して検討していくこととする。

⑨喉痺（古比）

心 医			抄 名 和					外台秘要方	諸病源候論
安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本	病源、 喉痺者、	喉痺者、
病源論云、喉痺者、	病源論云、喉痺者、	病源論云、喉痺者、	病源論云、喉痺、 （侯卑二反、俗訛云 古比。）	同論云、喉痺、 侯婢二音、俗訛 （古比。）	同論云、喉痺、 （侯婢二音、俗訛云 古比。）	病源論云、喉痺、 （侯婢二音、俗訛云 古比。）	病源論云、喉痺、 （侯婢二音、俗訛云 古比。）	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入 也…	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入 也…
喉裏腫塞痺痛、水漿不得入 也…	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入 也…	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入 也…	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入、是也。	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入、是也。	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入、是也。	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入、是也。	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入、是也。	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入 也…	喉裏腫塞痺痛、水漿不得入 也…

\*出典『諸病源候論』卷三十・咽喉等諸病「喉痺候」

【病候】喉痺者、喉裏腫塞痺痛、水漿不得入也。

【病源】人陰陽之氣出於肺、循喉嚨而上下也。風毒客於喉間、氣結蘊積而之熱、吹喉腫塞而痺痛。

【脈論】脈沈者為陰、浮者為陽、若右手悶上脈陰陽俱実者、是喉痺之候也。

【病候】亦令人壯熱而惡寒、七八日不死則死。

【養生】其湯熨針石、別有正方、補養者導、今附于後。養生方導引法云、両手拓両頬、手不動、樓肘使急、腰内亦然。住定放両肋

頭向外、肘轉腰氣散、尽勢大悶始起、来去七通。去喉痺。又云、一手長舒合掌仰、一手捉頬、挽之向外、一時拯勢二七。左右亦然。

手不動、両向側勢、急挽之二七。去頸骨急強、頭風脳旋、喉痺、髀内冷注偏風。

第一に、『和名抄』⑨喉痺（古比）に一致する本文は、『諸病源候論』卷三十・咽喉等諸病「喉痺候」の冒頭部の一文である。

喉痺者、喉裏腫塞痺痛、水漿不得入也。

喉痺は、喉の裏に腫塞して痺痛し、水漿入るを得ざるなり。

第二に、『諸病源候論』『外台秘要方』『医心方』の本文になく、『和名抄』諸本のみに見られる特徴的な本文として、文末に「是也」

を付す文体がある。「是也」は『和名抄』に三七例確認される。その分布状況は、源順の序に四例、割注に二四例、引用本文に九例で

ある。これは出典『諸病源候論』本文の必要部分のみを引用し、最後に「是也」とむすぶ『和名抄』の辞書的な文体とみられる。

⑪胡臭（和歧久曾）

方 心 医				抄 名 和					外台秘要方	諸病源候論
叢書本	安政本	多紀本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本		
<p>病源論云、 如狐狸之氣者、</p> <p>人腋下臭、如葱豉之氣者、亦言 故謂 狐臭…</p>	<p>病源論云、 如狐狸之氣者、</p> <p>人腋下臭、如葱豉之氣者、亦言 故謂之狐臭…</p>	<p>病源論曰、 如狐狸之氣者、</p> <p>人腋下臭、如葱豉之氣者、亦言 故謂之狐臭…</p>	<p>病源論云、 如狐狸之氣者、</p> <p>人腋下臭、如葱豉之氣者、亦言 故謂之狐臭…</p>	<p>病源論云、胡臭、 如狐狸之氣也。</p> <p>病源論云、胡臭、 （和 岐久曾。） 人掖下臭、如葱豉之氣。 又 謂之狐臭、</p>	<p>病源論云、胡臭、 如狐狸之氣也。</p> <p>（和 木久曾。） 人掖 臭、如葱豉之氣。 又 謂之掖臭、</p>	<p>病源論云、胡臭、 如狐狸之氣也。</p> <p>（和 名岐久曾。） 人掖下臭、如葱豉之氣。 亦 謂之狐臭、</p>	<p>病源論云、胡臭、 如狐狸之氣也。</p> <p>（和 岐久曾。） 人腋下臭、如葱豉之氣也。 亦 謂之狐臭、</p>	<p>病源論云、胡臭、 如狐狸之氣也。</p> <p>（和 岐久曾。） 人掖下臭、如葱豉之氣也。 亦 謂 狐臭、</p>	<p>病源、 如狐狸之氣者、</p> <p>人腋下臭、如葱豉之氣者、亦言 故謂之狐臭…</p>	

\* 出典『諸病源候論』卷三十一・癭瘤諸病「狐臭候」

【病候】人掖下臭、如葱豉之氣者、亦言如狐狸之氣者、故謂之狐臭。

【病源】此皆血氣不和、蘊積故氣臭。

第一に、『和名抄』⑩胡臭（和歧久曾）は、『諸病源候論』卷三十一・癭瘤諸病「狐臭候」から、次の冒頭部を引用する。

人掖下臭、如葱豉之氣者、亦言如狐狸之氣者、故謂之狐臭。

人の掖の下臭し、葱豉の氣の如き者、亦狐狸の氣の如くと言ふ者、故にこれを狐臭と謂ふ。

第二に、『和名抄』は「病源論云」の下に掲出語「胡臭」を補い、「胡臭」は「如葱豉之氣」とした。また、表記の異なる「狐臭」を掲げて「如狐狸之氣」に対応させた。このような改変を加えることによって、『和名抄』の辞書としての統一的な文体、「病源論云」、「掲出語」、「和訓等」という形式に整えることが可能となる。したがって、この『和名抄』独自の異文は、源順の意図的な改変の可能性が高いとみてよいであろう。

第三に、『諸病源候論』は「狐臭」とするが、『和名抄』は掲出語「胡臭」、本文には「胡臭」「狐臭」を掲げる。『医心方』の掲出語は「胡臭」、本文は『諸病源候論』を引いており、「胡臭」「狐臭」の二語を掲げる。

一方、唐代の医書、永徽元年（六五〇）孫思邈の撰になる『備急千金要方』には「胡臭」が十二例、天宝十一年（七五二）王燾の撰になる『外台秘要方』には「胡臭」が十一例・「狐臭」が二例確認される。唐代の医書には「胡臭」「狐臭」の表記があった。『和名抄』『医心方』は、『諸病源候論』以外の医書にみられる「胡臭」を知っていたことになる。したがって、源順は『諸病源候論』以外の唐代医書を参看していた可能性がある。

以上の（a）（b）十例は、いずれも、『和名抄』が『諸病源候論』本文の冒頭部を引用したものである。冒頭部の引用は、『和名抄』の『諸病源候論』引用の特徴とみなすことができるであろう。

また、（a）の八例が『諸病源候論』『医心方』の単なる節略であるのに対して、（b）の二例⑨喉痺・⑩胡臭は、『和名抄』独自の異文であった。これは、現存しない別の『諸病源候論』本文に依拠するものではなく、源順が『和名抄』編纂に際して統一をはかった文体に合わせるために、『諸病源候論』の本文を意図的に改変したものと考えられる。

### 三、『和名抄』が『諸病源候論』冒頭部を引用しない例

『和名抄』が『諸病源候論』項目冒頭部を引用しないのは次の四例②目翳・④喎僻・⑯黄疸・⑳鬼舐頭である。

#### ②目翳（比）

		諸病源候論	外台秘要方
名	和	… 膚 翳者、 明眼睛 上有物如蠅翅者即是。	病源、 … 膚 翳者、 明眼睛 上有物如蠅翅者即是。
前田本	箋注本	病源論云、目 翳、（於麗反、俗云比。） 目膚、 眼精之上有物如蠅翅 是也。	病源論云、目 翳、（於麗反、俗云比。） 目膚、 眼精 上有物如蠅翅 是也。
天文本	天文本	病源論云、目膚 翳、（於麗切、俗云比。） 眼精 上有物如蠅翅 是也。	病源論云、目膚 翳、（於麗切、俗云比。） 眼精 上有物如蠅翅 是也。
天正本		病源論云、目膚目翳、（於麗反、和名比。） 眼精 上有物如蠅翅 是也。	病源論云、目膚目翳、（於麗反、和名比。） 眼精 上有物如蠅翅 是也。

抄	医	心	方
元和本 病源論云、目翳、（於麗反、和名比。）目膚、眼精之上有物如蠅翅 是也。	半井本 病源論云、…膚翳者、 明眼精 上有物如蠅翅者 是也。	仁和本 病源論云、…膚翳者、 明眼精 上有物如蠅翅者 是也。	安政本 病源論云、…膚翳者、 明眼精 上有物如蠅翅者 是也。
叢書本 病源論云、…膚翳者、 明眼精 上有物如蠅翅者 是也。			

\*出典『諸病源候論』卷二十八・目諸病「目膚翳候」

【病源】陰陽之氣、皆上注於目。若風邪痰氣、乘於府藏、府藏之氣虛実不調、故氣衝於目、久不散、變生膚翳。

【病候】膚翳者、明眼睛上有物如蠅翅者即是。

第一に、『和名抄』②目翳（比）は、『諸病源候論』卷二十八・目諸病「目膚翳候」から、次の文を引用する。

膚翳者、明眼睛上有物如蠅翅者即是。

膚翳は、眼睛を明るくし、上に蠅の翅の如き者有り、即ち是れなり。

第二に、この項目の冒頭の病源ではなく、病候を引用する。『諸病源候論』『外台秘要方』『医心方』本文には「目」がないが、『和名抄』は項目名「目膚翳候」の「目」を引くものか。「膚翳者」を引用することで、「病源論云、目膚翳、（於麗反、俗云比）」の文体に統一することが可能となる。

④ 喞僻（久知由賀無）

諸病源候論

…喞僻、

言語不正…

方 心 医				抄 名 和				外台秘要方
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本
∴故使口喎僻、	∴故使口喎僻、	佚	∴故使口喎僻、	說文云、喎、 病源論云、喎僻、 〈口蛙反、或作喎、 和名久知由賀無。〉 口戾也。 則言語不正也。	說文云、喎僻、 一云、喎僻、 〈口蛙反、 和名久知由賀無。〉 口戾也。 言不正也。	說文云、喎、 病源論云、喎僻、 〈口蛙反、或作喎、 則言語不正也。〉 久知由賀無。口戾也。	說文云、喎、 病源論云、喎僻、 〈口蛙反、或作喎、 則言語不正。〉 久知由賀無。口戾也。	說文云、喎、 病源論云、喎僻、 〈口蛙反、或作喎、 則言語不正也。〉 久知由賀無。口戾也。
言語不正∴	言語不正∴		言語不正∴					病源、 ∴喎僻、 言語不正∴

\*出典『諸病源候論』卷一・風諸病上「風口喎候」

【病源】風邪入於足陽明、手太陽之經、遇寒則筋急引頰、故使口喎僻、

【病候】言語不正、而目不能平視。

【脈論】診其脈、浮而遲者、可治。

【養生】養生方、云夜、臥当耳勿得有孔。風入耳中、喜令口喎。

第一に、『和名抄』④喎僻（久知由賀無）は、『諸病源候論』卷一・風諸病上「風口喎候」から、次の文を引用する。

故使口喎僻、言語不正。

故に口をして喎僻せしめ、言語正しからず。

第二に、『外台秘要方』は『諸病源候論』の全文、『医心方』は「脈論」以外の全文を引用するが、『和名抄』はまず、『説文』を引用し、割注で「喎（喎）」の和訓「久知由賀無」を掲げ、次に『諸病源候論』を引用して、この和訓と対応する「言語不正」を引く。『諸病源候論』卷一・風諸病上「風口喎候」の引用に際して、項目冒頭の病源ではなく、病候の冒頭を引用したのは、このためである。

⑩黄疸（岐波無夜万比）

名 和		外台秘要方	諸病源候論
天文本	箋注本	病源、 黄疸之病、…	黄疸之病、… 令身体面目及爪甲小便尽黄…
同	病源論云、 黄疸、 （音旦、一云黄病、 之病也。	病源論云、 黄疸、 （音旦、一云黄病、 之病也。	令身体面目及爪甲小便尽黄… 岐波無夜万比。… 身体面目爪甲及小便尽黄…
云、 黄疸、 （下音旦、 一云黄病、 之病也。	岐波無夜末比。… 身体面目爪甲及小便尽黄…		

抄		医		心		方					
天正本	病源論云、黄疸、 之病。 〔黄病、和名岐波無夜万比。〕 身体面目爪甲及小便尽黄	元和本	病源論云、黄疸、 〔音旦、一云黄病、 岐波無夜万比。〕 身体面目爪甲及小便尽黄 之病也。	半井本	病源論云、黄疸之病、 … 令身体面目爪甲及小便尽黄…	仁和本	病源論云、黄疸之病、 … 令身体面目爪甲及小便尽黄…	安政本	病源論云、黄疸之病、 … 令身体面目爪甲及小便尽黄…	叢書本	病源論云、黄疸之病、 … 令身体面目爪甲及小便尽黄…

\* 出典 『諸病源候論』 卷十二・黄諸病「黄疸候」

【病源】**黄疸之病**、此由酒食過度、府藏不和、水穀相并、積於脾胃。復為風濕所搏、瘀結不散、熱氣鬱蒸。

【病候】故食已如飢、令**身体面目及爪甲小便尽黄**、而欲安臥。若身体多赤黒多青皆見者、必寒熱身痛。面色微黄、齒垢黄、爪甲上黄、黄疸也。渴而疸者、其病難治、疸而不渴、其病可治。発於陰部、其人必嘔、発於陽部、其人振寒而微熱。

第一に、『和名抄』⑩黄疸（岐波無夜万比）は、『諸病源候論』卷十二・黄諸病「黄疸候」から、次の文を引用する。

黄疸之病、…令身体面目及爪甲小便尽黄。

黄疸の病は、…身体・面目及び爪甲・小便をして、尽く黄ばましむ。

第二に、「病源論云」の後に「黄疸」とし、「之病」二字は文末に置く。この操作によって「黄之病」に、⑩黄疸の和訓「岐波無夜万比」を対応させることが可能になる。



医	心	方
仁和本 病源論曰、 謂之鬼舐頭。	多紀本 病源論云、 故謂之鬼舐頭也。	叢書本 病源論云、 故謂之鬼舐頭也。
人有風邪在於頭、 ∴或如錢大、 或如指大、 髮不生、 亦不痒、	人有風邪在於頭、 ∴或如錢大、 或如指大、 髮不生、 亦不痒、	人有風邪在於頭、 ∴或如錢大、 或如指大、 髮不生、 亦不痒、

\*出典『諸病源候論』卷二十七・髮毛諸病「鬼舐頭候」

【病源】人有風邪在於頭、有偏虛処、則髮禿落、肌肉枯死。

【病候】或如錢大、或如指大、髮不生、亦不痒、故謂之鬼舐頭。

第一に、『和名抄』<sup>②</sup>鬼舐頭は、『諸病源候論』二十七・髮毛諸病「鬼舐頭候」から、次の文を引用する。

人有風邪在於頭、∴或如錢大、或如指大、髮不生、亦不痒、故謂之鬼舐頭。

人に風邪有るとき、頭に在り、∴或は錢の大きさの如く、或は指の大きさの如く、髮生ぜず、亦痒からず、故に之を鬼舐頭と謂ふ。

第二に、『和名抄』は、掲出語「鬼舐頭」を「人頭」の前に置く。これは『和名抄』の文体の形式に整えるための改変であろう。

第三に、『和名抄』には、割注として「師説」の注記があるが、和訓はない。漢語を掲出し、万葉仮名で和名・和訓を示すという『和名抄』のありかたからすれば、異例の注記であると言えよう。

狩谷棧齋「箋注」は、この「師説」注記について、次のように述べる。

按「下食日」、見『口遊』陰陽門、『拾芥抄』諸事吉凶部。『曆林問答』、有「歳下食」、有「下食時」。引『尚書曆』曰、「下食時者、避其時、不忌其日。沐髮、種菓木、忌其時」。『江次第抄』云、「下食者、鬼神之名。此日沐浴、則鬼舐頭而髮落是也。但此注「為

天狗下食所舐」、謂下食日時沐浴、則天狗下来、食舐之、令髮落也。

按ずるに、「下食日」、「口遊」の陰陽門、『拾芥抄』の諸事吉凶部に見ゆ。『曆林問答』は、「歳下食」有り、「下食時」有り。『尚書曆』を引ひて曰はく、「下食時は、其の時を避け、其の日を忌まず。髪を沐ひ、菓木種多、其の時を忌む」と。『江次第抄』に云はく、「下食は、鬼神の名なり。此の日に沐浴すれば、則ち鬼頭を舐め、髮落ち、是れなり」と。但し、此に「天狗下食に、舐めるところと為す」と注す。下食日時に沐浴すれば、則ち天狗下来して食し、これを舐め、髪を落ちしむと謂ふなり。

掖齋は、この「師説」注記は『和名抄』より時代の下る有職故実の書物・源為憲撰『口遊』・洞院公賢撰『拾芥抄』・賀茂在方撰『曆林問答集』・大江匡房撰『江家次第』の注釈書である一条兼良撰『江次第抄』の本文を引く。

『和名抄』の「師説」注記について、藏中しのぶ氏は『和名抄』の引用書目、特に「師説」注記の付された書目が律令の範疇に収まるものを多く含んでおり、『和名抄』の背後には律令があり、大学寮をはじめとする講筵の場、学問教育の場を想定された。

「師説」の背後には、公私にわたる講書・講筵の場、学問教育があり、しかも、それらは平安初期をさかのぼり、奈良朝以前の痕跡をとどめている場合も少なくない。奈良朝においても、律令学・仏教学・文学の講説の場が公私にわたって開筵され、それらが注釈・語釈の形式をとって伝わり、『和名抄』にも、その幾何かが拾い上げられている(15)。

この「師説」は、『諸病源候論』『医心方』には見られない。日本で付された「師説」を『和名類聚抄』が引いた可能性がある。また、「鬼舐頭」について、源順は、掲出語は医学書『諸病源候論』を引き、「師説」は後世の有職故実書に見える質の注記を引用した可能性もある。

#### 第四節 『諸病源候論』 「病源」と 「病候」 の引用

『和名抄』が『諸病源候論』の「病源」と「病候」両方を引用するのは、次の五例である。

(3) 病原と病候。五例。

① 聾耳・⑩ 重舌・⑬ 脱疔・⑳ 漆瘡・㉔ 肉刺

この五例は、出典『諸病源候論』における引用文の位置によって、次のように二分類される。

(A) 『諸病源候論』の項目冒頭部を引用する例。三例。

⑬ 脱疔・⑳ 漆瘡・㉔ 肉刺

(B) 『諸病源候論』の項目冒頭部を引用しない例。二例。

① 聾耳・⑩ 重舌

そこで、次に、『和名抄』『外台秘要方』『医心方』諸本の本文を対照し、三書が引用する『諸病源候論』本文を精査することとする。

##### 一、『和名抄』が『諸病源候論』冒頭部の引用する例

まず、『和名抄』が『諸病源候論』の「病源」と「病候」両方を引用する五例のうち、『諸病源候論』の項目冒頭部を引用する三例である。

⑬脱肛（之利以豆流夜万比）

方 心 医				抄 名 和				外台秘要方	諸病源候論	
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本	病源、 脱肛者、	脱肛者、
病源論云、脱肛者、	病源論云、脱肛者、	病源論云、脱肛者、	病源論云、脱肛者、	病源論云、脱肛、 （古紅反、字亦作肛。 和名之利以豆流夜万比。）	病源論云、脱肛、 （工 字）作肛。 （和名之利伊豆流夜万比。）	病源論云、脱肛、 （下音工、亦作肛。 之利以豆流夜末比。）	病源論云、脱肛、 （疰音工、字亦作肛。 之利以豆流夜万比。）	病源論云、脱肛、 （疰古紅反、字亦作肛也。 之利以豆流夜万比。）	病源、 脱肛者、	脱肛者、
肛門脱出也。多由久利 大腸虚冷 所為：	門脱出也。多由久利 大腸虚冷 所為：	肛門脱出也。多由久利 大腸虚冷 所為：	門脱出也。多由久利 大腸虚冷 所為：	肛門脱出也。久痢則大腸虚冷 所為也。	肛門脱出也。久 則大腹虚冷 所為也。	肛門脱出也。久痢則大傷虚冷 所為也。	肛門脱出也。久痢則大腸虚冷 所為也。	肛門脱出也。又痢則大腸虚冷 所為也。	肛門脱出也。多因久痢後大腸虚冷 所為：	肛門脱出也。多因久痢後大腸虚冷 所為：

\*出典『諸病源候論』卷十七・諸痢病候「脱肛候」

【病候】脱肛者、肛門脱出也。

【病源】多因久痢後大腸虚冷所為。肛門為大腸之候、大腸虚而傷於寒、痢而用气嘔、其气下衝、則肛門脱出、因謂脱肛也。

第一に、『和名抄』⑬脱疔（之利以豆流夜万比）は、『諸病源候論』卷十七・諸痢病候「脱肛候」冒頭部の一文を引用している。

脱肛者、肛門脱出也。多因久痢後大腸虚冷所為。

脱肛は、肛門の脱出なり。多くは久痢の後に大腸の虚冷に因る所為なり。

第二に、『外台秘要方』『医心方』は『諸病源候論』の文章にほぼ手を加えず、そのまま引用するのに対し、『和名抄』は「者」「多因」を節略する。

⑫ 漆瘡（宇流之加不礼）

医	和名抄				外台秘要方	諸病源候論
	元和本	天正本	天文本	箋注本		
半井本	病源論云、 是也。	病源論云、漆瘡、 （和名宇流之加不礼。）人 是也。	ナシ	病源論云、漆瘡、 是也。	病源論云、漆瘡、 足也。	漆有毒、人有稟性畏漆、 但見漆便中其毒。喜面痒、 然後胸臂脞膈皆悉搔痒、 面為起腫
病源論云、 漆有毒、人有稟性畏漆、 但見漆便中其毒、喜面痒、 然後胸臂脞膈皆悉搔痒、 面為起腫	見漆 中其毒 而腫、	見漆 中其毒 而腫、	見漆 中其毒 而腫、	見漆 中其毒 而腫、	見漆 中其毒 而腫、	

心		方
仁和本	病源論云、	
安政本	病源論云、	
叢書本	病源論云、	漆有毒、人有稟性畏漆、但見漆便中其毒、喜面痒、然後胸臂胫膕皆悉搔痒、面為起腫

\* 出典『諸病源候論』卷三十五・瘡諸病「漆瘡候」

【病源】漆有毒、人有稟性畏漆、但見漆便中其毒。

【病候】喜面痒、然後胸臂胫膕皆悉搔痒、面為起腫、繞眼微赤、諸所痒處、以手搔之、随手輦展、起赤瘡癩。瘡癩消已、生細粟瘡甚微、有中毒輕者、証候如此。其有重者、遍身作瘡、小者如麻豆、大者如棗杏、膿焮疼痛、摘破小定有小差、隨次更生。若火燒漆、其毒氣則厲、著人急重。亦有性自耐者、終日燒煮、竟不為害也。

第一に、『和名抄』②漆瘡（宇流之加不礼）は、『諸病源候論』卷三十五・瘡諸病「漆瘡候」冒頭部の一文を引用している。

漆有毒、人有稟性畏漆、但見漆便中其毒。喜面痒、然後胸臂胫膕皆悉搔痒、面為起腫。

漆に毒有り、人に漆を畏るる稟性有り、但だ漆を見れば便ち其の毒に中り、喜く面痒く、然る後に胸・臂・胫・膕、皆悉く搔痒し、面は腫れを起すと為る。

第二に、『諸病源候論』『医心方』の本文にないが、『和名抄』諸本のみに見られる本文として文末に「是也」を付す文体がある。これは、すでに前節で述べた⑨喉痺と同じように、『和名抄』の辞書的な文体とみられる。

第三に、『和名抄』は、掲出語「漆瘡」を「病源論云」の下に補う。これは『和名抄』の文体の形式に整えるための改変であろう。

②⑥ 肉刺（乃以須美）

方 心 医				抄 名 和				外台秘要方	諸病源候論
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	和箋注本		
病源論云、肉刺者、謂之肉刺。	病源論云、肉刺者、謂之肉刺。	佚	病源論云、肉刺者、謂之肉刺。	病源論云、肉刺、（和名乃以須美。）	病源論云、肉刺、（和名乃以須美。）	ナシ	病源論云、肉刺、（乃以須美。）	病源論云、肉刺、（乃以須美。）	謂之肉刺。肉刺者、
脚指間生肉如刺、	脚指間生肉如刺、		脚指間生肉如刺、	脚指間生肉如刺、	指間生肉如刺、		脚指間生肉如刺、	脚指間生肉如刺、	脚指間生肉如刺、
由着靴忽、小指相	由着靴忽、小指相		由着靴忽、小指相	由着靴	小相靴小相		由着靴	由著靴、小指相	由著靴急、小指相
措而生。	措而生。		措而生。	小相	措而所生也。		措而所生也。	措而所生也。	措而生也。

\* 出典 『諸病源候論』 卷三十・咽喉等諸病「肉刺候」

【病候】脚指間生肉如刺、謂之肉刺。

【病源】肉刺者、由著靴急、小指相措而生也。

第一に、『和名抄』<sup>②⑥</sup>肉刺（乃以須美）は、『諸病源候論』卷三十・咽喉等諸病「肉刺候」の全文（冒頭部）を引用する。

脚指間生肉如刺、謂之肉刺。肉刺者、由著靴急、小指相措而生也。

脚の指の間に、肉生じて刺の如く、之を肉刺と謂ふ。肉刺は、靴を急ぎて著くに由り、小指を相措りて生ずるなり。

第二に、『諸病源候論』は「肉刺者、由著靴急」に作るが、『和名抄』『医心方』『肉刺（者）』は文の冒頭のところにある。これは、平安中期に日本に伝わった『諸病源候論』の本文には「肉刺者、脚指間生肉如刺」とあったものか。中国では失われた『諸病源候論』の古い本文に「肉刺者、脚指間生肉如刺」とあった可能性が想定される。

## 二、『和名抄』が『諸病源候論』冒頭部を引用しない例

『和名抄』が『諸病源候論』項目冒頭部を引用しないのは次の二例①聾耳・⑩重舌である。

### ①聾耳（美々太利）

諸病源候論	故謂之聾耳。  …熱乗虚也。入於其經、邪随血氣至耳、熱氣聚則生膿汁、
外台秘要方	病源、 故謂之聾耳。  …熱乗虚而。入於其經、邪随血氣至耳、熱氣聚則生膿汁、



熱は虚に乗ずるなり。其の経に入り、邪は血氣に随ひて耳に至り、熱氣聚まれば則ち膿汁生じ、故に之を聾耳と謂ふ。

第二に、『和名抄』は、掲出語「聾耳」を「病源論云」の下に置く。これは『和名抄』の文体の形式に整えるための改変である。そしてこの改変によって、引用に際して、項目冒頭の「耳者」の一文ではなく、冒頭部以外の部分を引用したのであろう。

第三に、『諸病源候論』は「熱」に作るが、『和名抄』『医心方』『風熱』に作る。これは、古い本文であると考えられる。

⑩重舌（古之太）

医心方				和名抄				外台秘要方	諸病源候論
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本	ナシ
病源論云、 …熱氣随脈衝於舌本血脈脹起、 変生如舌之状、在舌本之下、 謂之重舌。	病源論云、 …熱氣随脈衝於舌本血脈脹起、 変生如舌之状、在舌本之下、 謂之重舌。	病源論云、 …熱氣随脈衝於舌本血脈脹起、 変生如舌之状、在舌本之下、 謂之重舌。	病源論云、 …熱氣随脈衝於舌本血脈脹起、 変生如舌之状、在舌本之下、 謂之重舌。	病源論云、 舌本血脈脹然、 変生如舌之状、 謂之重舌也。	病源論云、 舌本脈脹然、 変生如舌之状、 謂之重舌也。	病源論云、 舌本血脈脹然、 変生如舌之状、 謂之重舌也。	病源論云、 舌本血脈脹然、 変生如舌之状、 謂之重舌也。	病源論云、 舌本血脈脹然、 変生如舌之状、 謂之重舌也。	…熱氣随脈衝於舌本血脈脹起、 変生如舌之状、在舌本之下、 謂之重舌。

\* 出典『諸病源候論』卷三十・唇口諸病「重舌候」

【病源】舌、心之候也。脾之脈起於足大指、入連於舌本。心脾有熱、熱氣随脈衝於舌本、血脈脹起。

【病候】変生如舌之状、在於舌本之下、謂之重舌。

第一に、『和名抄』⑩重舌（古之太）は、『諸病源候論』卷三十・唇口諸病「重舌候」から、次の文を引用する。

熱氣随脈衝於舌本、血脈脹起、変生如舌之状、在於舌本之下、謂之重舌。

熱氣は脈に随ひて舌本に衝けば、血脈脹れ起り、変じて舌の状の如きを生じ、舌本の下に在り、之を重舌と謂ふ。

第二に、『和名抄』は割注として和訓を掲出したのは「天文本」「箋注本」のみである。『和名抄』の辞書としての統一的な文体、「病源論云、「掲出語」、「和訓等」という形式に整えていない。これは、漢語を掲出し、万葉仮名で和名・和訓を示すという『和名抄』のありかたからすれば、異例であると言えよう。

### 第五節 『諸病源候論』本文に確認されない引用

『和名抄』が現存する『諸病源候論』にない本文を「病源論」として引用する例は、⑭臨瀝一例である。

⑭ 臨瀝（之太天由波利）

諸病源候論

ナシ

方 心 医				抄	名	和	外台秘要方
叢書本	安政本	仁和本	半井本	元和本	天文本	和箋注本	前日本
ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	病源論云、臨瀝、 音歴、之（太天由波利。） 小便滴瀝也。	病源論云、臨瀝、 音歴、之（太天由波利。） 小便滴瀝也。	病源論云、臨瀝、 音歴、之（太天由波利。） 小便滴瀝也。	病源論云、臨瀝、 音歴、之（太天由波利。） 小便滴瀝也。

⑭臨瀝（之太天由波利）について、狩谷掖斎「箋注」は、次のように述べられる。

所引文原書無載。恐源君誤引。按臨瀝当作淋瀝。病源候論諸淋候云、腎虚則小便数、膀胱熱則水下澁、数而且澁、則淋瀝不宣、故謂之為淋。

引く所の文、原書に載すること無し。恐らく源君誤りて引く。按ずるに「臨瀝」当に「淋瀝」に作るべし。『病源論』「諸淋候」に云はく、「腎虚すれば則ち小便しばしばし、膀胱熱ければ則ち水下澁り、しばしばして且つ澁れば、則ち淋瀝して宣らず、故にこれを淋と為す」と。

狩谷掖斎が「臨瀝」を正しくは「淋瀝」であり、この項目を「誤引」とみて指摘するが、一方、次のふたつの解釈も想定される。

第一に、現存する『諸病源候論』とは異なる本文をもつ別の系統の『諸病源候論』にはかつて存在しており、『和名抄』はその系統の伝本を参看して本文を引用したとみる考え方である。つまり、中国では失われた『諸病源候論』の本文が、日本の『和名抄』にのみ、独自に残存していたという解釈である。しかし、日本の『医心方』をはじめ、現存する『諸病源候論』を引用した医書に「淋瀝」を「小便滴瀝」と解釈するものが見いだされない。『和名抄』に引かれた一文は、『諸病源候論』の古い本文であるのに対して、やや抵抗がある。

第二に、『和名抄』が『諸病源候論』の本文を独自に改変したとみる見方である。

すでに第二節から第四節で論じたように、『和名抄』が引く「病源論」における独自の異文が見られる例は①聾耳・⑧嘔吐・⑨喉痺・⑪胡臭・⑬黄疸・⑰癰癤・⑳鬼舐頭・㉑漆瘡・㉒風癰疹がある。そのうち、⑧嘔吐・⑬黄疸二例は、和訓に対応するために、本文を改変した操作の痕跡が見られる。

『和名抄』⑭臨瀝の和訓として注されるのは「之太天由波利」、すなわち「したでーゆばり」である。「したで」あるいは「しただる」は『類聚名義抄』に「淋」の古訓として挙げられ、「ゆばり」は「尿」の字にあたり、つまり「小便」のことである。『和名抄』の本文「小便滴瀝也」はこの和訓に対応しているように見える。

「滴瀝」が見られる最古の用例は『日本書紀』神代上「礮馭慮島での聖婚と大人洲の誕生」という神話から見られる。その訓みが「淋」と相通じて、「しただる」である。

伊奘諾尊・伊奘冉尊、立於天浮橋之上、共計日、底下豈無国敷、廼以天之瓊（瓊、玉也。此云努。）矛、指下而探之、是獲滄溟。

其矛鋒滴瀝之潮、凝成一嶋。名之曰礮馭慮嶋(16)。

伊奘諾尊・伊奘冉尊、天浮橋の上に立たし、共に計りて曰はく、「底下に、豈国無けむや」とのたまひ、廻ち天之瓊へ瓊は、玉なり。此には努と云ふ。〽矛を以ちて、指し下して探りたまひ、是に滄溟を獲き。其の矛の鋒より滴瀝したたる潮、凝りて一島に成れり。名けて礮馭慮島と曰ふ。

それに、『和名抄』と同じ平安中期安和二年（九六九）頃成立の有職故実書・源高明撰『西宮記』八「令行節会等飲酒」にも、「滴瀝」という言葉が確認される。

五巡後到着者可行三盃（中略）非録事措手籌罰三盃、滴瀝、三遅（17）。

④鬼舐頭における「師説」注記について、源順が有職故実書に見える質の注記を引用した可能性があるとすでに第三節で述べたが、この「滴瀝」〓「しただる」も、医学と異なる分野の書籍から仮借するのではないか。

## 第六節 『和名抄』『医心方』における「病源論」

以上、『和名抄』と『医心方』が共通して『諸病源候論』を引用する二七例について検討した。

第一に、『医心方』同様、源順は『和名抄』撰述に際して、『諸病源候論』から「脈論」をいつさい採録しない。このことは、平安中期における中国医書の受容に際して、脈論に説く脈による診断方法や理論に、あまり関心が持たれていなかったことを示唆するのではないか。『医心方』に先立ち、医書ではない『和名抄』が脈論を引用しない点は、注目に値する。

第二に、専門的な医書である『医心方』は、『諸病源候論』から脈論を除くほぼ全文から、原典の文章に手を加えず、長文をそのま

ま引用する。しかし、分類体漢和辞書である『和名抄』は、和訓の掲出に最小限必要な語彙・語義のみを引用している。

第三に、『和名抄』が、『医心方』と同じ『諸病源候論』の箇所を引用する二七例のうち、③雀盲・⑤欬嗽・⑥欧吐・⑦津頤・⑧呪吐・⑨喉痺・⑩胡臭・⑬脱疔・⑮疥瘍・⑰癰・⑱浸淫瘡・⑲瘤・⑳眈目・㉑漆瘡・㉒飼面・㉔白癜・㉕歷易・㉖肉刺・㉗風癰の十九例は『諸病源候論』の各項目の冒頭部を引用する。

第四に、①聾耳・②目翳・④喎僻・⑩重舌・⑫虻虫・⑯黄疸・㉑鬼舐頭の七例は、引用文が『諸病源候論』の冒頭部ではない。これは、源順の『和名抄』撰述のくふうを反映した本文の操作、改変によるものである。

第五に、『諸病源候論』『医心方』の本文とは異なる『和名抄』独自の異文①聾耳・⑧呪吐・⑨喉痺・⑩胡臭・⑯黄疸・⑰癰瘡・㉑鬼舐頭・㉒漆瘡・㉗風癰の九例は、源順による『和名抄』編纂上の工夫を反映するものであると考えられる。この用例に限っていえば、『諸病源候論』に現存諸本とは別系統の本文が存在し、『和名抄』がこれを引用する可能性は、むしろ低いのではないか。

『和名抄』と『医心方』は、いずれも『諸病源候論』から多大な影響を受けた。『和名抄』は分類体漢和辞書として、和訓の掲出を旨とする。その性格から文体を統一化するためのくふうが、『諸病源候論』引用に際して、『和名抄』独自の異文を生みだしたのである。一方、『医心方』は『諸病源候論』から「脈論」を排除し、その他の項目はほぼ全文を忠実に引用することによって、『大同類従方』『金蘭方』につぐ最初期の日本の医書としての体裁を整えたのである。

注

(1) 拙稿「医心方の基礎的な研究」(『外国語学会誌』第四二号、大東文化大学外国語学会、二〇一三年三月)。

(2) 小曾戸洋『中国医学古典と日本―書誌と伝承―』(塙書房、一九九六年二月)。

- (3) 王應麟『玉海』(華文書局、一九六四年一月)。
- (4) 澁江全善・森立之『経籍訪古志』(『日本蔵漢籍善本書志書目集成』所収、北京図書館、二〇〇三年六月)。
- (5) 同右(2)書。
- (6) 篠原孝市・小曾戸洋編『宋版諸病源候論』(「東洋医学善本叢書」所収、東洋医学研究会、一九八一年十月)。
- (7) 同右(2)書。
- (8) 小曾戸洋『諸病源候論』対経表』(『東洋医学善本叢書』、東洋医学研究会、一九八一年十月)。
- (9) 『外台秘要方』(オリエント出版社、一九八一年十月)。
- (10) 同右(2)書。
- (11) 馬渕和夫編『二十卷本系諸本の影印対照』(勉誠出版、二〇〇八年八月)。
- (12) 藏中進「和名類聚抄と遊仙窟」(『神戸外大論叢』第一八号、神戸市外国語大学、一九六七年十月)。
- (13) 藏中しのぶ「『顔氏家訓』と『和名類聚抄』―『遊仙窟』「師説」注記との比較から―」(『立命館文学』第六三〇号、立命館大学人文学会、二〇一三年三月)。
- (14) 同右。
- (15) 同右。
- (16) 小島憲之校注『日本書紀』(新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年四月)。
- (17) 土田直鎮・所功校注『西宮記』(神道大系編纂会、一九九三年六月)。

### 第三章 『和名類聚抄』所引「黄帝内経」攷

『和名抄』が「黄帝内経」として引用する三例がある。しかし、これは今日に一般的に知られる『黄帝内経素問』あるいは『黄帝内経靈樞』とは別、『黄帝内経明堂類成』であることと狩谷掖齋が指摘される。現存する『黄帝内経明堂類成』は、全十三巻のうちわずか一巻であるが、『医心方』と唐代の医書に数多く引用され、その本来の様子をうかがうことができる。本章は、『和名抄』の本文を『医心方』と比較して考察することによって、平安時代中期の漢籍享受と類書編纂の実態を解明するのを目的とする。

#### 第一節 『和名抄』における「黄帝内経」の引用

『和名抄』に「黄帝内経」の引用例が次の三例確認される。そのすべてが、十卷本系では巻二、廿卷本系では巻三に配される。

表1・『和名類聚抄』所引「黄帝内経」本文

No.	掲出語	
①	涕淚 承泣附	<p>説文云、涕淚、〈体類二音、奈美太。〉目汁也。</p> <p>黄帝内経云、目下謂之承泣。〈音急、奈美太々利。〉</p>
②	鼻柱	<p>黄帝内経云、水溝在鼻柱下。〈鼻柱、波奈波之良。〉</p>
③	人中	<p>黄帝内経云、水溝即人中也。</p>
		<p>説文云、涕淚、〈体類二反、和名奈美太。〉目汁也。</p> <p>黄帝内経云、目下謂之承泣。〈急反、奈美太々利。〉</p>
		<p>黄帝内経云、木溝在鼻柱下〈和名波奈波之良。〉</p>
		<p>黄帝内経云、木溝即人中也。</p>

狩谷椽齋『箋注』は、『和名抄』が「黄帝内経」を引く三項目「涕淚 承泣附」「鼻柱」「人中」について、次のように述べられる。隋書云、黄帝素問九卷、旧唐書作八卷、今所伝唐王氷注二十四卷、所引文、素問靈樞並無載、按唐書有黄帝内経明堂類成十三卷、楊上善撰、其書說經穴所在、則此引黄帝内経者、蓋明堂也、明堂今無伝本、望之伝抄一卷、独手太陰一經而已、不能依以按是書、可恨、又按鍼灸甲乙経云、承泣在目下七分、即是事也。

『隋書』に云はく、『黄帝素問』九卷。『旧唐書』八卷に作る。今、伝ふる所の唐・王氷の注二十四卷、引く所の文、『素問』『靈樞』並に載する無し。按ずるに、『唐書』に『黄帝内経明堂類成十三卷』有り、楊上善の撰なり。其の書、經穴の所在を説く。則ち、此に引く「黄帝内経」は、蓋し『明堂』なるや。『明堂』、今、伝本無し。望之伝ふる抄一卷、独り「手太陰」一經のみ、以て是の書に依りてを按ずること能はず、恨む可し。又、按ずるに『鍼灸甲乙経』に云はく、「承泣在目下七分」とは、即ち是の事なり。

椽齋は、『和名抄』に引用される①涕淚承泣附「承泣」の文が『素問』『靈樞』に見られないことを指摘し、『和名抄』に引用された「黄帝内経」が唐・楊上善の撰になる『黄帝内経明堂類成』であると推定する。しかし、『黄帝内経明堂類成』には伝本がなく、椽齋も手元にある抄出本には「手太陰」一經しかなく、本文を比較して校勘できないことを「恨むべし」と述べている。また、椽齋は『鍼灸甲乙経』（以下『甲乙経』と略称）をあげ、そこに『和名抄』と類似する本文があることを指摘している。さらに、椽齋は②鼻柱と③人中のところにも、以下のように述べられる。

所引蓋明堂文、按甲乙経云、水溝在鼻柱下人中、則其事也。

引く所は蓋し明堂の文なり。按ずるに、『甲乙経』に云はく、水溝は鼻柱の下の人中にあり、即ちそのことなり。

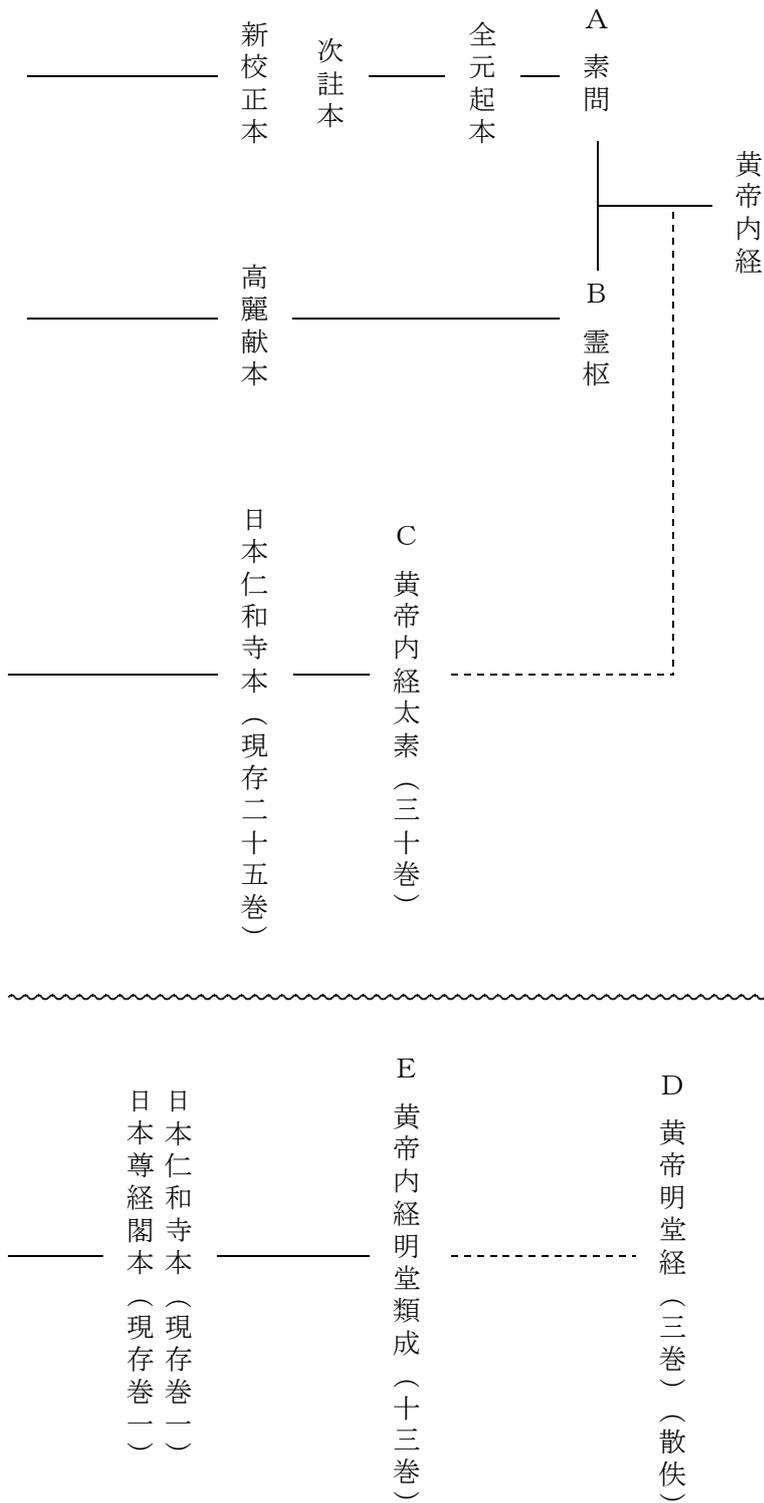
椽齋は、『和名抄』に「黄帝内経」が引かれる三例すべてについて、いずれも『黄帝内経明堂類成』の本文であろうと推測する。そ

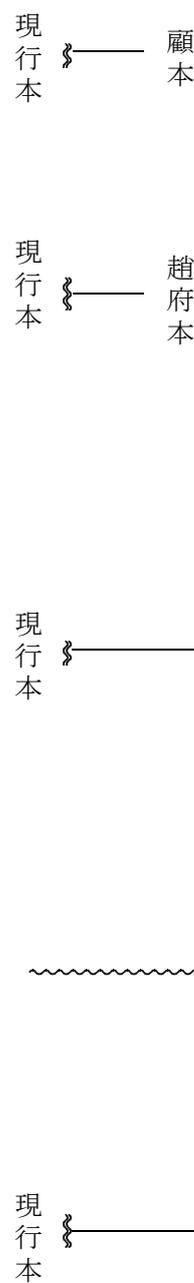
して、『甲乙経』に『和名抄』と類似する文があることを繰り返し指摘し、「即ち、そのことなり」と注記しているのである。

## 第二節 「黄帝内経」について

狩谷掖斎が指摘する『黄帝内経明堂類成』とは、どのような書であったのか。

表2・『黄帝内経』と『黄帝明堂経』関連年表





中国最古の医学書『黄帝内経』の成立は、秦漢の時代とされる。

『黄帝内経』は、A『素問』とB『靈枢』という二書から成る。A『素問』は生理・衛生・病理などの医学理論書であり、B『靈枢』は医学理論のほか、診断・治療・鍼灸術などの臨床医学に重点が置かれる。

A『素問』は、五世紀末に全元起によって注解され、さらにこれを基に宝応元年（七六二）、王氷によって改訂注解が施された。十一世紀以降、中国で医学書の研究がさかんになると、A『素問』は熙寧年（一〇六八）、林億らによって校訂された。この林億本が現行本『素問』の原本であり、林億本を通して、全元起本の一部や、王氷の注解を知ることができる。

一方、B『靈枢』は古くは全九巻であったため、『九巻』と称された。また、鍼灸術の經典であることから、『鍼経』とも呼ばれた。この書は林億の時代には中国では散佚しており、のち、元祐八年（一〇九三）、朝鮮写本に基づいて刊行されたものが、現在通行本『靈枢』である。

七世紀前半に、唐・楊上善がA『素問』・B『靈枢』の本文を内容別に再編し、注を加え、C『黄帝内経太素』を撰した。この書は八世紀に遣唐使によって日本に伝えられ、今日に伝存する。A『素問』・B『靈枢』ほど古くはないが、十一世紀以降の改訂を経ないため、文字や文体は古態をよく残すとされている(二)。

一方、D『黄帝明堂経』は、A『素問』・B『靈枢』・C『太素』とは、全く別の医学書であり、鍼灸術に必要な経脈（気血の流通

路)や経穴に関する書である。この書の成立は、A『素問』・B『靈枢』とほぼ秦漢の頃とされる。しかし原本は散佚して、現在伝わっていない。

唐代になって、C『太素』と同じく、楊上善がD『黄帝明堂経』の伝本を収集し、注釈を加えてE『黄帝内経明堂類成』撰述した。このE『黄帝内経明堂類成』も、現在には十三巻のうちわずか一巻しか伝わっていない。

掖斎が『和名抄』が引くとした「黄帝内経」の本文は、A『素問』とB『靈枢』ではなく、このE『黄帝内経明堂類成』の本文である。

隋唐代に「黄帝」の名を冠する医学書が多数存在したことは、『隋書』経籍志、『旧唐書』経籍志、『新唐書』芸文志等から知られる。また、日本では、寛平七年(八九五)成立の『日本国見在書目録』医方家の部に一六六部、一三〇九巻におよぶ医学書が掲載されている。そのうち、『黄帝内経』と『明堂経』に関連する書物は、表3のとおりである。

表3・書籍目録における『黄帝内経』『明堂経』の記載一覧

	『隋書』経籍志	『旧唐書』経籍志	『新唐書』芸文志	『日本国見在書目録』医方家
A	『黄帝素問』八巻全元起注 『黄帝素問』九巻	『黄帝素問』八巻	『黄帝素問』九巻全元起注 『黄帝素問』二十四巻王冰注	『黄帝素問』十六巻全元起注 『素問音訓并音義』五巻 『素問改錯』二巻
B	『黄帝針経』九巻	『黄帝針経』十巻 『黄帝鍼灸経』十二巻	『黄帝鍼経』十巻 『黄帝鍼灸経』十二巻	『黄帝針経』九巻 『黄帝針灸経』一巻 『針経音』一巻楊玄操撰

E	D	C
『黄帝内经明堂』十三卷 『黄帝内经明堂類成』十三卷 楊上善撰	『黄帝明堂經』三卷 『黄帝明堂經』三卷 『黄帝明堂經』三卷 楊玄孫撰注	『黄帝内经太素』三十卷 楊上善注
『黄帝内经明堂』十三卷 『黄帝内经明堂類成』十三卷 楊上善注	『黄帝明堂經』三卷 『黄帝明堂經』三卷 『黄帝明堂經』三卷 楊玄注	『黄帝内经太素』三十卷 楊上善注
『黄帝内经明堂』楊上善撰	『明堂音義』二卷 楊玄操撰	『内經太素』三十卷 楊上善撰

これら五種の医学書は、すべて『日本国見在書目録』に記載がある。このことは、丹波康頼・源順が、これらの書物をすべて参看して、『和名抄』『医心方』に引用することが可能であったことを意味する。

### 第三節 『黄帝明堂經』が引用された医書とその復原

狩谷掖斎『箋注』が、「黄帝内经」にかかわって三度にわたって掲出した『甲乙経』は、晋・皇甫謐の撰になる『甲乙経』十二卷、一・二・八編のことであり、その成立年代は未詳である。皇甫謐の自序には、次のようにある。本論文が参看した『甲乙経』の伝本は正統

本『黄帝三部鍼灸甲乙経』（静嘉堂文庫所蔵）と明藍格本『鍼灸甲乙経』（国立公文書館内閣文庫所蔵）である(2)。

乃撰集三部、使事類相從、刪其浮辭、除其重複、論其精要、至為十二卷。

乃ち三部（『素問』『鍼経（靈枢）』『明堂経』）を撰集して、事類をして相從はしむ。其の浮辭をけづり、其の重複を除き、其の精要を論じ、至りて一二卷となす。

つまり、皇甫謐の撰になる『甲乙経』は、『素問』『靈枢』『明堂経』三部の書から記事を抽出し、類聚編纂して注釈を加えた成ったものである。

掖斎が注目したように、『甲乙経』には、散佚した『黄帝明堂経』『黄帝内経明堂類成』佚文を伝える。宮川浩也氏は次のように述べられた。

『黄帝明堂経』は、『素問』『靈枢』とほぼ同時代に作られたと考えられ、はやく散佚してしまった。しかし、晋の皇甫謐の『甲乙経』をはじめとして、唐の孫思邈の『千金方』（卷二十九・卷三十）、王燾の『外台秘要方』（卷三十九）、平安中期の丹波康頼の『医心方』（卷二）が『黄帝明堂経』を収録している(3)。

また、小曾戸洋氏も『黄帝内経明堂類成』卷一の佚文と『甲乙経』の本文を照合され、両者がかなり類似することを指摘された(4)。

宮川氏によれば、『甲乙経』以外にも、『黄帝明堂経』を引用する中国の医学関係の類書には、次のようなものがある。これらから佚文を収集して、日本内経医学会が『黄帝明堂経』の本文を復原している(5)。

唐・孫思邈撰『備急千金要方』三十卷は、永徽元年（六五〇）ごろに成立した医学の類書で、出典は記されておらず、大部分は当時の処方を集録したものとされる。小曾戸氏によれば、現存する『千金方』のテキストは林億ら宋臣の校訂を経ないもの（未宋改本）と林億ら宋臣の校訂を経たもの（宋改本）の二つに分けられる。本論文で参看した『千金方』の伝本は未宋改本・南宋刊本『新雕孫真人

千金方』(静嘉堂文庫所蔵)と現存最古の宋改本・南宋刊本『備急千金要方』(国立歴史民俗博物館所蔵)である(6)。

天宝十一年(七五二)王燾撰『外台秘要方』四十卷は、すでに前章で述べた。

一方、針博士の地位にあった丹波康頼は、『医心方』巻二において経穴つぼと鍼灸について述べる。『医心方』巻二「忌鍼灸部」の目録の後には、引き続いて本文の直前に次の記述がある。

合六百六十穴(明堂経穴六百四十九 諸家方穴十一)

これによれば、巻二「忌鍼灸部」には六六〇の経穴を掲載し、そのうち、六四九までが『明堂経』からの引用、その他からの引用が十一である。

このように、椋斎が指摘した『甲乙経』のほかに、これまでの研究の成果によって、唐代の医学類書『千金方』『外台方』、また、これらから佚文を集成した『黄帝明堂経』復原本文がある。『和名抄』『医心方』に引かれた『黄帝内経』の本文を考察するためには、これらの本文を視野に入れなければならない。

#### 第四節 『和名抄』における「黄帝内経」の引用手法

『和名抄』所引「黄帝内経」と『医心方』所引「明堂経」の本文について、椋斎が指摘した『甲乙経』のほかに、唐代の医家類書『千金方』『外台秘要方』、また、『黄帝明堂経』復原本文を加えて対照し、考察を加える。

『和名抄』において、「黄帝内経」が三項目にわたって引用されているが、『医心方』が『和名抄』と一致する項目は、「承泣」「木

溝」の二項目確認される。

① 涕淚（奈美太）承泣附（奈美太々利）

抄	名	和	復原明堂經	外台秘要方	方	金	千	經	乙	甲
					宋改本	未宋改本	明藍格本	正統本		
天正本	天文本	箋注本	前田本							
說文云、涕淚、 （体）	說文云、涕淚、 （上音体、下音類、 黄帝内經云、 目下 奈美太。） 目汁出也。 （音急、奈美多多利。）	說文云、涕淚、 （体）	說文云、涕淚、 （体）	一名溪穴、一名面翳、 在目下七分…	一名麤穴、一名面扇、 在目下七分…			一名麤穴、一名面翳、 在目下七分…	一名麤穴、一名面翳、 在目下七分…	一名麤穴、一名面翳、 在目下七分…
類二反、和名奈美太。） 目汁也。	謂之承泣。	謂之承泣。	謂之承泣。	承泣、	承泣、			承泣、	承泣、	承泣、

方 心 医			
元和本	半井本	多紀本	安政本
黄帝内経云、 説文云、涕淚、 黄帝内経云、 （体 類二反、和名奈美太。）目汁也。 目下 謂之承泣。 （急反、奈美太々利。）	（一名麤穴、一名面扇、在目下七分…） 承泣、二穴。	（一名麤穴、一名面扇、在目下七分…） 承泣、二穴。	（一名麤穴、一名面扇、在目下七分…） 承泣、二穴。
（一名麤穴、一名面扇、在目下七分…） 承泣、二穴。	（一名麤穴、一名面扇、在目下七分…） 承泣、二穴。	（一名麤穴、一名面扇、在目下七分…） 承泣、二穴。	（一名麤穴、一名面扇、在目下七分…） 承泣、二穴。

第一に、『和名抄』では、「涕淚」項の「附」として「承泣」が挙げられ、そこに「黄帝内経」が引用される。一見、涙そのものと経穴とはなにも関係がないように見えるが、「附」の形で掲載するのは、「涕淚」の和訓「奈美太」と「承泣」の和訓「奈美太々利」は相似するためであろう。分類体漢和辞書である『和名抄』は、和訓の掲出を中心とし、本来分野が異なる言葉であるが、源順が和訓で関連性をむすんだのであると考えられる。

第二に、『医心方』本文は、『黄帝明堂経』復原本文、『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』と一致する。一方、『和名抄』『涕淚承泣附』本文がこれら医学書と一致するのは、「承泣」「目下」のわずか四文字にすぎない。『和名抄』は、和訓の掲出に最小限必要な語彙・語義のみを引用している。

和名抄					復原明堂經	外台秘要方	千金方		經乙甲	
元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本			宋改本	未宋改本	明藍格本	正統本
<p>黄帝内經云、木溝</p> <p>即人中也。</p>	<p>黄帝内經云、木溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>即人中。</p>	<p>黄帝内經云、木溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>即人中也。</p>	<p>黄帝内經云、水溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>即人中也。</p>	<p>黄帝内經云、水溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>即人中也。</p>	<p>黄帝内經云、木溝</p> <p>在鼻柱之下。</p> <p>即人中也。</p>	<p>水溝、</p> <p>在鼻柱下人中……</p>	<p>水溝、</p> <p>在鼻柱下人中。</p>	<p>水溝、</p> <p>在鼻柱下人中……</p>	<p>水溝、</p> <p>在鼻柱下人中……</p>	<p>水溝、</p> <p>在鼻柱下人中……</p>
<p>黄帝内經云、木溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>鼻柱、（和名波奈波之良。）</p>	<p>黄帝内經云、木溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>（和名波奈波之良。）</p>	<p>黄帝内經云、木溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>（波奈波之良。）</p>	<p>黄帝内經云、水溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>（鼻柱、波奈波之良。）</p>	<p>黄帝内經云、水溝</p> <p>在鼻柱下。</p> <p>（波奈波之良。）</p>	<p>黄帝内經云、木溝</p> <p>在鼻柱之下。</p> <p>（波奈波之良。）</p>	<p>水溝、</p> <p>（在鼻柱下人中……</p>	<p>水溝、</p> <p>在鼻柱下人中。</p>	<p>水溝、</p> <p>在鼻柱下人中……</p>	<p>水溝、</p> <p>在鼻柱下人中……</p>	

方	心	医
叢書本	安政本	半井本
木溝一穴。〈在鼻柱 下 人中…〉	木溝一穴。〈在鼻柱 下 人中…〉	木溝一穴。〈在鼻柱 下 人中…〉

第一に、『医心方』「木溝」は、『和名抄』には掲出語としてあげられていないが、「鼻柱」「人中」の二項に「木溝」に関わる「黄帝内经」の引用が確認される。『和名抄』は、文献を引用する際に、同一箇所ないしは近接する箇所から複数の掲出語を同一形式で引用することがある。『和名抄』のこの手法は、藏中進氏が『遊仙窟』引用について(7)、また、藏中しのぶ氏が『顔氏家訓』引用について(8)指摘されている。『明堂経』本文において、②鼻柱と③人中は同じ位置「木(水)溝」にあった。

第二に、『和名抄』に本文の異同「木溝」「水溝」が見られる。この語は二カ所に見えるが、前田本・天文本も「木」「水」で表記が揺れており、「水溝」に統一したのは『箋注』のみである。それは、椋斎が漢籍の本文との出典考証をおこない、本文を校勘したためであろう。『医心方』本文にも、「木溝」「水溝」の異同があるが、多紀本が「水溝」に作るのが正しい。

一方、中国の医学書類はすべて「水溝」に作る。日本の『和名抄』『医心方』のみに、「木溝」という誤写が確認される。『医心方』は、「水溝」を誤って「木溝」と作っている。『医心方』の引用書目には、唐代医書『千金方』『外台秘要方』の書名が見られる。特に『千金方』は、引用回数は四九〇回にのぼる。丹波康順が『医心方』撰述に際して、『千金方』『外台秘要方』を参看したことは疑う余地がない。にもかかわらず、なぜ「水溝」を「木溝」と誤ったのか。

第一の可能性は、『医心方』半井家本の誤写である。しかし、半井家本にもう一カ所の「木溝」が確認される。

禾扇二穴、一名頤、在直鼻孔下俠木溝旁五分。：

『医心方』「木溝」は二カ所確認され、これ以外、「水溝」「木溝」が見られない。すなわち、「木溝」は『医心方』を撰述する当時の誤写であると考えにくい。『医心方』多紀家旧蔵本が「水溝」と正しく作っているのは、書写年代が比較的新しく、本文を改訂したものである可能性が高い。

第二の可能性は、平安中期に中国から伝来された『明堂経』が誤って「木溝」に作る。そこで、『医心方』が二カ所とも「木溝」と抄写される。くわえて、『医心方』より五十年ほど先に成立した『和名抄』の本文にも「木溝」確認され、両書が同じ系統の『明堂経』写本を見た可能性が高い。

図1・『医心方』「半井本」巻二・「木溝」項

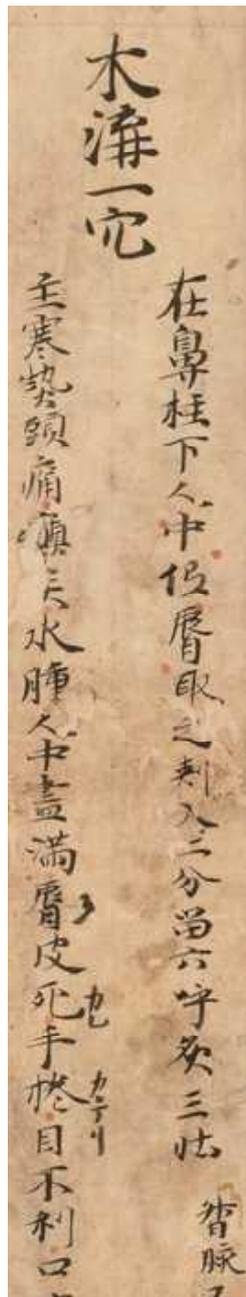
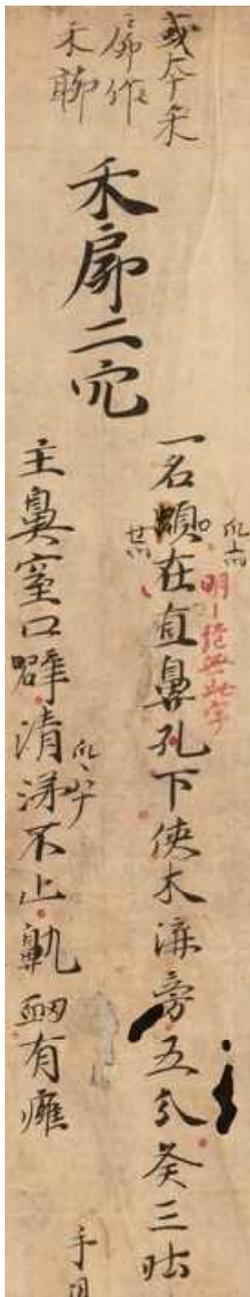


図2・『医心方』「半井本」巻二・「禾扇」項



## 第五節『和名抄』における「黄帝内経」

『和名抄』が引用する「黄帝内経」本文について、狩谷掖斎は『黄帝内経明堂類成』と推定した。しかし、『明堂類成』は散佚し、現在では一巻しか伝存していないため、その本文を直接に確認することができない。掖斎は「黄帝内経」の出典を考証することができず、『甲乙経』の本文が『和名抄』に類似することを指摘した。掖斎がこの考えにかなり固執していたことは、三箇所「黄帝内経」引用箇所すべてに、『甲乙経』の書名を引くことからもうかがわれる。

掖斎以後、『黄帝明堂経』を引用する医学の類書の研究が進み、『医心方』をはじめ、唐代の医学類書『千金方』『外台秘要方』の引用状況が明らかにされ、また、『黄帝明堂経』の復原本文が作成された。

これら唐代医書の本文と、『和名抄』『医心方』所引『明堂経』本文を比較したところ、『和名抄』の引用手法と類聚編纂意識は、『医心方』のと異なるところが見える。すでに前章で論じたように、専門的な医書である『医心方』は、『明堂経』からほぼ全文から、原典の文章に手を加えず、長文をそのまま引用する。しかし、分類体漢和辞書である『和名抄』は、和訓の掲出に最小限必要な語彙・語義のみを引用している。

また、『医心方』半井家本に、わずか二カ所ではあるが、『和名抄』諸本と同じ文字の誤りが確認された。このことは、平安中期に日本に伝わった『明堂経』の本文には誤りがあった可能性を示唆する。

注

(1) 小曾戸洋『中国医学古典と日本―書誌と伝承―』（塙書房、一九九六年二月）。

- (2) 『東洋医学善本叢書7 脈経・鍼灸甲乙経』(オリエント出版社、一九八一年十月)。
- (3) 宮川浩也「解説」日本内経医学会『黄帝内経明堂』(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部、一九九九年三月)。
- (4) 同右(1)書。
- (5) 同右(3)書。
- (6) 『備急千金要方』(オリエント出版社、一九八九年五月)  
『新雕孫真人千金方・真本千金方』(オリエント出版社、一九八九年五月)
- (7) 藏中進「和名類聚抄と遊仙窟」(『神戸外大論叢』第一八号、神戸市外国語大学、一九六七年十月)。
- (8) 藏中しのぶ「『顔氏家訓』と『和名類聚抄』―『遊仙窟』「師説」注記との比較から―」(『立命館文学』第六三〇号、立命館大

学人文学会、二〇一三年三月)。

# 第四章 『和名類聚抄』所引「針灸経」攷

## 第一節 『和名抄』における「針灸経」の引用

『和名抄』における「針灸経」の引用例は、八例がある。そのすべてが、十卷本系では卷二、廿卷本系では卷三に集中している。『和名抄』に引用される「針灸経」八例の本文は次の表1である。

表1・『和名類聚抄』所引「針灸経」本文

No.	掲出語	十卷本系	廿卷本系
①	顛会	針灸経云、顛会、一名天窓。〈顛音信、字亦作凶、和名阿太万。〉楊氏漢語抄云、顛。〈訓上同、音於交反。〉	針灸経云、顛会、一云天窓。〈顛音信、字作凶、和名阿太万。〉一云顛。〈於交反、訓上同。〉
②	蟀谷 髮際附	針灸経云、耳以上入髮際一寸半、有二穴、応嚼而動、謂之蟀谷。〈和名古米賀美。髮際、加美岐波。〉	針灸経云、耳以上入髮際一寸半、有二穴、応嚼而動、謂之谷。〈和名古米加美。〉髮際。〈加美岐波。〉
③	完骨	針灸経云、完骨、〈美々世々乃保禰。〉耳後大骨也。	針灸経云、完骨、〈和名美々勢々乃保禰。〉耳後大骨也。
④	髀髻	広雅云、髀髻。〈二音曷亏。針灸経云、缺盆骨、肩骨也。加太乃保禰。〉	広雅云、髀髻。〈二音曷亏。針灸経云、缺盆骨、肩骨也。和名加太乃保禰。〉
⑤	骨	野王案、骨、〈音忽、保禰。〉肉之核也。針灸経注云、缺盆骨、肩骨也。鳩尾骨、臆前骨也。	野王案云、骨、〈忽反、和名保禰。〉肉之核也。針灸経注云、鳩尾骨、臆前骨也。
⑥	陰囊	針灸経云、陰囊、〈俗云布久利、其義見疾病部陰類下。〉太素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、	針灸経云、陰囊、〈俗云布久利、其義見病類陰類下。〉大素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、茎

		莖垂之二以応之。〈今案莖者玉莖、垂者陰囊也。〉女子有陰而不足二節故得懷子也。
⑦	月水	針灸経云、月水不通、則灸氣穴。〈月水、俗云佐波利。〉
⑧	陰類	針灸経云、治陰類方、〈類音杜回反、一名下重、俗云曾比。〉令莖頭下向陰囊縫、当頭所着処、灸其縫上七、即有驗矣。
		針灸経云、月水不通、則灸氣穴。〈月水、俗云佐波利。〉
		針灸経云、治陰類方、〈類音杜回反、一名下重、俗云曾比。〉令莖頭下向陰囊縫、当頭所着処、灸其縫上七壯、即有驗矣。

『和名抄』に引かれる「針灸経」について、狩谷掖斎は①頤会のところに以下のように述べている。

隋書云、針灸経一卷、积僧匡、又云、針灸経一卷、不著撰人名氏、唐書云、黄帝針灸経十二卷、今並無伝本、不知源君所引何氏書、而本書所引針灸経、與針灸甲乙経、其文多同、唯此及病類陰類条、所引文無載

『隋書』に云はく、「『針灸経』一卷、积僧匡」と。また云はく、「『針灸経』一卷」と、撰人の名氏を著さず。『唐書』に云はく、「『黄帝針灸経十二卷』」と、今並びに伝本なし。源君の引く所は何氏の書を知らず。而して本書の引く所の「針灸経」は、『針灸甲乙経』と、其の文多く同じ。ただこれ及び病類の「陰類」の条は、引く所の文を載することなし。

掖斎は、『隋書』『唐書』から「針灸経」と名付けられた本が確認されるが、『和名抄』に引用された「針灸経」の正体は不明であると指摘する。そのほか、『日本国見在書目録』にも、『黄帝針灸経』という書物が確認される。

#### 黄帝針灸経 一

『黄帝針灸経』は『唐書』の記録と合致するが、巻数はあわない。いずれにしても、「針灸経」は今日に伝わらないため、直接に考察することができない。

そこで、掖斎は『甲乙経』をあげ、『和名抄』①頤会・⑦陰類二例以外、引用される「針灸経」本文に類似する本文が『甲乙経』に

あると指摘している。

『甲乙経』は『素問』『鍼経（霊枢）』『明堂経』の三部の書よりできた医書である。『和名抄』所引「針灸経」本文は、前章の「黄帝内经」本文と同様、今日の『素問』『霊枢』に確認されないため、『和名抄』に引かれる「針灸経」も、『明堂経』にかかわる書物である可能性を示唆する。

『明堂経』は夙く散佚してしまい、先学の研究に拠ると、『甲乙経』をはじめとして、唐の孫思邈の『備急千金要方』、王焘の『外台秘要方』、平安中期の丹波康頼の『医心方』が『黄帝明堂経』を収録しており、さらに、日本内経医学会が、『黄帝明堂経』の本文を復原しているとすでに前章でのべた(二)。

本章も『和名抄』所引「鍼灸経」八例を、これらの医書の『明堂経』引用部分を比較した。その結果のよって、以下のように三分類する。

- (1) 『和名抄』と『明堂経』の類似本文
- ② 蟀谷髮際附・⑦月水
- (2) 『和名抄』と『明堂経』の異質本文
- ③ 完骨・④ 齶髁・⑤ 骨
- (3) 『和名抄』と『医心方』の独自本文
- ① 頤会・⑥ 陰囊・⑧ 陰類

以下その三分類にそって、『医心方』を含め、『明堂経』を引用した医書を精査し、『和名抄』の「針灸経」引用例はどのような特徴をもっているのかをあきらかにするために、考察をすすめる。

第二節『和名抄』と『黄帝明堂経』の類似本文

『医心方』をはじめ、『明堂経』を引用した医書から、『和名抄』所引「針灸経」と本文異同が少ない項目は、②蟀谷髮際附・⑦月水二例が確認される。

②蟀谷（古米賀美）髮際附（加美岐波）

名	和	復原明堂経	外台秘要方	方	金	千	経	乙	甲
				宋改本		未宋改本	明藍格本		正統本
天文本	箋注本	前田本		在耳 上入髮際一寸半。		在耳 上入髮際一寸半。	在耳 上入髮際一寸五分、 …嚼而	在耳 上入髮際一寸五分、 …嚼而	在耳 上入髮際一寸五分、 …嚼而
針灸経云、耳以上入髮際一寸半、有二穴、応嚼而動、謂之蟀谷。（和名古米賀美。髮際、加美岐波。）	針灸経云、耳以上入髮際一寸半、有二穴、応嚼而動、謂之蟀谷。（和名古米賀美。髮際、加美岐波。）	針灸経云、耳以上入髮際一寸半、有二穴、応嚼而動、謂之蟀谷。（和名古米賀美。髮際、賀美岐波。）	（在耳 上入髮際一寸五分、 嚼而 蟀谷、 取之…）	蟀谷、	蟀谷、	蟀谷、	蟀谷、	蟀谷、	蟀谷、

医 心 方				抄
叢書本	安政本	多紀本	半井本	元和本
〈在耳 上入髮際一寸半、 二穴、 嚼而 蜂谷 取之…〉	〈在耳 上入髮際一寸半、 二穴、 嚼而 蜂谷 取之…〉	〈在耳 上入髮際一寸半、 二穴、 嚼而 蜂谷 取之…〉	〈在耳 上入髮際一寸半、 二穴、 嚼而 蜂谷 取之…〉	針灸経云、耳以上入髮際一寸半、有六穴、応嚼而動、謂之蜂谷。〔和名古米加美。〕髮際。〔加美岐美波。〕 針灸経云、耳以上入髮際一寸半、有二穴、応嚼而動、謂之蜂谷。〔和名古米加美。〕髮際。〔加美岐美波。〕

第一に、『和名抄』では、「蜂谷」項の「附」として、「髮際」を挙げる。源順はこの一文から、ふたつの漢語を一括抽出し、和訓を掲出する。

第二に、『和名抄』②蜂谷髮際附の本文は、『医心方』『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』そして『明堂経』復原本文と一致する部分  
 は「耳上」「入髮際一寸半」(『甲乙経』『外台秘要方』は「一寸五分」に作る)「二穴」(『医心方』のみ)「嚼而」(『千金方』になし)「蜂谷」(『甲乙経』『千金方』は「率谷」に作る)が確認される。これらの医書は『明堂経』を引用する事実はすでに前章で述べられ、『和名抄』に引く「針灸経」も、『明堂経』と出典関係をもつ書物である可能性が高い。



方	
安政本	氣穴二穴、 〈…主 腹中痛、
叢書本	氣穴二穴、 〈…主 腹中痛、
月水不通…	月水不通…

『和名抄』⑦月水は前項②蟀谷髮際附と同様、『医心方』『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』および『明堂経』復原本文から、一致する本文「月水不通」（『医心方』多紀本は「目水不通」に作る）「氣穴」が確認される。中国の医書の多くは、長期間にわたって書写と校刻を繰り返しつつ伝承されてきたものである。特に「宋改」を経て、ほとんどの医書は「宋改」以前の状態がうかがうことができない。『和名抄』『医心方』から中国の医書と同じ本文が確認できるのは、この部分の本文は比較的に安定していると意味する。「蟀谷」の位置、そして「月水不通」の病候に対する治療法として、経穴「氣穴」に針灸術を施すことは、今日に見られる伝本までほぼ変わっていない。

### 第三節 「針灸経」と『黄帝明堂経』の異質本文

『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』『医心方』および『明堂経』復原本文から、『和名抄』所引「針灸経」と類似する本文が確認されるが、本文の性質が異なる例は③完骨・④鬲髎・⑤骨三例ある。

④鬲髎（加太乃保禰）・⑤骨（保禰）

缺盆、一名天蓋、在肩上横骨上陷者中…

箋注本	前田本	復原明堂經	外台秘要方	方	金	千	經	乙	甲
				宋改本	未宋改本	明藍格本	正統本		
鳩尾骨、 野王案、骨、(音忽、 保禰。)肉之核也。 針灸經注云、缺盆骨、 臆前骨也。	鳩尾骨、 野王案、骨、(音忽、 保禰。)肉之核也。 針灸經注云、缺盆骨、 臆前骨也。	鳩尾、 一名尾翳、一名髑髀、 在臆前蔽骨下五分…	鳩尾、 (一名尾翳、一名髑髀、 在臆前蔽骨下五分…)	鳩尾、 在臆前蔽骨下五分…	鳩尾、 在臆前蔽骨下五分…	鳩尾、 在臆前蔽骨下五分…	鳩尾、 一名尾翳、一名髑髀、 在臆前蔽骨下五分…	鳩尾、 一名尾翳、一名髑髀、 在臆前蔽骨下五分…	鳩尾、 一名尾翳、一名髑髀、 在臆前蔽骨下五分…
肩骨也。	肩骨也。	肩骨也。 加太乃保禰。	肩骨也。 加太乃保禰。	在臆前蔽骨下五分… 在臆前蔽骨下五分…	在臆前蔽骨下五分… 在臆前蔽骨下五分…	在臆前蔽骨下五分… 在臆前蔽骨下五分…	在臆前蔽骨下五分… 在臆前蔽骨下五分…	在臆前蔽骨下五分… 在臆前蔽骨下五分…	在臆前蔽骨下五分… 在臆前蔽骨下五分…



第一に、『和名抄』「天文本」「天正本」は、④齶髁は掲載されていない。「前田本」「箋注本」④齶髁の本文「缺盆骨、肩骨也」は、⑤骨に重複に挙げられる。ただし、④齶髁は「針灸経云」に作るが、⑤骨は「針灸経注云」に作る。

第二に、『医心方』『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』および『明堂経』復原本文ともに一致するような本文「缺盆」「肩骨」「鳩尾」「臆前骨」が確認されるが、本文の内容が異なる。

『和名抄』は、「缺盆骨」「鳩尾骨」のように骨の名として和訓とともに挙げられるが、『医心方』などのすべての医書は、「缺盆」「鳩尾」が経穴の名として挙げられ、それらの位置も示されている。「針灸経」は書名から見ると、②蟀谷・⑦月水のように、経穴の位置や針灸を行う方法が書かれると思われるが、骨のことを述べるのは本来、解剖学の書物であり、「針灸経」の書名と合わない。したがって、④齶髁「缺盆骨、肩骨也」は、⑤骨「針灸経注云、缺盆骨、肩骨也。鳩尾骨、臆前骨也」に作るように、「針灸経」注の本文に属すると考えられる。

第三に、狩谷掖斎は、缺盆骨のことについて次のように述べられる。

沈彤曰、膺中骨之上、自結喉下四寸、至肩端前、横而大者曰巨骨、其半環中断者曰缺盆骨、然則缺盆骨在喉下胸上、如半環者、非肩骨。

沈彤に曰く、「膺中骨の上、結喉より下四寸、肩の端の前に至り、横にして大きな者を巨骨と曰ふ。其の半環中断の者を缺盆骨と曰ふ」と。然れば則ち、缺盆骨は喉の下、胸の上に在り、半環の如き者なり、肩骨に非ず。

掖斎は、清・沈彤撰『沈氏积骨』の本文を引用し、缺盆骨と肩骨とは別なものと指摘する。

また、『医心方』卷二「鳩尾」項に、『明堂経』次の文を引用する。



方		心		医		抄		名	
叢書本	安政本	多紀本	半井本	元和本	天正本	天文本	針灸経云、完骨、	針灸経云、完骨、	針灸経云、完骨、
完骨二穴、	完骨二穴、	完骨二穴、	完骨二穴、	完骨二穴、	完骨、	完骨、	針灸経云、完骨、	針灸経云、完骨、	針灸経云、完骨、
〈在耳後	〈在耳後	〈在耳後	〈在耳後	〈在耳後	〈和美々勢々乃保禰。〉	〈和美々勢々乃保禰。〉	耳後大骨也。	耳後大骨也。	耳後大骨也。
入髮際四分…〉	入髮際四分…〉	入髮際四分…〉	入髮際四分…〉	入髮際四分…〉	〈和美々勢々乃保禰。〉	耳後大骨也。	耳後大骨也。	耳後大骨也。	耳後大骨也。

『和名抄』③完骨は、④齶髁・⑤骨とほぼ同じことが想定される。つまり、『医心方』『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』および『明堂経』復原本本文は経穴の名として解釈するが、『和名抄』に見る「針灸経」は骨の名として挙げられ、「耳後大骨也」は「鍼灸経」の注として考えるのは妥当であろう。しかも、この一文は、他の医書に全く確認されず、本文「耳後大骨」と和訓「美々世々乃保禰」もまた対応しているように見え、これは日本で付された「針灸経」注の本文であると考えられる。

#### 第四節 『和名抄』『医心方』の独自本文

『甲乙経』から確認されないが、ほかの医書に『和名抄』所引「針灸経」本文が確認される例は①頤会・⑥陰囊・⑧陰頰三例ある。



方	
安政本	凶会一穴、一名天窓。
叢書本	凶会一穴、一名天窓。
	在上星後一寸 陷者中…
	在上星後一寸 陷者中…

『和名抄』『医心方』の諸本は、「一名天窓」に作るが、『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』『頤会』ともに「一名天窓」が確認されない。『明堂経』の復原本文は、『医心方』に基づいて、復原したと思われる。「頤会」の位置は、『医心方』『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』『明堂経』の復原本文は、「在上星後一寸」（『医心方』『多紀本』は「一寸半」に作る。）のように示されている。しかし「天窓」は、『医心方』『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』『明堂経』の復原本文に、また別な項目として立てられている。その本文は次のようである。

表2・天窓（頤）の本文

抄	和		復原明堂経	外台秘要方	方	金	千	経	
	箋注本	前田本						乙	甲
天文本	ナシ	ナシ	天窓、 一名窓聾、…在曲頰下扶突後、動脈応手陷者中…	天窓、 一名窓聾、 在曲頰下扶突後、動 応手陷 中。	天窓、 在曲頰下扶突後、動 応手陷 中。	天窓、 在曲頰下扶突後、動 応手陷 中。	天窓、 在曲頰下扶突後、動 応手陷 中。	天窓、 一名窓聾、 在曲頰下扶突後、動脈応手陷者中…	天窓、 一名窓聾、 在曲頰下扶突後、動脈応手陷者中…

方 心 医				抄	
叢書本	安政本	多紀本	半井本	元和本	天正本
天窓二穴、 （一名窓聾、 在曲頰下扶突後、 動脈応手陷者中…）	天窓二穴、 （一名窓聾、 在曲頰下扶突後、 動脈応手陷者中…）	天窓二穴、 （一名窓聾、 在曲頰下扶突後、 動脈応 陷 中…）	天窓二穴、 （一名窓聾、 在曲頰下扶突後、 動脈応手陷者中…）	ナシ	ナシ

表2から、『和名抄』以外、『医心方』『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』『明堂経』の復原本文に、「天窓」という経穴が確認されており、その位置は「在曲頰下扶突後」である。すなわち、『医心方』『明堂経』復原本文では、「天窓」といえば、二カ所を指している。一方、今日に伝わる中国の医書は、「頤会」「天窓」は重ならず記されている。その具体的な位置は次である。



図2・灸経 (S. 6262) (3)

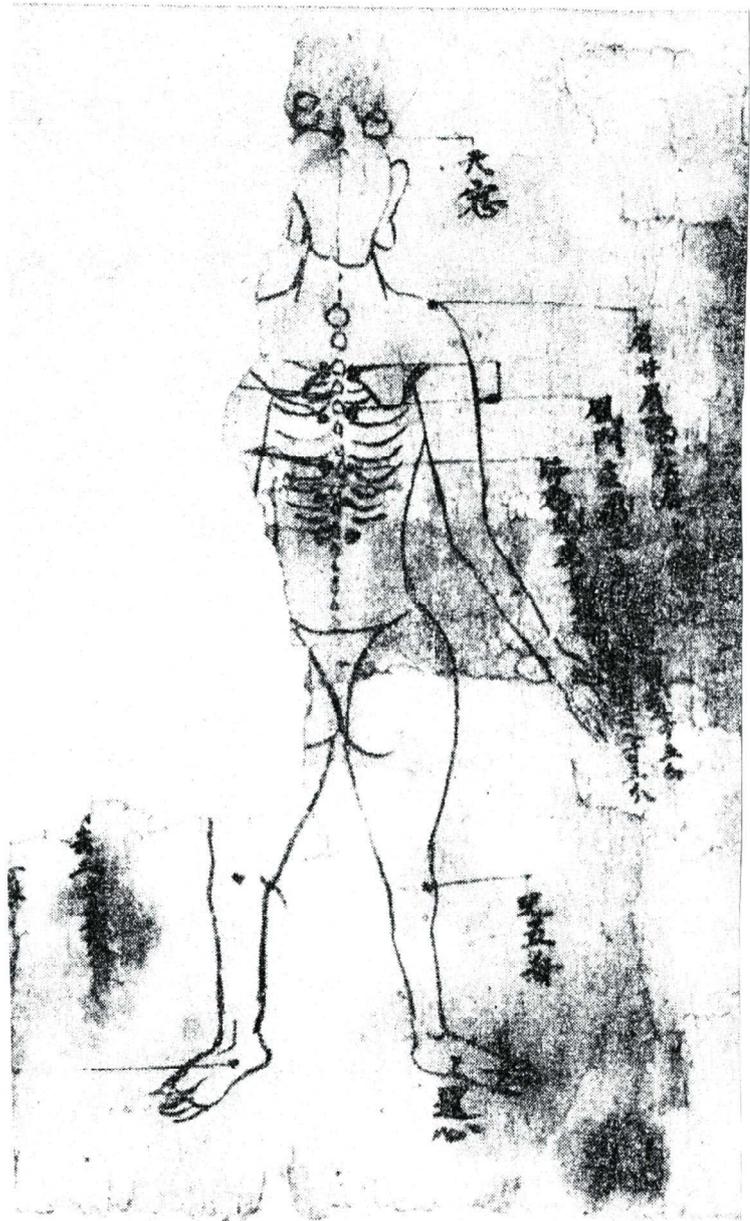


図2から、「天窓」は少なくとも、唐代までに頭にある経穴を指している。『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』に「一名テ天窓」がないのは「宋改」によって改訂されると思われるが、平安中期の『和名抄』『医心方』はその改訂前の書物を引用することができ、今日まで伝わった。

⑥陰囊（布久利）・⑧陰頰（曾比）

甲	乙	経
正統本	明藍格本	
ナシ	ナシ	

抄名和	天文本	箋注本	前田本	復原明堂經	外台秘要方	千金	
						宋改本	未宋改本
針灸經云、陰囊、俗云〈布久利、〉具 見疾病巾陰頰下。 大素經云、天有十日、	針灸經云、陰囊、〈俗云 布久利、具 見疾病部陰頰。〉 大素經云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、 上七、即 有驗矣。	針灸經云、陰囊、〈俗云 布久利、其義見疾病部陰頰下。〉 大素經云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、 陰而不足二節故得懷子也。	針灸經云、陰囊、〈俗云 布久利、其義見疾病部陰頰下。〉 大素經云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、 陰而不足二節故得懷子也。	ナシ	上七壯、即消已驗… …令雀頭 下向著 囊縫、当陰頭 灸 縫	上七壯、即消已驗… …令雀頭 下向著 囊縫、当陰頭 灸 縫	上七壯、即消已驗… …令雀頭 下向著 囊縫、当陰頭 灸 縫
針灸經云、陰囊、俗云〈布久利、〉具 見疾病巾陰頰下。 大素經云、天有十日、	針灸經云、治陰頰方、〈下音 社廻切、一名下重、俗云 曾比。〉 上七、即 有驗矣。	針灸經云、治陰頰方、〈頰音 杜回反、一名下重、俗云 曾比。〉 上七、即 有驗矣。	針灸經云、治陰頰方、〈頰音 杜回反、一名下重、俗云 曾比。〉 上七、即 有驗矣。	ナシ	上七壯、即消已驗… …令雀頭 下向著 囊縫、当陰頭 灸 縫	上七壯、即消已驗… …令雀頭 下向著 囊縫、当陰頭 灸 縫	上七壯、即消已驗… …令雀頭 下向著 囊縫、当陰頭 灸 縫

方 心 医			
叢書本	安政本	仁和本	半井本
<p>上七壯、即消有驗。</p> <p>小品方云、 上七壯、即消有驗。</p> <p>…令莖 以下向 佳囊縫、当陰 以所着処、灸縫</p>	<p>上七壯、即消有驗。</p> <p>小品方云、 上七壯、即消有驗。</p> <p>…令莖 以下向 佳囊縫、当陰 以所着処、灸縫</p>	<p>佚</p> <p>…令莖 以下向 佳囊縫、当陰 以所着処、灸縫</p>	<p>元和本</p> <p>針灸經云、陰囊、(俗云 布久利、其義見 病類陰類下。)</p> <p>大素經云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、莖垂之二以応之。(今案莖者玉莖、垂者陰囊也。)</p> <p>陰而不足二節故得懷子也。</p> <p>針灸經云、治陰類方、(類音 杜回反、一名下重、俗云 曾比。)</p> <p>上七壯、即 有驗矣。</p> <p>…令莖頭 下向 陰囊縫、当 頭 所著処、灸其縫</p>
			<p>天正本</p> <p>陰而不足二節故得懷子。</p> <p>針灸經云、治陰類、 上七壯、即 驗矣。 下音(杜回反、)一云下重、俗云(曾比。)</p> <p>…令莖頭 下向 陰囊縫、当 所著処、灸其縫</p>

第一に、『和名抄』⑥陰囊は「針灸経」を引用し、その下に割注「其義見疾病部陰類下」がある。そこで、⑥陰囊・⑧陰類を一つの表でまとめた。ただし、⑧陰類を見ても、陰囊の語義が説明されていない。

第二に、『和名抄』⑧陰類所引「針灸経」の本文は、『甲乙経』に確認されないが、『医心方』『千金方』『外台秘要方』に類似の本文確認される。特に『医心方』のほうは、『和名抄』によく似ている。『千金方』は出典が見られなく、『外台秘要方』の出典は『千金方』であると記す。一方、『医心方』の出典は『小品方』を明示している。

『小品方』は四六〇年頃、中国の陳延之によって撰述された。中国でも日本でも久しく佚書であった。ところが、昭和五十九年（一九八四）に小曾戸洋氏によって尊経閣本「経方小品」が失われた『小品方』の首巻であることが発見された<sup>(3)</sup>。しかし、発見されたのは序文・目次を含める巻一のみ、『医心方』が引用する本文が確認されない。『小品方』の目次を見ると、『医心方』は「巻十二 灸法要穴」を引用した可能性が高い。『和名抄』『医心方』は類似する本文を共有していることは、「針灸経」はまた『小品方』と出典関係を持っている。書籍目録の記録から見ると、「針灸経」は『明堂経』と『小品方』の先に成立と思われる。『和名抄』に引用された「針灸経」は、『明堂経』『小品方』など複数の書物を引用した医学類書であると考えられる。

## 第五節 『和名抄』における「針灸経」

『和名抄』が引用する「針灸経」本文について、現在では伝存していないため、その本文を確認することができない。狩谷掖斎は「針灸経」の出典を考証することができず、『甲乙経』の本文が『和名抄』に類似することを指摘した。掖斎がこの考えにかなり固執していたことは、「鍼灸経」引用箇所にも、繰り返し『甲乙経』の書名を引くことからもうかがわれる。さらに、本章は『和名抄』所引「針灸経」の本文は、『甲乙経』の『明堂経』部分に類似することを示唆する。

掖斎以後、『明堂経』を引用する医学の類書の研究が進み、『医心方』と唐代の医学類書『千金方』『外台秘要方』の引用状況があきらかにされ、また、『明堂経』の復原本文が作成された。

『医心方』『甲乙経』『千金方』『外台秘要方』の本文と『和名抄』所引「針灸経」本文を比較したところ、次のように推定すること

ができるであろう。

第一に、『和名抄』所引「鍼灸経」八例中二例は、他の医書と類似の本文が確認され、「鍼灸経」は『明堂経』と出典関係をもつ書物であると考えられる。この部分の本文は「宋改」を経ても、改変されなく安定している本文である。

第二に、『和名抄』所引「鍼灸経」八例中三例は、他の医書と異質の本文が確認され、その本文は本来「鍼灸経」注の本文である可能性が高い。しかも、内容から見ると、他の医書と矛盾が生じ、これは日本で和訓と合わせて付された「鍼灸経」の注であると推測する。

第三に、『和名抄』所引「鍼灸経」八例中三例は、『和名抄』『医心方』の独自本文が確認される。現存する唐代の医書にない本文はかつて存在しており、『和名抄』『医心方』はその伝本を参看して本文を引用した。つまり、中国では失われた『明堂経』『小品方』の本文が、日本の『和名抄』『医心方』は、独自に残存しているという解釈である。

注

(1) 宮川浩也「解説」日本内経医学会『黄帝内経明堂』（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部、一九九九年三月）。

小曾戸洋『中国医学古典と日本―書誌と伝承―』（塙書房、一九九六年二月）。

(2) 楊継州『銅人明堂之図』（学苑出版社、二〇一〇年六月）。

(3) 『敦煌宝蔵』（新文豊出版、一九八二年十一月）。

## 第五章 『和名類聚抄』所引「太素経」攷

### 第一節 『和名抄』における「太素経」の引用

『和名抄』における「太素経」の引用例は、二例がある。そのの本文は次の表1である。

表1・『和名類聚抄』所引「黄帝内经」本文

No.	掲出語	
①	膈	十卷本系
②	陰囊	廿卷本系

太素経注云、膈、（戈麦反、与保路。）曲脚中也。

太素経注云、膈、（戈麦反、和名与保呂。）曲脚中也。

針灸経云、陰囊、（俗云布久利、其義見疾病部陰類下。）  
太素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、  
茎垂之二以応之。（今案茎者玉茎、垂者陰囊也。）女子有  
陰而不足二節故得懷子也。

針灸経云、陰囊、（俗云布久利、其義見病類陰類下。）  
太素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、  
垂之二以応之。（今案茎者玉茎、垂者陰囊也。）女子有陰而  
足二節故得懷子也。

「太素経」の正確な書名は『黄帝内经太素』である。唐の楊上善が勅を奉じて『素問』『靈枢』の本文を内容別に再編集し、注を加え、三十巻にしたものである。今日伝わる『素問』『靈枢』は十一世紀以降の印刷出版による改訂されたものである。一方、「太素経」は八世紀に遣唐使によって日本に伝えられ、今日に残った。したがって構成は『素問』『靈枢』ほど古くないが、校訂を経ていないため、文字や文体は古態をよく残している。奈良時代から鎌倉時代にかけて、『太素経』は広範に使われて、諸文献にしばしば引用された。平安時代の末期、仁安二年（一一六七）から翌年にかけて丹波康頼の八代の孫、頼基は『太素経』を書写した。即ち現行『太素経』

の唯一の祖本、仁和寺本である(二)。現在三十巻の二十五が残っている。一方、中国では南宋代にこの本はすでに散佚してしまった。『和名抄』にわずかに二例の「太素経」引用例があるが、何を物語るであろうか。以下、その『和名抄』『医心方』諸本の本文を対照し、両書が引用する『黄帝内経太素』本文を精査することとする。

## 第二節 「太素経」注について

『和名抄』①臏は、「太素経」の注を引用する。その本文対照表は次である。

### ①臏（与保路）

心 医	抄 名 和			黄帝内経太素
	元和本	天正本	天文本	前田本 箋注本
多紀本	ナシ	大素経注云、臏、 （戈麦反、和名与保呂。） 曲脚中也。	大素経注云、臏、 （戈麦反、和名与保呂。） 曲脚中也。	太素経注云、臏、 （戈麦反、与保路。） 曲脚中也。
半井本	臏、 （戈麦反、ヨホロ、 曲脚也。）	大素経注云、臏、 （戈麦反、和名与保呂。） 曲脚中也。	大素経注云、臏、 （戈麦反、和名与保呂。） 曲脚中也。	太素経注云、臏、 （戈麦反、与保路。） 曲脚中也。

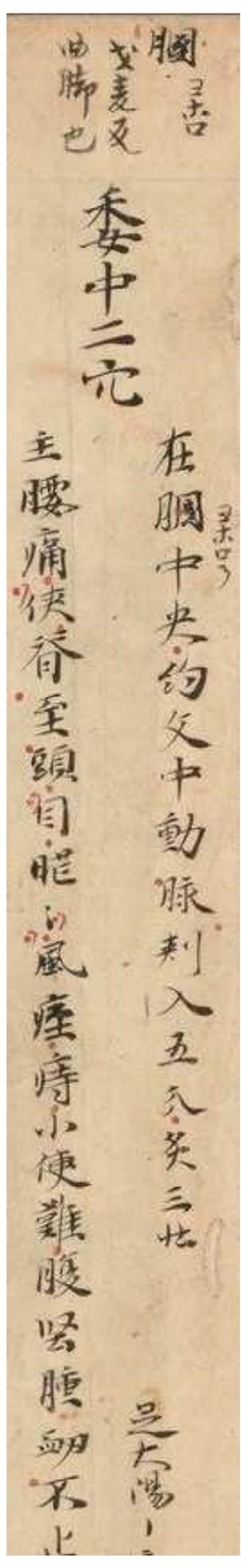
方	
安政本	朧、(戈麦反、ヨホロ、曲脚也。)
叢書本	ナシ

第一に、『和名抄』は、「朧」の発音表記の反切「戈麦反」は、『黄帝内経太素』のと一致し、『和名抄』この反切は直接に『黄帝内経太素』を継承する可能性が高い。

第二に、『和名抄』は「太素経注」で表記するのは、「曲脚中也」は『黄帝内経太素』の割注から抽出したためであろう。ただし、『黄帝内経太素』の体裁は前述したように、『素問』『靈枢』を再編集し、注を加えたものである。『黄帝内経太素』には、大字で書かれるのは、『素問』あるいは『靈枢』の本文である。一方、割注の小字で書かれるのは撰者・楊上善自身がその『素問』『靈枢』本文に対する注である。すなわち、『和名抄』は「太素経注」としても、「太素経」に対する注ではなく、『素問』『靈枢』に対する注の一種といっても過言ではないであろう。

第三に、『医心方』にはほぼ一致する本文が確認されるのは、「半井本」と「安政本」（「安政本」は「半井本」の模写本である。）のみである。これは、巻二の「委中」項の頭注である。「多紀本」と「叢書本」に頭注がないが、この文が見られない。

図1・『医心方』「半井本」巻二・「委中」項



この頭注は、出典が明記していないため、『黄帝内経太素』を引用するか、『和名抄』を引用するかは定めることができない。

第三節『黄帝内経太素』と『黄帝内経霊枢』

『和名抄』②陰囊「針灸経」の部分はすでに前章で考察した。本章は「太素経」の引用例として、考察をすすめる。

②陰囊（布久利）

心 医		抄 抄 和					黄帝内経太素
多紀本	半井本	元和本	天正本	天文本	箋注本	前田本	□：〈□：二節故得懷子也。〉
ナシ	大素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、茎垂 二以応之。 子有陰而不足二節故得懷子。 今案茎垂者玉茎、陰垂也。 女	針灸経云、陰囊、〈俗云 布久利、其義見 病類陰頰下。〉 大素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、茎垂之二以応之。〈今案茎 者玉茎、垂者陰囊也。〉 子有陰而不足二節故得懷子也。	針灸経云、陰囊、俗云〈布久利、具 見疾病巾陰頰下。〉 大素経云、天有十日、具 見疾病巾陰頰下。 子有陰而不足二節故得懷子。 茎垂 二以応之。 今案茎 者玉茎、垂 陰囊也。 女	針灸経云、陰囊、〈俗云 布久利、具 見疾病部陰頰下。〉 大素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、茎垂 二以応之。〈今案茎 者玉茎、垂者陰囊也。〉 子有陰而不足二節故得懷子也。	針灸経云、陰囊、〈俗云 布久利、其義見疾病部陰頰下。〉 大素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、茎垂之二以応之。〈今案茎 者玉茎、垂者陰囊也。〉 子有陰而不足二節故得懷子也。	針灸経云、陰囊、〈俗云 布久利、其義見疾病部陰頰下。〉 大素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、茎垂之二以応之。〈今案茎 者玉茎、垂者陰囊也。〉 子有陰而不足二節故得懷子也。	

方	安政本	大素経云、天有十日、人手有十指、辰有十二、足有十指、茎垂 二以応之。	女
叢書本	ナシ	子有陰而不足二節故得懐子。	

第一に、『和名抄』②陰囊にみられる「太素経」の引用文は、現在の仁和寺本では巻五にあたるが、その巻頭の第一紙が欠損し、確認されるのは割注の形で「二節故得懐子也」わずか七文字である。しかし、なぜ『和名抄』は①膈のように、「太素経注云」としてないのか。それは、「天有十日：」は『黄帝内経太素』の大字本文のためである。現存する『霊枢』巻二十・邪客篇に次の文が確認される(2)。

表2・『黄帝内経霊枢』と『黄帝内経太素』の本文

『黄帝内経霊枢』	黄帝問於伯高曰、願聞人之肢節以応天地奈何。 伯高答曰、 天円地方、人頭円足方以応之。 天有日月、人有両目。 地有九州、人有九竅。 天有風雨、人有喜怒。 天有雷電、人有音声。 天有四時、人有四肢。 天有五音、人有五蔵。 天有六律、人有六府。 天有冬夏、人有寒熱。	□ ∴	『黄帝内経太素』
----------	--	--------	----------

天有十日、人有手十指。  
 辰有十二、人有足十指莖垂以応之。女子不足二節以抱人形。  
 天有陰陽、人有夫妻。  
 歲有三百六十五日、人有三百六十節。  
 地有高山、人有肩膝。  
 地有深谷、人有腋臑。  
 地有十二經水、人有十二經脈。  
 地有泉脉、人有衛氣。  
 地有草藎、人有毫毛。  
 天有昼夜、人有臥起。  
 天有列星、人有牙齒。  
 地有小山、人有小節。  
 地有山石、人有高骨。  
 地有林木、人有募筋。  
 地有聚邑、人有脰肉。  
 歲有十二月、人有十二節。  
 地有四時不生草、人有無子。  
 此人与天地相応者也。

〇（〇〇〇二節故得懷子也。）  
 天有陰陽、人有夫妻。  
 歲有三百六十五日、人三百六十五節。  
 地有高山、人有肩膝。  
 地有深谷、人有掖臑（戈麦反、曲脚中也）  
 地有十二經水、人有十二經脈。  
 地有雲氣、人有衛氣。  
 地有草藎、（千古反、草名也、又死草也。）人有豪毛。  
 天有晝晦、人有臥起。  
 天有列星、人有齒牙。  
 地有小山、人有小節。  
 地有山石、人有高骨。  
 地有林木、人有募筋。  
 地有聚邑、人有脰肉。  
 歲有十二月、人有十二節。  
 地有時不生草、人有母子。  
 此人所以与天地相応者也。（幕当為膜、亦幕覆也。膜筋十二經筋及十二筋之外裹膜分肉者、名膜筋也。人身上有廿六形応天地之形也。）

表2から、「天有十日：」は『靈樞』の本文であり、『黄帝内経太素』には大字本文であるべき、『和名抄』は「太素経云」として引

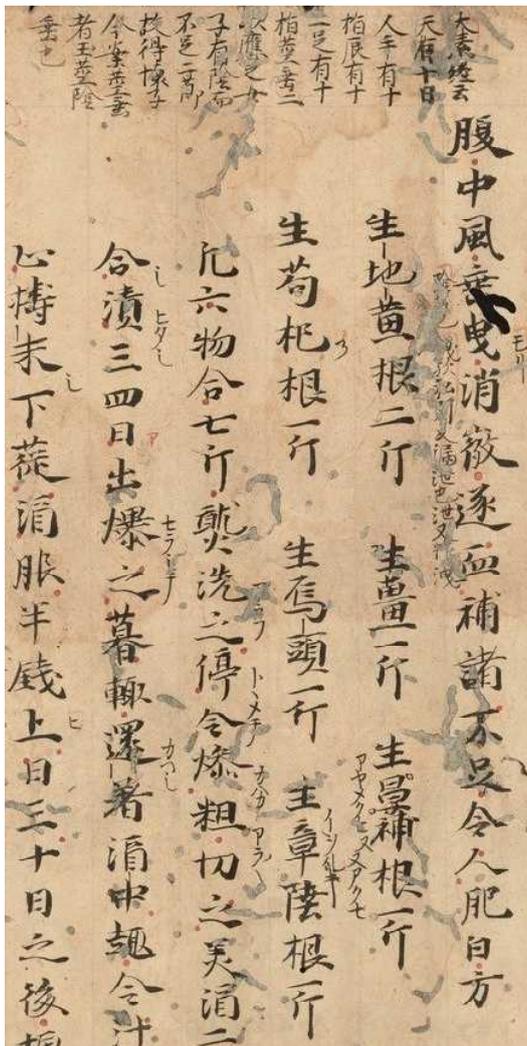
用する。

一方、今日の『靈枢』は、「女子不足二節以抱人形」も『靈枢』の本文として扱われる。しかし、全体の文体は典型的な四六駢儷体の対句形式であり、上の句は「天・地・辰・歳有…」で、下の句は「人有…」である。「女子不足二節以抱人形」はやや合わないように見える。『黄帝内経太素』を見ても、「二節故得懷子也」はもともと楊上善の注である。したがって、『靈枢』は繰り返しの書写とともに、いつか楊上善の注「女子不足二節以抱人形」を『靈枢』の本文に書き入れてしまったのではないかと考えられる。

第二に、①膈・②陰囊における「太素経」それぞれの引用は、非常に接近な場所である。これは他の文献を引用することにあたってもこの特徴が見られる。

第三に、『医心方』は、「半井本」巻十三「治虚劳五劳七傷方第一」に、『范汪方』の引用がある。その中に「垂曳」の傍注に「陰垂也」が付され、さらに頭注に「太素経」の引用がある。ただし、「今案」は『和名抄』のこれに類似するため、『医心方』この頭注は、『和名抄』を引用する可能性もある。

図2・『医心方』「半井本」十三「治虚劳五劳七傷方第一」



#### 第四節『和名抄』『医心方』における「太素経」

以上、『和名抄』と『医心方』が共通して『黄帝内経太素』を引用する二例について検討した。

第一に、この二例はともに、『黄帝内経太素』巻五冒頭部の文章から抽出された。① 膈の『和名抄』『医心方』は反切の表記まで『黄帝内経太素』のと一致する。

第二に、② 陰囊『和名抄』の引用本文は、『黄帝内経太素』巻五の第一紙は欠損するため、その全貌が見ることができない。しかし、『医心方』と『靈枢』はこの部分の文章が残っている。それらの医書を比較したところ、今日に伝わる『靈枢』に、『黄帝内経太素』楊上善の注とみなすものが確認された。

注

(1) 『黄帝内経太素』(オリエント出版社、一九八一年十月)。

(2) 『黄帝内経靈枢』(オリエント出版社、一九九二年三月)。

# 終章

## 一、『医心方』の引用書目

『医心方』の引用文献は、小曾戸洋氏・大上哲広氏「『医心方』所引文献索引」のものがある(一)。次に、小曾戸洋氏・大上哲広氏の研究実績を踏まえ、各文献の引用頻度の表を作成した。底本は「半井本」である。

表・『医心方』所引文献の頻度

【ア行】	医門方 131	慧日寺方 1	慧日寺薬方 1	延寿赤書 9	延齡経 3	延齡図 4	応験方 1		
【カ行】	開委 1	郭璞 1	夏侯氏 2	華佗針灸経 2	華佗別伝 1	華佗法 2	華佗方 8	葛氏方 398	葛稚川 1
	河図紀命符 1	蝦蟇図経 1	顔氏家訓 2	鑑真服鐘乳随年齒方 1	鑑真方 1	眼論 6	耆婆服乳方 1		
	耆婆方 60	耆婆脈決経 1	救急単験方 27	救急方 1	急薬方 1	玉箱方 7	玉箱要録 1	玉房指要 7	
	玉房秘決 28	許孝崇 1	金匱録 4	靳邵服石論 2	金騰灸経 1	百濟新集方 2	経義解 1	嵇公養生論 2	
	経心方 53	家語 1	外台方 3	玄感伝屍方 6	玄感方 3	玄女経 7	兼名苑 8	広雅 2	効験方 28
	広濟方 49	広志 2	候水鏡図 1	黄帝九卷 1	黄帝素問 1	黄帝太素経 1	黄帝明堂経 1	黄帝問素女 1	
	黄帝養生経 1	皇甫謐 21	皇甫謐救解法 1	皇甫謐薛侍郎即寒食薬発動証候四十二并消息救解法 1	皇甫謐節度論 1				
【サ行】	膏薬方 1	広利方 1	後漢書 1	晤玄子張 11	晤玄子張食経 1	胡洽方 1	呉録地志 1		

崔禹 121 崔禹食經 4 崔禹錫 1 崔禹錫食經 24 最勝王經 1 崔侍郎方 2 雜酒方 3 雜要訣 1  
 產經 188 刪繁方 17 刪繁論 7 詩 1 史記 1 私記 1 私迹方 1 七卷食經 11 七卷經 52  
 子母秘錄 25 積慧義 5 積慧義論 1 積慧義薛侍郎浴熨救解法 1 拾遺 43 集驗方 132 周書 1  
 集要方 1 集略方 1 朱思簡 7 朱思簡食經 6 徐 4 聳孝琬 1 召魂丹方 3 承祖方 3 小品方 218  
 拯要方 133 上林賦 1 食科 1 食經 17 徐思恭論 4 徐之才方 2 徐大山方 1 徐唐 1 徐伯方 6  
 新羅法師流觀秘密要術 1 新羅法師秘密方 1 新羅法師方 1 字林 1 針灸經 2 新修本草 1 晉書 1  
 秦承祖方 8 秦承祖方 2 秦承祖論 1 真人集弁方 1 新撰食經 1 神農經 10 神農食經 2  
 神農本草經 1 新錄方 105 新錄單方 8 新錄要方 1 隨時方 4 隨時應驗方 1 隋煬帝後宮諸香藥方 4  
 西王母玉壺丸方 1 世紀 1 聖記經 2 聖惠方 1 石論 5 說 1 薛公 11 薛侍郎 2 薛侍郎補餌法 1  
 薛曜論 1 說文 1 仙經 1 千金方 487 撰集要方 1 千手觀音治病合藥經 1 千手 1 膳夫經 18  
 煎藥方 1 蘇 7 曹欽 4 曹欽救解法 1 曹欽論 3 僧匡及徹公二家 2 莊子 1 曹氏 2 爽師方 1  
 僧徐方 1 搜神記 1 僧深方 143 續齊諧記 1 蘇敬 9 蘇敬注 28 蘇敬本草注 42 蘇敬脚氣論 4  
 蘇敬論 5 蘇徐 3 蘇唐 2 蘇唐論 2 素女經 2 素問 3 素問經 1 孫思邈 3 孫思邈千金方 1  
 孫思邈論 1  
 【夕行】  
 大集陀羅尼經 1 大清經 30 太素經 13 大唐延年方 1 單要方 1 湛余方 1 治眼方 11 張仲景 3  
 張仲景方 5 張仲景藥弁決 1 張文仲方 1 陳延之 2 陳延之小品方 1 陳延之論 1 枕中方 28 通玄  
 通玄經 4 通玄方 1 佺 1 佺信方 6 唐 14 唐侍中論 1 唐臨論 3 唐臨脚氣論 2 洞玄子 11  
 陶 1 陶景 1 陶景注 57 陶景本草注 22 陶氏 1 陶注 4 董暹 1 陶潛方 3 德貞常 1  
 德貞常方 3 得富貴方 5  
 【十行】  
 南海伝 3 如意方 37  
 【八行】

背臑度量法	1	梅略方	1	馬琬	15	馬琬食經	3	博物志	2	博濟安衆方	20	八十一難	2	范汪方	51
汜勝之書	1	潘氏房救解法	1	備急方	1	埤蒼	1	百病針灸	2	病源論	555	服氣導引抄	2	服石論	9
文子	1	扁鵲針灸經	3	扁鵲伝	1	龐氏論	5	抱朴子	10	本草	125	本草經	15	本草經陶景注	1
本草陶	1	本草稽疑	6	本草雜禁	1	本草拾遺	12	本草食禁雜法	2	本草蘇敬注	1				
【マ行】															
万畢方	1	明堂經	1	孟詵	61	孟詵方	1	孟詵食經	16						
【ヤ行】															
藥性論	1	葉像敷	1	楊玄操	2	楊上善	3	要急方	1	養性志	8	養生志	5	養生要集	84
養性要鈔	2	養性要録	1	養身經	1	癰疽方	1								
【ラ行】															
札記	3	落手方	1	李補闕練鐘乳法	1	劉涓子方	35	龍華方	3	龍花妙方	1	龍銜素針經	1	龍樹方	2
龍門方	56	療眼方	2	療痔病經	1	靈奇方	17	黎陽功曹范曲論	1	令李方	14	列仙伝	1	老子道經	1
録驗方	154	盧宗食經	1	呂氏春秋	1	論	2								

## 二、「脈論」について

「第二章『和名類聚抄』『医心方』引用書目「病源論」攷」では、『和名抄』『医心方』が共通して『諸病源候論』を引用する例を考察したが、一つの問題が残っている。それは、両書とも「脈論」の部分を排除したことである。ここで「律令」の教科内容の変遷から

考察してみたが、まだ未熟のもののため、終章においた。

まずは、『養老律令』の「医疾令」である。『養老律令』は藤原不比等らが「大宝律令」を改修した律と令である。養老二年（七一八）に制定とするが、天平勝宝九年（七五七）に施行する。その「医疾令」に次の文がある。

医針生。各分経受業。医生。習甲乙。脈経。本草。兼習小品。集驗等方。針生。習素問。黄帝針経。明堂。脈決。兼習流注。偃側等図。赤烏神針等経(2)。

医針の生は、各経を分ちて業受けよ。医生は、『甲乙』『脈経』『本草』習へ。兼ねて小品、集驗等の方習へ。針生は、『素問』『黄帝針経』『明堂』『脈決』習へ。兼ねて『流注』『偃側』等の図、『赤烏神針』等の経習へ。

医針生。初入学。先読本草。脈決。明堂。読本草者。即令識薬形薬性。読明堂者。即令驗図識其孔穴。読脈決者。令通相診候。使知四時浮沈洪滑之状。次読素問。黄帝針経。甲乙。脈経。皆使精熟。其兼習之業。各令通利(3)。

医針の生、初めて学に入らば、先づ『本草』『脈決』『明堂』を読め。『本草』読まば、即ち薬形薬性を識らしめよ。『明堂』読まば、即ち図を驗へて其の孔穴を識らしめよ。脈決読まば、通に相ひ診候はしめて、四時の浮沈、洪滑の状を知らしめよ。次に『素問』『黄帝針経』『甲乙』『脈経』を読め。皆精熟ならしめよ。其れ兼ねて習はむ業も、各通利せしめよ。

この二つの記録はともに、医針の生が勉強しなければならぬテキストを決めている。そのうち、『脈決』という書物があり、「令義解」に二巻とある。西晋の王叔和の撰で、漢代以来の諸派の脈診の方法を体系化した書である。『隋書』『経籍志』に「脈経十卷王叔和撰」とあり、『新唐書』『芸文誌』には「脈経十卷又二卷」とある。

次には、『続日本紀』天平宝字元年（七五七）十一月癸未条である。

十一月癸未、勅曰、「如聞、頃年諸国博士医師、多非其才、託請得選、非唯損政、亦無益民。自今已後、不得更然、其須講經生者三經、傳生者三史、医生者大素、甲乙、脈經、本草、針生者素問、針經、明堂、脈決、天文生者天官書、漢晋天文志、三色薄讚、韓楊要集、陰陽生者周易、新撰陰陽書、黄帝金匱、五行大義、曆算生者漢晋律曆志、大衍曆議、九章、六章、周髀、定天論、並任用、被任之後、所給公廩一年之分、必応令送本受業師、如此則有尊師之道終行、教資之業永継、国家良政莫要於茲、宣告所司早令施行（七）。

十一月癸未<sup>九日</sup>、勅して曰はく、「如聞らく、『頃年、諸国の博士・医師、多くその才に非ねども託請して選を得』ときく。唯に政を損ふのみに非ず、亦民に益無し。今より已後、更に然ること得ざれ、その講くべきは、經生は三經。伝生は三史。医生は『大素』『甲乙』『脈經』『本草』針生は『素問』『針經』『明堂』『脈決』。天文生は『天官書』『漢晋天文志』『三色簿讚』『韓楊要集』。陰陽生は『周易』『新撰陰陽書』『黄帝金匱』『五行大義』。曆算生は『漢晋律曆志』『大衍曆議』『九章』『六章』『周髀』『定天論』。並に任用すべし。任せらる後に、給はる公廩一年の分を、必ず、本、業を受くる師に送らしむべし。此の如くなるときは、尊師の道終に行はれて、教資の業永く継ぐこと有らむ。国家の良政、茲より要なるは莫し。所司に告げて早に施行せしむべし」とのたまふ。

この記事は『養老律令』が施行される年とされ、なかにも、『脈決』という書名が見られる。つまり、奈良時代の医針生がみな『脈決』を習得していた。ところが、平安初期の文献には、『脈決』が確認されない。次は『日本紀略』弘仁十一年（八二〇）十二月癸巳条である。

十二月癸巳<sup>二十五日</sup>。勅。置針生五人。令読新修本草經。明堂經。猫伎子鬼方各一部。兼少公集驗。千金広洛方。等中治瘡方。特給月燉。

令成其業。二云(五)。

『延喜式』(康保四年(九六七)施行)「典藥寮部」にも、『脈決』が確認されない。

凡応読医経者、大素経限四百六十日、新修本草三百十日、小品三百十日、明堂二百日、八十一難経六十日、其博士准大学博士、給酒食并灯油賞錢、(中略)凡大素経准大経、新修本草准中経、小品、明堂、八十一難経並准小経(六)。

これらの記事からみると、平安時代になったら、『脈決』もはや重要視されなくなってしまったのではないかと考えられる。つまり、教科内容が変遷していたという解釈である。その裏付けは『続日本紀』延暦六年五月戊戌条に見られる。

戊戌、典藥寮言、蘇敬注新修本草、与陶隱居集注本草相検、増一百余条。亦今採用草薬、既合敬説。請行用之。許焉(七)。

戊戌、典藥寮言さく、「蘇敬が注す『新修本草』は、陶隱居が集注の『本草』と相検ぶるに、一百余条を増せり。亦今採り用ゐる草薬は、既に敬が説に合へり。請はくは、これを行ひ用ゐうことを」とまうす。焉を許す。

これは『新修本草』を医師のテキストとすることを申請した奏言である。この奏言により、本草書は従来は陶隱居(陶弘景)の『本草集注』を用いていたものを改め、蘇敬が撰進した『新修本草』が採用された。これは、直接に『脈決』のことを述べていないが、テキストの変更の事実が存在していたと考えられる。

### 三、今後の課題

以上『和名抄』『医心方』における共通の引用書目の諸問題に関して、明らかになった部分をまとめた。しかし、本論文の論証はい

まだ不十分である。今後の研究につなげるために、今後の研究の指針を示す。

第一に、『和名抄』『医心方』ともに、「食養生類」の書物を大量に引用した。しかし、それらの文献はほぼ逸書であり、引用する類書もすくない。本論文に検証できず、まことに痛恨である。しかし、今後は、『和名抄』『医心方』その佚文を収集・比較し、それらの書物の復元が可能であるかどうかは検討が必要である。

第二に、本論文は『和名抄』を軸にして研究したが、今後は『医心方』を主軸として考察する。特に、処方類の文献の引用が大半を占めていることから、『医心方』と名付けられたと推測でき、この点が肝心だと思われる。本研究では『和名抄』の処方類文献の引用例は少なく、しかも、ほぼ散佚してしまったため、考察ができなかったが、今後は『医心方』を軸にして、その研究を続ける所存である。

注

- (1) 小曾戸洋・大上哲広「『医心方』所引文献索引」『医心方の研究』（オリエント出版社、一九九四年五月）。
- (2) 井上光貞校注『律令』（岩波書店、一九七六年十二月）。
- (3) 同右。
- (4) 青木和夫校注『続日本紀』（岩波書店、一九八九年十月）。
- (5) 『日本紀略』（吉川弘文館、一九八八年四月）。
- (6) 虎尾俊哉校注『延喜式』（神道大系編纂会、一九九一年十月）。
- (7) 同右（4）書。

# 附錄

## 一、『日本国見在書目録』医方家

三七 医方家〈千三百九卷 私略之〉 〈医針 合藥 仙方〉

黄帝素問十六〈全元起注〉 素問音訓并音義五 素問改錯二 素女問十 黄帝甲乙經十二〈玄晏生先撰〉 甲乙經四 甲乙義宗十

甲乙經私記二 皇帝八十一 難經九〈楊玄操撰〉 八十一難音義一〈同撰〉 大清經十二〈玄超撰〉 大清二上下

大清諸草木方集要一 大清神舟經上篇一大清神舟經一 大清金腋丹經一 藥菌三〈甄立玄撰〉 藥菩薩決一 藥方草本八十卷

藥石一 仙藥方一 仙藥合方一 神仙眼藥食方經一 五岳仙藥方一 五岳芝藥方一 神藥方一 雜藥方一 神仙新藥方一

神仙入山服藥方一 桐君藥錄二 平昌丸方面口雜藥方一 雜藥方一〈中尉王榮撰〉 雜藥方一〈徐文伯撰〉 雜藥方一〈姚大夫撰〉

雜單藥方一 採藥圖二 雜藥論一 雜葯方十八卷 雜葯圖二 新撰方一 神仙服藥經一 老子神仙服藥經一 雜藥四印法一

方集廿九尺〈天僧保撰〉 雜藥酒方八 作酒方一 五茄酒方一 要方十二 集驗方十二〈姚僧垣撰〉 集驗方方決一

開元広濟方五卷〈御制〉 葛氏肘後方一 葛氏肘後方三〈陶弘京撰〉 葛氏百方九 葛氏方九 胡洽方三 張仲景方九 通玄方十

通玄十 新録單要方五〈魏孝澄撰〉 監上人秘方一 徐太山隨手方一 張家方一 養要方十 新修諸要太清秘方十二 惟方四

老子孔子枕中雜方一 大清治方八 千金方卅一〈孫思邈撰〉 千金方抄一 治癰疽方七 五金作方一 調氣道引方一 道引法圖一

新修大清秘經方十二 石流丹方一 治婦人方三 諸香方一 雜丸方一 朱沙丸方一 腎氣丸方一 雜療一 神仙法方一

太一神丹精治方一 龍樹井和香方一 經心錄方六 延年秘錄方四 練石方一 養性方一〈許先生撰〉 生髮膏方一 苟杞乾煎方一  
 治渴方一 治馬病方一 治馬法六 治馬病書六 小品十二 耆婆伏苓散方一 癰疽論一 黃帝服經決十二〈王外和新撰〉  
 耆婆脈決十二〈釈羅什注〉 脈經音一〈楊玄操撰〉 新修本草廿卷〈孔玄均撰〉 神農本草七〈陶隱居撰〉 神農音七〈李君撰〉  
 雜注音七十一〈蔣孝琬加注〉 本草圖廿七 新修本草音義一〈仁揖撰〉 本草音義三〈甄立言撰〉 本草音義一〈殷子嚴撰〉  
 本草夾注音一〈陶隱居撰〉 本草注音一〈楊玄撰〉 注本草表序一〈陶隱居撰〉 食療本草三〈孟記撰〉 老子教人服藥修常住仙經一  
 神仙芝草圖一卷 仙草圖五 芝草圖二〈上下〉 黃帝針鍼九 黃帝音一〈楊玄操撰〉 類聚方經百廿 黃帝內經明堂〈楊上善撰〉  
 明堂音義二〈楊玄操撰〉 食經三〈馬琬撰〉 食經一〈同撰〉 食經四〈崔禹錫撰〉 新撰食經七 食禁一 食注一〈御注〉  
 集驗十二〈姚大夫撰〉 古今集驗五十〈甄立言撰〉 古今錄驗五十 龍樹菩薩眼經一 脚氣論一〈周礼撰集〉 產經十二〈德貞常撰〉  
 產經圖三 黃帝針灸經一 黃帝三部灸經音義一〈李議忠撰〉 玉遺針經一 刑繁總論十〈謝云泰〉 劉子十一〈龍慶宣撰〉  
 內經大素卅〈楊上撰〉 如意方十 撰養要決廿二 練皮煎一 医家雜書十九 丹決一 杏丹方一 徐文伯一 染蘇方法一 赤松子試一  
 八史術一 八素八〈董暹注〉 老子道精經一 五藏論一 病源論五十〈巢元方撰〉 素女經一 禁法九 靈奇奧秘術論一〈陶隱居撰〉  
 龍樹菩薩印法一 龍樹菩薩馬鳴菩薩秘法一〈沙門菩提造〉 軒轅皇帝錄集十二 鬼名一三五禁法八 三五神禁治病圖一 八史神圖一

## 二、本研究における『医心方』の引用本文

### 第二章

#### ① 聾耳

病源論云、耳者、宗脈之所聚、腎氣之所通、足少陰腎之經也。勞傷血氣、風熱乘虛入經、其血氣至耳、熱氣聚即有膿汁、謂之聾耳也。

(卷五・治聾耳方第四)

#### ② 目翳

病源論云、陰陽之氣皆注於目、若風邪淡氣乘於府藏、々々之氣虛実不調、故氣衝於目又不散、變生膚翳。膚翳者、明眼精上有物如蠅翅者是也。

(卷五・治目膚翳方第十六)

#### ③ 雀盲

病源論云、人有昼而精明、至暮則不見物、世謂之為雀目、言如鳥雀无所見也。

(卷五・治雀盲方第十五)

#### ④ 喎僻

病源論云、風邪入於足陽明手太陽之經、偶寒則筋急、引頰故使口喎僻、言語不正而目不能卒視。養生方云、夜臥当耳勿令有孔、風入耳

口喜喎。

(卷三・治中風口喎方第九)

⑤ 欬

病源論云、欬者、肺感於寒、微者則成欬也。肺主氣合於皮毛、邪之初傷先客皮毛、故肺先受之。五藏與六府為表裏皆稟氣於肺、以四時更王五藏六府皆有欬、各以其時感於寒而受病、故欬形証不同。

五藏之欬者、乘秋則肺先受之、肺欬之狀、欬而喘息有音、甚則唾血。乘夏則心受之、心欬之狀、則心痛喉中介々如哽、甚則咽腫喉痺。乘春則受肝之、肝欬之狀、則兩脇下痛、甚則不可以轉、兩脚下滿。乘至陰則脾受之、脾欬之狀、欬則右脇下痛痞々引於臑背、甚則不可動、々則欬。乘冬則腎受之、腎欬之狀、欬則腰背相引而痛、甚則欬涎此五藏之欬也。五藏欬久不已傳與六府、脾欬不已則胃受之、胃欬之狀、欬而嘔々、甚則長虫出肝。欬不已則膽受之、膽欬之狀、嘔膽汁肺欬不已大腸受之。大腸欬之狀、欬而遺尿。心欬不已則小腸受之、小腸欬之狀、欬而失氣々者與欬俱。腎欬不已膀胱受之、膀胱欬之狀、欬而遺尿。久欬不已三焦受之、三焦欬者而腸滿不欲食飲、此皆聚於胃關於肺、使人多涕唾而面浮腫氣逆也。

(卷九・治欬方第一)

⑥ 欧吐

ナシ

⑦津頤

病源論云、津頤之病、是小兒多涎唾流出漬於頤下也。

(卷二十五・治小兒津頤方第六十二)

⑧覘吐

病源論云、小兒吐覘者、由乳哺冷熱不調故也。

(卷二十五・治小兒吐覘方第六十三)

⑨喉痺

病源論云、喉痺者、喉裏腫塞痺痛、水漿不得入也。風毒客於喉間、氣結蘊積而生熱、故喉腫塞而痺痛、亦令人壯熱而寒七八日、不治則死。

(卷五・治喉痺方第七十)

⑩重舌

病源論云、舌者、心之候也。脾之脈起於足大指、入連於舌本、心脾有熱、熱氣隨脈衝於舌本、血脈脹起變生如舌之狀、在舌本之舌、謂之重舌。

(卷五・治重舌方第五十五)

⑪胡臭

病源論云、人腋下臭如葱豉之氣者、亦言如狐狸之氣者、胡謂之狐臭也。此皆血氣不和蘊積故也。

(卷四・治胡臭方第二十四)

⑫虻虫

病源論云、寸白者、九虫内之一虫是也。長一寸而色白、形小扁、因府藏虚弱而能發動。或云、飲白酒以桑樹枝貫牛肉炙食、并生栗所成、又云、食生魚後即飲乳酪、亦令生之。

又云、此虫長長一尺、則令人死之。

(卷七・治寸白方第十八)

⑬脱肛

病源論云、脱肛者、肛門脱出也。多由久利大腸虚冷所為、大腸虚而傷於寒、利而用氣、唾其氣下衝則肛脱出、因謂脱肛也。

(卷七・治脱肛方第九)

⑭臨瀝

ナシ

⑮瘕瘕

病源論云、消者、渴而不小便是也。由少服五石諸丸散、積經年歲石熱結於腎中、使人下瞧虛賚及至年襄血氣減少、不復制於石、々熱獨盛則腎為之慘、腎慘故引水而不小便也。其病變多癰疽、此坐熱氣留於經絡、々々不利血氣癰澁故也癰膿。

(卷十二・治消渴方第一)

⑯黃疸

病源論云、黃疸之病、此由酒食過度、府藏不和、水穀相并積於脾胃、傷為風濕所搏、瘀結不散、賚氣鬱蒸、故食如飢、令身體面目爪甲及小便盡黃而欲安臥、若渴而疸者、其病難治、疸而不渴、其病可治、發於陰部其人必嘔、發於陽部其人振寒而發賚也。

(卷十・治黃疸方第二十五)

⑰癰癤

病源論云、癰癤者、由風濕冷氣搏於血、結聚所成也。腫結如梅李也。

養生方云、人汗入諸食中食之作癰癤。

又云、五月勿食不成核菓及桃棗、發座之。

(卷十五・治癰癤方第七)

⑱ 浸淫瘡

病源論云、浸淫瘡是心家有風熱、發於肌膚、初生甚小、先癢後痛而成創、汁出浸淫漸闊乃至遍體、其創若從口出、流散四支、則者輕若從四支生、然後入口、則重以其漸々增長、因名浸淫創也。

（卷十七・治浸淫瘡方第七）

⑲ 瘤

病源論云、瘤者、皮肉中忽腫起、初如梅李大、漸長大、不癢不痛、又不結強、言瘤結不散、謂之為瘤。不治乃至壔大、則不復痛、不能斂人、亦慎不可輒破之。

（卷十六・治瘤方第十五）

⑳ 眇目

病源論云、人手足辺忽生如豆或如結筋、或五箇或十箇、相連肌裏麤於內、謂之眇目也。此是風邪搏於肌肉而變生也。

（卷四・治眇目方第二十二）

㉑ 鬼舐頭

病源論云、人有風邪在於頭、有偏虛處則髮落、肌肉枯死、或如錢大或如指大、髮不生又不痒、故謂之鬼舐頭也。

（卷四・治鬼舐頭方第九）

②漆瘡

病源論云、漆有毒、人有稟性畏漆、但見漆便中其毒、喜面癢、然後胸辟脛膕皆患、搔癢面為起腫、先眼微赤、諸所癢處以手搔之、隨手輦展起赤瘡、消已生細粟創、甚微有膿、中毒輕者、証候如此、其有重者、遍身作創小有如麻豆、大者如夾杏、膿燃疼痛、搗破小疔在小差者、隨次更生、若火燒漆、其毒氣則厲、着人急重。亦有性自耐者、終日燒煮竟不為害。

(卷十七·治漆瘡方第十二)

③飼面

病源論云、飼面者、面皮上有滓如米粒者也。此由膚湊受於風邪、搏於津液、々々之氣因虛作之也。亦言因傅胡粉而皮膚者粉氣入湊理化生之也。

(卷四·治飼面方第十七)

④白癩

病源論云、面及頸項身体皮肉色變白、与肉色不同、亦不痛痒、謂之白癩、此亦風邪搏於皮膚、血氣不和所生也。

(卷四·治白癩方第十九)

⑤癩瘍

病源論云、人頸辺及胸前掖下自然斑剥点相連、色微白而円、亦有烏色者、無痛痒、謂之癩瘍也。此亦是風邪搏於皮膚、血氣不和所生也。

(卷四·治癩瘍方第十八)

②⑥ 肉刺

病源論云、肉刺者、脚指間生肉如刺、謂之肉刺、由着靴忽、小指相揩而生。

（卷八・治肉刺方第十八）

②⑦ 風癭胗

病源論云、人皮膚虛、為風寒所折、則起隱軫。寒多則色赤、風多則色白、甚者癢痛、搔之則成瘡。

（卷三・治中風隱軫瘡方第十九）

## 謝辞

本論文は、二〇一四年三月、大東文化大学大学院外国語学研究科に提出した博士学位論文である。

本論文の書き上げたまでには、本当に多くの方々に支えられてきた。

指導教授である藏中しのぶ先生には、本当にいろいろと御世話になり、常に丁寧な御指導をいただいていた。たくさんのご迷惑をおかけしてきたにも関わらず、いつもあたたかい御助言を下さり、研究への道を開いて下さった藏中先生には、今あらためて、心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

また、中国広東外語外貿大学の韋立新先生には、大学院生の時代以来、貴重な御教示をいただいていた。さらに、大東文化大学の寺村政男先生、管寧先生には、さまざまな御助言をいただいていた。心より御礼申し上げます。

また、慶応大学の木村義之先生、元大正大学の米山孝子先生、国文学研究資料館の相田満先生、大東文化大学の藤本誠先生、群馬県立女子大学の安保博史先生、聖学院大学の濱田寛先生、元大東文化大学の福田俊昭先生、大東文化大学の青木淳子先生、中国華中師範大学の尹仙花先生、中国大連大学の黄雪蓮先生、口頭発表や博士論文執筆に際し御助言、御指導いただいた先生方にも、御礼を申し上げます。また、多大な学恩をいただいた藏中研究室をはじめ、水門の会、筑波大学説話研究会、無窮会、美夫君志会、東アジア比較文化国際会議など諸会の方々、そして、御世話になりながらここに御名前をあげられなかったすべてのの方々にも、本当に感謝と御礼を申し上げます。

最後になったが、日本留学を支えて下さった親に心より謝意を申し上げます。